

彼女はエスパー

coltysolty

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

茉莉沙は街のブティックに勤める店員だ。

彼女自身のもつ特殊な能力のせいで、これまで恋愛には臆病だった。

彼女に関心を持ったある一人の男が彼女の能力に気が付き、茉莉沙に接近していく。

茉莉沙と男の微妙な関係が、茉莉沙の心を次第に動かしていく。

※タグを増やしました。

目次

雨男ですか？	1
放送禁止？	4
超能力者達	7
コンビ愛	11
友情の証	14
談話	17
あじの開き	19
甘いひと時	21
情報開示	24
危機一髪	28
セトルダウン	31
晴れ女と雨男	34
ヒーロー論	38
あの日に帰りたい	41
探し物はなんですか？	45
あんなことこんなことあったでしょ	48
え？	52
紅葉だより	55
ミツシヨンは森の中から	59
地球の真ん中で叫んでみる	61
神様は宇宙人	65
シヨウよんだったなら	72
報告だつてばよ	75
前触れ	78

明日の行方	80
データは確かか？	84
各々方	87
初会合	91
祈りは届く	96
チキン	98
ハプニング	102
告白	107
ゲレンデラブ	112
有言実行	115
ジョーカー	119
極秘の計画	123
縁と絆	128
遠隔治療	131
花粉舞う	134
ワールドワイド	137
アクエリウム	140
バレンタイン？	143
着陸態勢	146
対戦序盤	149
撃沈	153
復活	157
絶体絶命	160
仮想現実	163
本末転倒	166

DOA	171
結集	176
過去の記憶	180
糸口	186
究極の選択	189
シーソージャツジ	195
すれ違う日々	199
全快	202
宝物（番外編）	206
デフラグ（番外編Ⅱ）	212
新世代	215
若葉の実り（前半）	218
若葉の実り（後半）	223
未来へと	227

雨男ですか？

桜のつぼみがふくらみはじめた暖かい日差しが降り注ぐ午後。

茉莉沙は店の入り口の扉を開けた。

「いらっしやいませ」

笑顔で客を迎え入れると、中へ案内し声をかけた。

「どうぞごゆつくりご覧下さい」

(この客はただの冷やかしだな・・・これ以上の声かけは必要ない)
茉莉沙は客に微笑みながら会釈をすると、すこし離れた場所から客の物色する様子を窺っていた。

(あー、高くて手がでないわ。この辺のデザインは好きなんだけどカードでもちよつと無理っぽい。だめだ。ボーナス後に来よう)
「あの、このチュニックの1サイズ下で、別の色つてありますか？」

客が茉莉沙に尋ねた。

「こちらの商品でございませぬ。少々お待ち下さい。」

茉莉沙は一旦店の奥に引つ込むと、在庫を確認し、戻ってきた。

「サイズのご用意はございますが、お色はこちらにございます」

ライトブルーとライムグリーンの種類がございます」

「そっか・・・暖色系がよかつたんですけど」

(断る理由を探しているのね)

「暖色系ですと、オレンジでしたらお取り寄せできますが」

「んー、そうですねか・・・ちよつと考えてからまた来ます」

「かしこまりました。またのご来店をお待ちしております」
「こういう客はあまり執拗に他の服を勧めても、買う気がないのだから」

いろいろ注文をつけられるのは目に見えている。

茉莉沙は、丁寧に対応し、客を見送った。

アパレル業界での業務は長くなかったが、

茉莉沙自身の特殊な能力のおかげで、ここでの売り上げは茉莉沙が一番だった。

(今日は天気も悪いし、お客さんはあまり来ないようだわ。)

在庫チェックをして、すぐにお店を閉められるよう準備しよう）
茉莉沙は目玉商品とシヨールームに展示してあるもの以外の商品を

奥の方から片づけていった。

すると、又、一人の客が店の扉を開けた。

「すみません・・・！まだお店やってますか？」

「いらっしやいませ。まだ閉店ではございませんので

見て頂いて構いません。どうぞごゆっくり」

茉莉沙は笑顔で、男性客に感じよく応対した。

（あー、フォーマルなんて着たことねえんだよな。スーツと違って

どうやって選ぶんだ？結婚式と違ってめんどいな。あの店員さん

にきいちやおうかな）

「あ、あの・・・スーツなんですけど。選んでもらったりとかできますか？」

「はい、こういった感じのものをご希望されますか？」

「実は友人の結婚式なんですよ。二次会はでないの、とりあえず式だけに

出席しようかと思ってるんですが、スーツと違って就活の時に着ただけで

結婚式とか用のつて、持ってないんすよ」

「フォーマルでしたら、こちらにございますので、お好きなデザインを御試着いただいて結構ですよ。」

「あ、じゃ、これとこれ、いいですか？」

「どうぞ。こちらが試着室でございます」

男はスーツ2着を携えて試着室に入っていった。

「あ、あのおー、見てもらえますう？」

「はい、お客様。失礼いたしますね。カーテンをお開けいたします」

男は腕が長かったため、袖まわりに違和感があった。

「お客様は腕が長くていらっしやいますので、このサイズよりワンサイズ

上をお召しになられたら如何でしょうか。脇の詰めなどは、この夕

イプでしたら

無料で行っております」

「あー、じゃ、ワンサイズ上なので、詰めてください。どれぐらいかかりますか？」

「1週間お時間をいただけましたら、仕上がります。」

「それじゃ、お願いします。」

「かしこまりました。それでは採寸させていただきますね」

(え？採寸とかすんのかよ・・・今日、おれ下着きつたねーの着てるから、見られたら恥ずか死ぬぜ・・・やべえ)

「お客様、採寸はこのままで結構です。肩と胴回りと

腕の長さを測りますので」

(え？？オレの心の叫び聞こえたの？)

「それでは、こちらを向いていただけますか？」

「あ、はい・・・」

茉莉沙は手際よく、スーツの上から、肩幅と

腕の長さを測り、スーツの中に手を回し、胴回りを測った。

採寸が終わると、名前と連絡先を簡単に

申込書に記入して貰い、茉莉沙は控えを男に渡した。

「お仕上がりは、1週間後になります。ご来店をお待ちしております」
「よろしくお願いします。」

男が店を出た途端、バケツをひっくり返したような、どしやぶりにやられた。

茉莉沙は急いで、店のシャッターを閉めた。

(この店、感じは悪くなかったんだけど、なんつーか

なんか、オレが考えてること、見透かされてたよーな気がする・・・

まあ、店員さんだから、客慣れしてんのかも shouldn't けど・・・

やべー！料金聞くの忘れてた!!!)

男は、急いで店へ引き返した。

放送禁止？

「すみません！さっきこちらで注文した者ですが！」

閉じられたシャッターを強くたたきながら男は叫ぶが

雨音にその声はかき消されてしまう。

「すみませーん！誰かいませんかーん！」

（やっべーよ。値段きいとかねえと、給料前だから準備がない！）

茉莉沙は、雨音にかき消された男の叫び声ではなく

心の声を聞きとった。

店の奥から、入り口に向かい急いでシャッターを開けると、ガラス

の扉の向こうに

通り雨にあたつてずぶぬれになった男がいた。

「今、お開けしますね。お待ち下さい」

（あーん、助かったーん）

茉莉沙は持っていたタオルを差し出した。

「こちらをお使い下さい」

（うっわーん、親切な店員さんだな・・・値段聞くだけなのに）

「あざっす！助かります！」

「いえ・・・急に降ってきましたね。先程、私

お仕上がり後の料金をお話するのを失念してしまいました。

大変申し訳ございませんでした。こちらのスーツは58,300円
で

（うぐっ）

（うぐっ・・・軽く6万ととこか・・・まあ相場なのかな。ご祝儀代もあるから

ちと痛えな・・・紳士服のノナカとかだったら半額ぐらいなんだろう
な）

「そうですか・・・」

「お客様？私がお値段を申し上げるのを忘れてしまったために

（迷惑をおかけしてしまいました。雨にまで濡れてしまって・・・
お詫びと言ってはなんですが、割引させていただきまして5万円で

提供させていただきたく思います。」

(うわっ！助かった！ものがいってきいて、ここにきたから
3万つてことはないだろうーと思つてたけど、5万ならなんとかなる
な)

「ありがとうございます。いやあ助かります」

「こちらに使い捨ての傘がございますので、どうぞご利用ください」

「え？ーいんすか？」

「はい、突然の雨天時用にお客様に使っていただくためにご用意させて
いただいておりますので

お気軽にお使いください」

「いろいろありがとーございます！いい店ですね！また利用させても
らいます！」

「どうぞひいきによろしくお願い致します」

男は機嫌よく店を後にした。

茉莉沙が過剰サービスをしたのには、理由があった。

男といえば、だいたいが女の顔をみたら次には舐め回すように
体を物色しはじめる。顔が好みではなくても、次に首の下に視線を
移し

胸の大きさを確認すると、ウエストのあたりをみて、腰回りを見る。

そして、衣服の中の裸体を想像する。

茉莉沙は二次成長以降、男のそんな思考が飛んで来る度に

えずきそうになる最悪の不快感を覚えていた。

いつの頃からか、茉莉沙は男性という生物に対して

嫌悪感しか抱かなくなっていた。どんな男も獣のように思えて仕
方なかった。

唯一こどもだけは、瞳をしっかりと見て、無邪気な笑顔で接してく
れるため

心を許せる存在だった。

ところが、先程店に訪れた男は、成人の男性であるのにもかかわら
ず、

茉莉沙の体物色を行うことなく、また勝手な男性経験を決めつける

こともなく

あくまで、茉莉沙の応対に対しての反応をしていただけだった。また、純粹に洋服を買いにきただけということも、好感がもてた。心の中を覗いても、みだらふしだらな念を一切感じなかったため上辺だけではない心からのもてなしを自然に行っていた自分に茉莉沙自身も驚いていた。

超能力者達

茉莉沙がほとんど管理を任されている

ブティック「ナカJ」は、女性服や紳士服の

フォーマルやアイビー系の洋服を主に扱っている。

いわゆるトラッド（トラディショナル）分野だ。

たまにセール品でラフなTシャツなどを扱うことも

あるが、主にフォーマルよりのカジュアル系や

ガチのフォーマルを置いている。

質のよさに加え、シンプルでコンサバタイプなデザインが

年齢層幅広く人気が高い。

先日訪れた男性客も比較的若い方だろう。

はじめてのフォーマルを新調する人も多く

この店を紹介されて訪れることも珍しくない。

「先日のお客さん、仕上がり日はすぎているけど

お忘れになってるのかしら？」

茉莉沙は、お預かりのお品ものを確認しながら

連絡先を探した。

「つー……ただ今電話にできることが……留守番電話に……」

仕上りの案内をするために、電話をかけたところ

留守電に繋がった。

「先日はご来店ありがとうございます。お直しのスーツができあがっております。」

「ご来店お待ちしております。」

茉莉沙は、電話を置くと、男が注文したスーツを倉庫にしまおうとした。

その時、

「あー！ー！ー！！！！すいません！仕上がり日、昨日だったと

おもうんですけど、遅れちゃいましたあー！ー！ー！」

男が思い切りドアを開け、素早く入り込んできた。

「いらっしやいませ。お待ちしておりますました」

茉莉沙は笑顔で答えた。

「さいせん！ちよつと仕事たてこんじやつて

昨日これなかったんつすよ。」

「たつた今、お電話でのご案内さしあげたところでした。

留守電にメッセージを入れてしまいましたので、後ほど

消去ください」

「え？わざわざ電話くれたんつすか！記念におねーさんの

声の録音、残しときますよっ！」

くすつ、と茉莉沙は笑った。

「こちらが仕上りのスーツでございます。

試着していただけますか？」

「あ！はいはいはい、着てみます。」

男は来ていた上着を脱いで、お直しスーツに袖を通した。

「おー！すこいつすね。ぴったりつすよ」

喜ぶ男の顔をみながら、茉莉沙は笑顔で応対した。

「よく、お似合いですよ。ネクタイを変えれば

冠婚葬祭どちらにもお使いいただけますので、

長く着ていただけます。」

「あー！、つすねー！。持ってたほういいつすよね。」

「もし、ネクタイがご入り用でしたら、いつでもお申し付けください。

お直しご注文いただいたお客様には会員様割引が適用になります。

す。」

「あ、ネクタイないんだつた。とりあえず結婚式用の

それも一緒に包んでください。葬式用は・・・まだ、いいや」

「それでは、こちらのお品ものが3割引適用になりますので、

おつけいたしますね。」

「あざつす！助かります！今度もおねーさんをお願いしますねっ」

「はい、お気軽にお申し付けください」

（いっやー、いろいろ助かったなー！。冠婚葬祭とか言われても

なに着たらいいかわからねーし。この店員さんに相談に乗っても

らえたらいいよね。

聞きやすいし)

ちやらちやらしているようで、考えていることは至ってシンプル。邪な考えがないこの男に、茉莉沙は好感を持った。

なぜなら、これまで対応した男性のほとんどが、茉莉沙を不快にさせる

思考ばかりだったからだ。

「じゃ、いただいていきますー!」

「ありがとうございます。またのご利用をお待ちしております」

男を送り出すと、茉莉沙は店内を片づけながら、インターネットラジオをつけた。

「今日のテーマは【超能力】。世の中には、不思議な力を持つ人がいるらしく

未だカミングアウトも解明もされておりません。

何十年前前にサイコキネシス(念力)と思われる人物がテレビに登場しましたが

インチキと判断され、画面からは消えてしまいました。

また、クレアボヤンス(透視)やテレパス(読心)の存在も

能力を持った人の証明は、やはり手品の類とされ、能力についての確信を

持つことができませんでした。タイムトラベラー(時空間移動)に関しても同様

その存在を認めてしまうと、時空の法則が狂ってしまうため、あつてはならない

ものとして、存在は否定されました。」

茉莉沙が子供のころ、サイコキネシスと思われる少年がテレビに登場した。

彼は、自由自在にスプーンを曲げたり、ぽきつ、と折ったりする能力を

披露した。

会場に居合わせた人達は、一同、驚きの声を上げたが、やがてインチキと言われ、避難されたあげく、プライバシーも侵害されて

しまう

困難に追い込まれてしまった。

ただ、超有名なコメディアンが、彼と酒の席を共にしたときにアルコールが入るとその力が倍増するらしく、目の前でガンガンスプーンを

曲げ切り落としたらしい。

現状を目の前でみたコメディアンは、彼はインチキではなく、ホンモノだ。

と、真剣な面持ちで語ったのだそうだ。

茉莉沙自身も幼稚園児と一緒に遊んでいた男の子が、おもちゃに触れず

自動車や他の玩具を動かしていたのをみたことがある。

当時、茉莉沙は自分の能力に気が付いていなかったが、目の前にいる

男の子は頭で命令すると、ものに触れずにそれを動かす力があるのだということは

漠然とわかっていた。

親の転勤でその男の子は茉莉沙のいた幼稚園から離れてしまったため

今の所在はわからない。

今現在、自分以外で同じような能力を持っているのは、弟の

真己人（まきと）で、他に超人的な能力をもった人がいるかどうかは

茉莉沙自身は知る術がない。

コンビ愛

「おまえ、気づくのおっせーよ!」

「え?・・・ごめん・・・知らなかったんだ。木菟(ずく)君。」

茉莉沙の弟、真己人は、クラスメートの木菟といつものように学校から帰路についていた。

「真己人お、おまえなあ、ボールとかしまつてあんだろ?」

部活休みだつて、普通気づくよな?なに一生懸命、校庭整備しちゃつてんの?」

その律義さ、無駄なんだけど?」

「木菟君、教えてくれて、ありがとな・・・声かけてくれなかつたらずっと地ならししてるところだつたよ・・・」

「つたく。部室に誰もいないって時点であれ?とか、思わね?」

「うん。誰もいないなあ、とは思つたんだけど、HRかなんかで遅れてるのかなあ、つて思つちやつて」

「おまえは、俺がいねーと、ボケたおしたまんだななあ。」

卒業しても一緒にいるう?でも、お前の偏差値には

ほど遠いから、大学は別々だぜ?」

「木菟君は、どこ狙つてるの?」

「ああ、俺か?俺、スポーツ推薦でつくし大学行こうかと

思つてる。体育はいちおう5だからな。うまく行けば、推薦通るかも

しれないんだ。中学のときも全国大会でたしな。」

「そうだったね!木菟君レギュラーだったもんね!点も入れたし

ユースからスカウトされたんだつたよね?」

「まあな・・・でも、ユースとなると、すんげえのたくさんいるし

そこでトツプ張る自信はなかつたから、いちおうここきた。スポーツ特待で

下駄はかせてもらったし。そこいくとお前はガチで頭で入つてきたからなあ」

「そんなことないよ。僕はギリギリだったんだ。補欠当選みたいなも

んだよ。

木菟君も知つてのとおり、超ド天然だからね・・・試験会場間違えそうになったり

教室も違つてて、同室の生徒に教えてもらつたり」

「おまえさあ、頭いいのに、なんでズレてんの？いつも何か考え事してるわけ？」

「え・・・あ、いや、こうね、なんかいつも妄想してたり」

「おー・・・やらしい妄想とか？」

「ち、違うよ！そんなんじゃないよ。宇宙開発のこととか

科学実験のこととか、SFちつくな内容だよ！」

「はいはい、そういうことにしといてあげます」

（木菟君は邪な思考がないから、安心して会話できる。

僕に敵対心もないし。いつも前向きだし。ここまでピュアな人もなかなかいない。みんなどこか、傷んでいるというか、心に隙間風が

吹いているというか、殺伐としていたりする。

木菟君の家は自営業で、ご両親が忙しい筈なのに、愛情たっぷりに育っているんだなあ。だから、優しくて思いやりもあるし、自分に自信もあるから

いつも堂々としている。困難にぶちあたっても、それを乗り越えるだけの

力がある。

今時珍しい、昭和な根性の持ち主だ。）

「あら、お二人さん。いつも仲がおよろしくてなによりね」

クラス委員の牧田七香美（まきたながみ）が背後から声をかけてきた。

（うわ・・・俺の苦手な牧田さんだ・・・なにかこう、探りを入れてくるんだよな・・・）

（体育バカ男とヘタレ秀才のコンビか。バカ男はいいとして、

このヘタレ、なんか秘密がありそうだ。たしか姉はブティックの店員だったな。

親はいないってきいてる。特に裕福でもないのに、よくこの私立学校に

入れたよな。なんかあるんじゃないか？財閥のバックがいるとか・・・)

「あ、牧田さん。僕、本屋行かなくちやいけないんで。これで！」

「おい！俺も行くよ。ルールブック買おうと思ってたんだ。待ってくれ〜！」

(とにかく、あまり近づかないようにしなくちや。怖い怖い。

いやな思考が流れてきちゃうのって、ほんとやな気分だよ・・・)

「真己人おく!!まきちちゃん!待ってくれよおく。FWの俺を出し抜いて

行っちゃうなんて、なんてすごいのおく!!!ねえ〜お前もサッカー部

入らない?」

天真爛漫な木菟といると、ほっこり心がほぐれてくる真己人だった。

友情の証

「なあ、マツキー」

「なに？木菟君。」

「実は、俺のにーちゃんがさ、腰痛めちやつて。」

俺、料理得意だから、にーちゃんの体に良い食事作ってあげようかと

思ってたんだけどさ。おすすめの本、教えてくれないか？」

「え？あの面白いお兄さん？一体どうしたの？」

「椎間板がどーとか言ってた。手術はしなくていいみたいだけど」

「そっかー。あまり刺激物はよくないから、筋肉が強くなるような食事がいいかも。この本どうかな？」

「お、いいね。ちよつとやってみるわ。俺、スポーツで将来飯くうより飯を作る人になってもいいかなって思ってたんだ」

「おお！それはいいね！スポーツに進む段取りで、調理師の免許も取っておけばいいんだよ！つぶしがきくから。木菟君は才能が豊だなあ」

「そんなことねーよ。食うのが好きだからさ、自分で好きなもの作って

食べた方がいいのが最初の動機で、あとはにーちゃんが酒のつまみになんか作ってくれていうから、甘辛味チキン揚げ作ってやった

ら、めつちや喜ばれてさ。それから、はまつちやつたんだよな」

「うわあ！それ、おいしそうだね。お酒のおつまみにもいいかもしれないけど

ごはんもすすみそうだね」

「ああ、俺の作る料理、自慢じゃないけど、なかなかいいらしいぜ」

「木菟君、今度ごちそうしてくれよ！お礼はするから！」

「あ、礼なんていらねえぜ。お前にはいつも世話になってるしな。」

にーちゃんもお前のこと気に入ってたぜ。利発な子だなあ、って」
「え・・・そんな・・・でも、僕も木菟君のおにいさん

好きだよ！」

「あらあく。相思相愛なわけえく？ぼく、焼いちゃうわ」

「ふふっ・・・木菟君兄弟も仲良しだよね。あ、そうだ。」

お兄さん、タバコ吸うよね？椎間板などを痛めているときは

タバコはよくないからね・・・ひそかに処分しちゃって」

「あく。確かに。タバコよくないよね。でも、兄貴からタバコ奪った
ら

発狂しそうだな。よくなくてもタバコ吸わなかったらストレスで

おかしくなるうっかなんか言って」

「ん・・・そうかもしれないけど、でも・・・ほんとよくないんだよ。

僕のねえちゃんも前にケガしたとき、ストイックにしてたら

なおつたらしくて。辛いものが好きだったんだけど、それをセーブ
して

大好きだったコーヒーも止めて、鶏肉ばっか食べてたらしいよ。タ

バコはもともと吸わないけど」

「なんか、アスリートみてえだな。」

「ははっ、ほんとだね。ねーちゃんタフだからさ」

「いいことだな(まっきーのねーちゃんって、たしか洋服屋さんだっけ
?)」

「お店の店員さんしてるけど、ねーちゃんだけ無欠勤らしいよ。

前に表彰されてたよ」

「店員さんってなにやってんだっけ？」

「ああ、ブティックで働いてるよ。」

「へえ！俺、行ったことねえけど・・・高いんだろ？」

「ん・・・誂えものが主だけど、リーズナブルな

カジュアル系も置いてるらしいよ。たまに処分品とかねーちゃん
が

社員価格で買ってきたの、僕がもらったりしてる」

「あああああ、この間来てたTシャツとか？」

「そう。あれそうだよ」

「なんだ、センスいいじゃねえか。今度、のぞいてみよっかな」

「あ、じゃ、僕と一緒にいこうよ。お兄さんのお見舞いになにかプレゼントとするよ」

「うれしいこと言ってくれるねえ。じゃあ、俺はその店の常連になっちゃおうかな。似つかわしくなかったら、さいせーん！って、速攻退去するけど・・・」

「似つかわしくもないなんてことないよ！常連になつてくれたら

ねーちゃん、めっちゃ喜ぶよ！」

思わぬところで意外なつながりがあったりする。

真己人と木菟の縁も別ルートでつながっているということとは

この時はまだ気づかない二人だった。

談話

「なあ、ねえちゃん。今度、店行ってもいい?」

真己人は姉の茉莉沙が用意した夕食後のデザートをほおぼりながら尋ねた。

「え? いいわよ。でも、どうしたの急に?」

「ん? 俺の友達がさ、なんか行ってみたいな〜って言うんで」

「へえ。なにか特別な行事なんかあるの? よそ行きが必要とか?」

「とき、友達のにーちゃんにお見舞いプレゼントしようかなって俺が提案したら

その友達ものぞいてみたいって。」

「お見舞いって入院してるの?」

「ん、いや腰かなんか痛めてるらしくて。で、前に俺部活の帰り

土砂降りになって、そんなとき送ってもらったんだよ。荷物多かったからさ

すぐく助かって。で、お礼ってかお見舞いにプレゼントすつかな〜って思っ

ねーちゃんとかのさ、ものがいいでしょ。俺前に来ていったTシャツとか

評判よかったからさ」

「そうなのね。いいわよ。いつでもいらっしやい。あ、でもね。

セールの時の方が安いからね。来週末からはじまるから、そのときおいで。

割引してあげるから。」

「ありがとー友達つれてくよ。好きな色とか、どんなのいーかなってそいつにみてもらうから」

「来る前に電話しなさい。お客さんいないときのほうが、ゆっくり選べるし、たくさんサービスもできるから」

「おお、さすが姉さま! 助かります!」

あのさ・・・そいつ、いいやつでさ。友達ね。心の中がまつすぐなんだよ」

「そう・・・真己人のまわりにも心のきれいな人がいたのね。よかつたわ」

「も、ってねーちゃんどこにも、そんな人いたの？いつもため息ついてたから」

「やなやつばつかなのかなって思ってた」

「ん・・・先日きたお客さんがね、一見チャライんだけど」

「邪思考がないのよ・・・素直っていうのかな。純粹なかんじで」

「へえ！俺の友達と似てるかも！そんな人が多いと嬉しいよね」

「そうね・・・でも、残念ながら多くはないわね」

「女子とかも怖いからね・・・普通の男は騙されちゃうよーな」

「かわいらしい顔で、すんごいエグいこと考えてるからね・・・」

「男は邪満載だしね。人間が嫌いになっちゃうよね」

「でも、俺はねーちゃんがいてくれるから、心が休まるけど」

「そうじゃない人達は、人の心が読めるときついんだろうなって思うよ」

「聞こえたくないことまで聞こえちゃうからね。でも、訓練すれば」

ON OFF 自由自在だよ。」

「ねーちゃんはさ、聞こえる前にわかっちゃうから、スイッチ入れられるけど、」

「俺、聞こえてからスイッチ切り替えようとしても、もう遅いんだよね」

「最初からOFFにしとけばいいのよ。先入観なく見ておくようにすれば」

コントロール効くようになるから」

「難しいなあ・・・でも、やってみるよ。今は、せつかく出会えたいいやつとの」

「つながりを大事にしたいと思ってるんだ」

「うん。ぜひ連れておいで。待ってるわ」

数日後、真己人は木菟を連れて、茉莉沙の店を訪れた。

あじの開き

木菟を連れて、姉の茉莉沙を訪ねてきた真己人。

「いらっしやいま・・・あら！真己人じゃないの！」

「友達連れてきたよ！」

「あら、こんにちは！はじめまして」

「あ・・・オレ・・・てか、ボク、真己人君の友達の

木菟と申ひます・・・」

「(くすつ) わざわざ起こしていただきまして、ありがとうございます。

狭い店ですが、ゆっくりご覧ください。なにかご要望が

ございましたら、なんなりと言ってくださいね」

(うわあ・・・なんか、すげえ店だけど、おねーさん

感じいいなあ。こんなオレみてーのにもちゃんと感じよく

対応してくれてる。弟の友達だからっつーのも

あんなかなー。いや、はん！って、ガキがつ！ってバカにする人
だつて

いるよなー。真己人もいいやつだから、ねーちゃんもいい人な
んだな。)

いきなり相手の思考を読み取るのは失礼とは思いつつ、茉莉沙は
弟が連れてきた客人のピュアな思考を読み取りながら、ほっこりと
した

気分になっていた。

(ねえ、まつきー、今お客さんいないから、あとで奥においで。

紅茶とケーキ用意しておくから)

茉莉沙は、思考でメッセージを弟の真己人に投げかけた。

(うん！ねえちゃん、ありがとう！こいつ、いいやつなんだよ！)

(わかるわよ。だから、おもてなししてあげたくなったのよ)

(ありがとう！とりあえず、商品みせてもらったら、誘うから)

(そうして)

「ねー、木菟君、お兄さんに似合いそうなTシャツつてさ

ある？」

「へ??? 兄貴の? あいつ、服のセンス皆無だからな・・・
でも、オラつちと一緒に体育会系だから、スポーツ系なら
合うと思うよ」

「そっか! じゃさ、これならどう? 濃紺でワンポイントありでさ、良く
ね?」

「あー!、ありだね。てか、こういうの着せてやったらさ、
あいつのセンスの悪さがカバーされるってか。うん、いいよ!」
「じゃさ、僕からのプレゼント。実はさ、家族割がきくから

お買い得なんだよ。あとで、ねえちゃんに梱包してもらうから、
お兄さんに渡してよ」

「へ??? そ、そんな・・・これ、高くね?」

「ってか、高いよ・・・社員割きいても、高い・・・」
「気にしない、気にしない! オレ、ねえちゃんに

貸しあるんだよね。だから、ねえちゃんがフォローしてくれるから
心配なし! 遠慮なく受け取ってくれよ! お兄さんに渡してくれ!
この間送ってもらってさー!、助かったんだよ! マジで!
てか、ここで何か買うと、ねえちゃんの成績にもなるからさ!」

「あ・・・悪いな・・・でも、せっかくだから、
そういうことなら、じゃ、甘えまくっちゃう!!!」

「うおーっ! 決定! あ、なんかさ、お客さんくる前に
ねえちゃんが奥に来てって」

「お、おく・・・?」

「おいっ!、変なこと考えちゃったりしてるのかい?」

僕と君とでブレイクタイムってことだよっ! おばかっ!」
「あ・・・ああ、そうか・・・」

二人は紅茶の香りにそそられながら、奥の休憩室へと
向かった。

甘いひと時

ポプリの香りが心地よい休憩室で、

木菟と真己人　は、茉莉沙が入れた紅茶に砂糖を入れようとしていた。

「あら、二人とも甘党なのね」

「あ、ぼくは普段運動してるから、常に甘いものが

欲しくなるんっすよ」

「そうなのね。それじゃあ、このケーキもお口に合うといいのだけだ。

このシフォンケーキ、甘さ控え目だから、物足りないかもしれないわ。」

「大丈夫っす!!!スイーツなんでもいける口っすから!

お気遣いありがとうーございます!!

(もぐっ) う、うまい!!!おいしーっす!!!」

「ねーちゃん、このふわふわ感がたまらないね!

あそこのシフォンケーキだね?」

「そうよ。いつものあのお店」

「いろいろあるんだよね。バナナ、コーヒー、バナナ、イチゴ。

ボクは、バナナが好きだけどね。木菟君は?」

「あ?え・・・オレ・・・す、ストロベリー・・・」

「ははは!なんか女子みたいだなあ!」

「わ、笑うなよ・・・いちご、うまいんだぜ・・・」

「ごめんごめん、なんか細マッチョな木菟君が、

ストロベリーとかって、予想外だったからさ」

「いやあく。スポーツ男子は、スイーツ好き多いのよ。マッチー。

うちのにーちゃんも、甘いのが好きでさ」

「あ!お兄さんも?じゃあ、これ、にーちゃんに持ってつたら?

ね、ねーちゃん。いいよね?」

「ええ、いいわよ。そのつもりで多めに買っておいたの。」

木菟君、これ、お兄さんに持って行ってあげてね」

「え???Tシャツまでいただいたちゃって、その上、スイーツまで・・・
なんか、悪いですよ・・・」

「遠慮しなくていいのよ。お得意さんなんだから！」

ね?また、いらしてね」

「あ、あああ・・・そーつすね。また来ますよ。」

セールの時に限るって感じっすけど・・・他は高くて、手が出そう
にないや」

「もちろん、セールのお知らせ致しますよ。おにいさんにも

お声かけていただけたら、サービスしますよ」

「うわあく、おねえさん、営業うまいなあ〜」

「そうだよ。ねーちゃん、成績ナンバーワンなんだから。」

でもね、無理やり売りつけたりとかはしないんだ。

しかも、良いお客さんにはとことん、サービスするんだよね?」

「ふふ・・・そうね。残念なお客様はそれなりに対応するけど

良いお客さまには、ご利用いただきやすいように、配慮したいと

思っているの。」

「おれも兄貴もちゃんとしたお店ってあまり行かないけど

でも、お姉さんのお店なら、来やすいから、こんど

兄貴をむりやりひっぱってきますよ。ちゃんとしたの着ろ〜って

コーデしてやってくださいね!」

「もちろん!いつでもいらしてね。木菟君のお兄様って

ちゃんと名乗っていただけたら、特別サービスいたしますよ!」

「あ、じゃ、お礼に、サッカー観戦チケット差し上げますよ。」

まあ・・・お姉さん、サッカー好きかわからないけど・・・」

「え?サッカー?大好きよ!ワールドカップも見に行つたぐらいだから。
ら。」

静岡の友達のところ遊びに行つた時も、エルパルスのホームグラ
ウンド

見に行つたのよ。サッカーのチケットいただけたら嬉しいわ!ね、
マッキー」

「ああ!そっか。ねーちゃんサッカー好きって言つてなかったね」

「うおっしやー！！！！これで、借りを返した気分だ！」

てか、うれしいね！恩返しできるよ」

「なに言ってるんだよ木菟君。今回のプレゼントは、僕がお兄さんへのお礼だよ。忘れないで」

「いやあ・・・おまえもねーちゃんもいい人だな。」

「木菟君の方が人がいいと思うよ。洋服のサービスより、サッカーチケットの方が」

取るの難しいし、試合によってはそっちの方が高いよ」

「あー、無問題無問題。兄貴、Jクラブのスタッフだから。」

元はコーチだったんだけど、ケガで裏方に回っちゃったけどね」

「そうなのね。サッカー関係の方とお知り合いになれるなんて

うれしいわ。お兄さんにもぜひお会いしてみたいわ」

「あー、了解っす！今度連れてきます!!」

客足の少ない夕方前のひと時、茉莉沙は弟が連れてきた友人と

楽しい休憩を過ごした。

情報開示

真己人の親友、木菟は家で兄と休日を過ごしていた。

「にーちゃん、味見して?」

「お?なんだ?スイートポテトか?」

「うん。卵きれてて、卵黄塗つてのテカリがないけどさ

味は悪くないと思うよ」

「どれどれ・・・。(もぐっ)

おーうめえ!さすがだな、わが弟!」

「いやあく料理つてさ、筋肉使うんだよね。

ある意味いい筋トレになるよ」

「そいや、シエフつて筋骨隆々な人多いよな」

「だろ?おれ、これで十分飯食つていけるんじゃないかと

思つてさ」

「おお、いけるいける。」

「そうだ。お礼に持つていこうかな・・・」

「お礼?」

「ああ、この間、マツキーの姉ちゃんところさ。

シフォンケーキごつちになつたんだよ。めつちやうまくてさ。

今度、作つてみようつかなくなんて思つてて。

まあ、今回はさつまいも安かつたから、たくさん買つちやつて

スイートポテトになつちやつたんだけどさ。

出来が悪くなかつたら、まつきーとねーちゃんに

持つていこうかなーつて思つて。」

「マツキーつて、前にオレが送つていった子?つてか

Tシャツくれた子だよね?」

「そうそう。マツキー、にーちゃんに感謝してさ。

ねーちゃんのお店のやつくれたんだよ。なんか、すごく高そうな

店なんだけど、いいよつて。ねーちゃんも割引してくれて」

「へー、どこにあんの?」

「かいわい町」

「かいわい町?」

「うん、ブティックナカJとかいう名前だったかな・・・」

「え???ナカJって、あのオーダーメイドやってる

お店?」

「あれ?なんで、にーちゃん知ってるの?」

「知ってるもなにも、この間の結婚式スーツ、

そこで作ったんだよ」

「えー!?!?!まじか?」

「ああ。オレなんかの注文をさ、感じよくやってくれて

サービスもしてくれたんだよ。あそこのおねーさん」

「あああああ、たぶん、その人、マツキーのおねーさんだよ。

背がこんくらいで、髪の毛黒で、こんくらいで、こーで、どーでしよ
?」

「そそそ、そーで、どーで、そんな感じの人。」

「あああああ、マツキーのねえちゃん確定!」

「あの子のねーちゃんだったとは・・・すっげーかんじ

よくてき。高い店だから、あんまり行ける感じじゃないって思った
けど

セール品とかいけそかなって思って、いつかまた行きたいなって

思ってたんだよ」

「シフォンケーキももらったでしょ?あれもさ、ねーちゃんが

おにいさんにどうぞって」

「おっふ!!あ、いや・・・いい人だ!!!」

「うん。マツキーもねーちゃんもいい人だよ。

マツキーさ、試験前とかにノートかしてくれて、

わかかんねーとことか教えてくれるんだよ。でもさ、

ぜんぜん嫌味じゃねーの。

『僕なんかこんなことしか得意じゃないけど、木菟くんは

スポーツもできるし料理だってうまいし、人気者だし、

僕で役に立てたらうれしいんだよ』

とかさ、秋目みたいなトーンで言ってくるんだよ。

「こいつとは、ずっと友達でいてえなってるって思ってる」

「そっかー。なんか縁を感じるな。邪満載で

「こんど、行ってみよっかなー」

「にーちゃん！俺の友達だから、割引しろとか

「そういうこと言わないくれよー！」

「あ？言うわけないでしょー。おねえさん

「こんど、お茶でもどうですか？って、そういう邪っ」

「それもやめて・・・ねーちゃんにどんびきされたら

「オレとマツキーの友情にヒビがはいるだろー！ー」

「じゃ、おまえ、取り持てよ」

「え？なに、にーちゃん、あのおねえさんに

「興味あんのかよ？」

「え？・・・いや・・・」

「ノリだよ。ノリで言ってみただけだよっ！

「あんな感じの人、周りにいねーから、なんかちよつとこう

「友達になってみてーなーって思ってる」

「まあ、友達、ってことなら、あれだと思っけど・・・

「じゃあ、今度、一緒にいけばいいじゃん。」

「ちよつと、おやじの誕生日だからさ、ネクタイとか

「プレゼントしちゃったらどう？」

「えー？したことねーのに？」

「はい、おやじ、これプレゼント、とかって？」

「心臓発作起こすんじゃない？」

「なんだ、おまえたち、こういう風の吹き回しだ？」

「(バタツ)」

「半世紀アニバーサリーだよ、でいいじゃん」

「お？おまえ頭いいね。それなら怪しくねえな。」

「ってか、その買い物プランが邪じゃね？」

「いいじゃん。お友達になりたいっていう純粹な願望と

「父上の半世紀アニバーサリーを祝うための買い物に行くっていう

「上等な口実なんだから」

「んーんーんーなんだか、弟の悪知恵に乗せられている感がないでもない……」

「いいからいいから。じゃ、来週末あけおいてよ」

「お……おう……わかったよ」

煤無（すすむ）は、弟の木菟と共に茉莉沙の店を訪れることになった。

危機一髪

放課後、真己人と木菟は教室でしゃべっていた。

「ねえ、マツキー。今日さ、にーちゃんと一緒に」

おねえさんのお店にいかうかと思うんだ」

「え？そうなの？」

「うん。この間のお礼に、スイートポテト持っていかうかなーって
思ってる。お姉さん好きかな？」

「あ！ねーちゃん、好きだよ。この間も百合が丘のスイートポテト
買ってきて、紅茶入れてブレイクタイムしてたよ」

「そっかー。売ってるような、そんなおシャンティなもんじゃ
ないんだけどさ。オレ昨日作ったら、にーちゃんがうめえから
マツキーのねーさんにもってけてっていうから」

「うわあ、そうなんだ？ねーちゃん喜ぶよ。」

「これからお兄さんと行くの？」

「うん。駅で待ち合わせ。八幡宮駅で落ち合ってる」

「一緒に行こうかと思ってる」

「あ、それなら僕も一緒に行くよ。本屋さんに用事があるから
ねーちゃんと一緒に行くよ？」

「そっか。その方が入りやすいしね。じゃあ、一緒に行こう。」

オレ、今日部活休みなんだ。マツキーは？」

「ボクも吹奏楽部は今日休み。文化祭の振り替えだって」

「よっしゃ。じゃあいつしよに行こう」

真己人と木菟は連れ立って学校を後にした。

八幡宮駅に着くと、木菟の兄が待ち構えていた。

「おおおー！ズッキーにマツキー！こっちだ〜」

真己人は笑顔で、木菟の兄、煤無に挨拶する。

「おにいさん、お久しぶりです。先日はありがとうございました」

「いや〜、こちらこそさだよ。マツキー」

いろいろありがとな。俺、めっちゃ感激したよ。

てか、驚いた。俺が前に行ったお店だったなんて」

「え？そうなんですか？お兄さん、前に行ったことあるんですか？」
「んなんだよー。前にさ、結婚式のスーツ作りにいったのよ。」

知り合いに勧められて。正直、おっくうだったんだけど、君のお姉さんがすごく感じ良く対応してくれて、傘まで貸してくれたんだよ」

「そうだったんですね！偶然ですね！でも、よかった！」

そんな会話をしていると、真己人の脳裏に突然、言葉が飛んできた。

「マッキー！！助けて！！」

（ん？ねえちゃん？どうした？）

「今、私動けない．．．刃物を持った男に抑えられてる」

（え!!!何、泥棒かなにか？）

「強盗みたい．．．金よこせて言ってる．．．」

（ねーちゃん待ってて、すぐ行くから！）

真己人はすぐさま携帯を手に取り

緊急アラームが鳴ったと告げて、警察に連絡をした。

木菟と煤無は事態を重く見て、すぐに茉莉沙の店に向かった。

警察が到着するのとはほぼ同時に、真己人達も

茉莉沙の店に到着した。

「ねえちゃん!!!」

真己人は走って近寄ろうとしたが、警察官に止められた。

「ご家族の方ですか？」

「はい、弟です。この店の店員の」

「大変危険な状態ですから、こちらでお待ちください」

（ねえちゃん、がんばって。大丈夫だから）

強く念じながら、真己人は茉莉沙に話かけた。

（マッキー．．．もう、だめかも．．．店には今、お金なんかないの．．．

ほとんど現金置いてないし．．．お客さんみんなカードだから．．．）

緊迫した状況で、警察は犯人に説得を試みるが、犯人は刃物をつきつけたまま

茉莉沙から離れようとしなない。

店に現金がないことを知ると、犯人は逃走用の車と現金を要求して

きた。

どうやら、茉莉沙を人質に車で逃走を試みるつもりのようなのだ。警察官が説得を試みている最中に何かがものすごい速度で犯人の顔面を襲った。

眼に命中したらしく、犯人は茉莉沙をつかんでいた手を放し、顔を覆った。その隙に一気に警察官がなだれ込み、犯人を取り押さ

え

茉莉沙は無事保護された。

一瞬何が起きたかわからなかったが、とにかく助かった・・・茉莉沙は安堵で、フラフラとその場に倒れこんだ。

警察官に抱えられ、待機していた救急車でいったん病院に運ばれ、それに真己人が付き添った。

犯人も連行され、現場検証が行われたが

そこでみつかったのは、なんとパチンコ玉。

犯人の眼球にヒットしたのは煤無が飛ばした

銀色のパチンコ玉だったのだ。

煤無はY字になった枝にゴムをつけた「パチンコ」で、

銀玉を飛ばし、犯人の眼球を狙ったのだ。

それが、見事命中して、倒れたため

警察が犯人を取り押さえることに成功したのだった。

病院では、安定剤を打たれてすやすや眠る茉莉沙の横に

木菟と煤無がいた。

「あのお、鈴木煤無さんですか？」

年配の刑事らしき男が、木菟の兄、煤無に話しかけた。

「ちよっとお話お伺いできますか？」

おそらく、当時の状況を確認するために、煤無に事情聴取しようとしているのだろう。

このときはまだ、茉莉沙はもちろん、真己人も木菟も

茉莉沙を救ったのが煤無だということは、知る術がなかった。

セトルダウン

「ねえ、なんでわざわざあなたが届けるの?」

「え?だって、オレじゃねーと、だめだって言うから・・・」

「ふうん・・・じゃあ、つきあっちゃったらいんじゃないですか?」

「いや・・・なんでそーゆー理屈になるの?」

「だって・・・だって・・・」

「え、もしかして、・・・焼いてるの?」

「え???ち、ちがいます!そんなじゃないわ!」

「えく。ジエラってんだ!!!わーい、ジエラってるじえらってる!」

「し、しらない!!!」

ガタつと、病室のベッドの上で茉莉沙が寝返りを打った。

「ねーちゃん?意識戻った??」

「ん・・・」

（あれ?今のなんだろ・・・夢?・・・）

なんで、私と木菟君のお兄さんが親しげにしゃべってたんだろ?

まるで彼氏みたい・・・）

（ねーちゃん?意識醒かなかったけど、なに、そんな

夢みてたの?)

「はあ?勝手になに言ってるの!!!」

「????」

急に叫んだ茉莉沙の声に木菟は驚いた。

「あの・・・おね、えさん?大丈夫ですか?」

（はっ・・・マッキーと心で会話してたのに

声に出して叫んじゃった・・・）

「あ・・・ごめんね。びつくりさせて。

変な夢みてたから、現実とごっちゃになっちゃった」

「そうだったんですね・・・そりゃあ

危ない目にあつたから、動揺しますよね・・・

でも、無事で本当によかった・・・現場みたときは

オレ、ちびりそーになつたんつすよ……」

木菟は友人の姉の顔を、心配そうに見つめながら会話を続けた。

「うん……私も、もうだめかと思った。」

でもね、一瞬、犯人が、悶絶して手で顔を覆ったのよ。

その瞬間、警察の人が飛び込んできて、犯人を捕まえたの」

点滴したままの腕をあげて、茉莉沙が手振りを交えながら答えた。

「そうだったんですね……なにがあったんだろう。」

警察は発砲とかしてないみたいだったけど……」

木菟は現場の後ろの方で見えていたため、詳細はわかるはずもない。

「ねえちゃん、木菟のおにいさんもかけつけてくれたんだよ」

「え？マツキー、そうだったの……」

「今、なんか警察の人に呼ばれて、話してるよ」

「兄貴、なんかやらかしたか？」

木菟は場の雰囲気をやわらげようとして、冗談めかして兄の状況を

揶揄した。

「あれじゃない？お兄さんが通報してくれて、一番最初に現場についたから、

なにか見たとか、それ聞かれてんじゃない？」

「そうだったのね……」

（だから夢に木菟君のおにいさんが出てきたのかしら……

でも、ずいぶん親しげだったわ。お互いに……まるで

つきあってるみたいだった）

（ぶぶつ、ねーちゃん、なに、ズッキーのにいちゃんに惚れた？）

（は？なに言ってるの？よく知らないわよ。お兄さんのことは……

でも、お店に来たときは、すごく純粋な人だなあ、とは思ってたわよ）

「ん???なんか、マツキーとおねえさん、見つめ合ってるけど

姉弟愛ですか???」

「ぶっ！」

「ぶぶっ！」

茉莉沙と真己人は同時に噴出した。

「うおーおーおーっす！諸君。ご無沙汰ご無沙汰！

やっとおわったぜえ〜 お？おねーさん！意識戻った??？」

場の雰囲気をぶち破るかのように登場した

鈴木煤無は、警察の事情聴取を終え、飄々と病室に戻ってきた。

晴れ女と雨男

事情聴取を終えて鈴木煤無は茉莉沙の病室に戻ってきた。

「どうやら、今回の犯人捕獲劇的一幕に煤無が関わっていたようだ。襲撃犯人が茉莉沙を捕らえ立てこもっていたとき

煤無と真己人そして木菟がかけつけた。

そこで見た光景はあまりに衝撃的で、だれもが息をのみ

ただ立ち尽くすだけだったのに、煤無はとっさに持っていた

Y字型の木の枝でつくったパチンコを、犯人めがけて

飛ばしたというのだ。

それがちようどうつすらと開いていた自動ドアの隙間を通り抜け

犯人の眼球に直撃したものだから

襲撃犯はパチンコ玉を見事に食らって悶絶したらしい。

現場検証をした警察官が発見したパチンコ玉と、

現場付近に居合わせた煤無の手に、パチンコ用の輪ゴムのついた木の枝が

あつたため、事情をきかれることになったのだ。

まず、居合わせた理由については、警察はすぐに納得した。

ところが、なぜそんなパチンコを持っていたか？……ここが問題だった。

煤無によれば、なんでも近所のこどもに手製のパチンコを

みせびらかしたというのだ。いつも、おにいちゃんおにいちゃんと

慕ってくる幼稚園児に作ってみせて、一緒に遊んだと。

幼稚園児にパチンコ玉飛ばさせるなんて、危険極まりないではないか！

という警察官の説教にも

「いや〜。俺だってそこまでバカじゃないっすよ。

きやわい幼稚園児には、プカチユウ柄の軽いスポンジ玉で

飛ばしてやったんっす。ほら」

と、プカチユウが描かれた黄色いスポンジ玉を

警察官に手渡した。

にわかに信じがたかったが、別の警察官に連絡し

煤無が言っていた公園を搜索すると、煤無が持っていたものと
同様のスポンジ玉が発見され、またこともたちやその保護者からも
証言がとれたため、煤無は無罪放免となった。

「……ということだな。うん。まあ、おれっち一瞬

重要参考人になっちまったってことさあ〜」

煤無は頭をボリボリ掻きながら状況を説明した。

「にーちゃん!!なに呑気なことってんの!!!」

こんなすごい事件に巻き込まれて・・・てか、かつてに
巻き込まれにいつて!下手すりや、まっきーのねーちゃんに
迷惑かかるとこだっただろ!

てか、もし、命中しなかつたら、犯人が逆上したかもしれないじゃ
ないか!」

ベッドに横たわっていた茉莉沙は

体を起こしながら木菟の腕をつかんでたしなめた。

「木菟君、大丈夫よ。おにいさんがきてくれなかつたら

きつと今頃私は、あの犯人にメツタ切りにされていたと思うわ。

正直、あの瞬間、もうダメだと思ったの。

でも、おにいさんが行動を起こしてくれたから、

警察も動けたのよ」

うんうん、と頷きながら、無邪気な英雄は弟の方を向き

自慢気に話し始めた。

「おい、愛する弟よ。俺が全国パチンコ大会優勝者だつてことを
知らなかつたのかな?」

「は?なにそれ?そんな大会あるの?」

「おー、あるぞ。ググツてみ?俺が小学校6年のときに大会があつて
全国大会出場したんだよ。それで見事優勝!

だからね、絶対の自信があつたんだ。自動ドアの隙間もわかつて
た。

あそこなら、通過できる、つて確信した。しかも、ちょうど良い所
に

犯人が陣取ってたから、こりやいける、って思って、それでやったんだ。

もし勝算がなかったら、やらねーよ。

おねーさんの命がかかってんだから」

はじめはふざけていた煤無もようやくマジ顔で

説明を始めた。

「そこまで考えていてくれたんですね。ありがとうございます」

真己人が深々と頭を下げた。

ともかくにも、事件は一件落着した。

⊖⊖⊖⊖⊖⊖⊖⊖⊖⊖⊖⊖⊖⊖⊖⊖⊖⊖⊖⊖

事件の重きを鑑みて、店では茉莉沙に1週間の休暇を与えた。

体調は悪くないとは言え、心理的に負担があったことと、

やはり体力的にも万全を期して、完全復帰には数日必要であろうという

会社上層部の判断だった。

久しぶりに10時間以上眠った。

茉莉沙はベッドから起き上がろうとした

その瞬間

なんだか胸がわさわさした。

理由はわからないが、胸のあたりに違和感がある……

こんな感覚初めてだ。

通常は半径200m以内なら、人の心の声が飛んできたり

するため、普段はそれらを遮断するようにしている。

それなのに、だれかの心の鼓動が伝わってきているかのように

胸のあたりがもやもやしている。

「……だれか、そう、私がすでに思考を読み取ったことのある

誰かが具合悪くしているか、なんらかの理由で気分が悪くなっている」

茉莉沙はなんとなく、その対象人物像について、感じ取っていた。

「あとで、マッキーにたのんで様子を知らせてもらおうかな・・・
今日はお天気もよいし」

晴れ女の茉莉沙にとって大切な日はいつも晴れている。

小学校の遠足で、傘を持って行った記憶がない。

仕事中でも、自分が出勤してくるときは、いつも晴れている。

その後、茉莉沙が店内にいる時は雨が降っても、帰宅時には晴れていたりする。

したがって、傘はビニール傘しかもっていない。

しかしながら、命の恩人である鈴木煤無が店を訪れた後

土砂降りにやられたので、もしかしたら、木菟君のお兄さんは

雨男なのかもしれないな、と、ぼんやり考えていた。

おそらく、胸のわさわさは、鈴木煤無から発せられているものだろうと

ほぼ確信していた茉莉沙だった。

「木菟君のお兄さんに、何かあったのかもしれない・・・

具合でも悪いのかな・・・」

茉莉沙は携帯から文字メッセージを真己人に送り、

木菟を通して様子を窺ってほしいと頼んだ。

ヒーロー論

茉莉沙の懸案事項は、ずばり予想的中。

なんと煤無はその後、高熱で倒れていたのだ。

通常は断崖絶壁から落つこちても死ぬはずがないと

周りも信じて疑わない程、頑丈な精神と肉体をもった男だが

極まれに、予想外な突発性感冒などに見舞われることがある。

なんといつても雨男。

ひとたび外にでると、ざつと降られてしまったりすることから

無防備な時にどしゃぶりにやられ、風邪をひいてしまうことがある。

この日も煤無は朝から熱っぽいなど思ってた体温計を

咥えたら、なんと「39.5」と、デジタル表示の数字がならんだ。

「うわー、こりやむり」

いくら細マツチヨ頑丈男でも、今無理するとあとあと

よろしくない、と、即断し、上司に連絡

この日は大事をとって仕事を休むことにした。

先日の見舞いと救助の礼を言うタイミングで

真己人は弟の木菟に連絡し、煤無の様子を窺った。

「ズッキー、この間、ほんとうにありがとな。

ねーちゃんからも、深く礼を言ってくれと言われちゃって

今度またおいしいケーキでも届けるからって。

お兄さん元気？」

それとなく、不自然にならないように真己人は木菟に

兄、煤無の様子をさぐった。

「おー、まっきー。わざわざ電話してくれて

ありがとー。なんとあの、不死身マンは今、熱で倒れております」

「(やっぱり……) え??お兄さん具合悪いの?」

「まー、やつの不摂生がたたった、ってやつですかね。

40度近い熱で、うーうーうなってるよ」

「え!!! そうなんだ……病院行ったの?」

「病院嫌いじゃあ……でも、さすがに今回はやばいでしょーってね、無理やり連れて行ったよ。オレが。タクシーで」

「だ、だよね……で、ただの風邪なの？」

「うん……こじらせちゃったみたいで。」

あの事情聴取の後、風呂掃除とかやつちやつてさ

なんかわからないけど、普段やらないよーなことやってたから様子がおかしいなとは思ってたんだけど、とにかく疲労がたまってたみたい」

「そうか……なんかお兄さんに悪いことしちゃったね。」

事情聴取とかで、緊張したのかもしれないね……だって

まるで犯人扱いだもんね？」

「あ、それは気にしないでよ。あいつが勝手にやったことだから。」

結果、お姉さんは助かったけど、一歩間違えたら一大事だからね。」

「説教たれられて当然だよ」

「でもさ……なんか、お兄さん、男らしくてかつこいいよ。」

「はは、ありがとな。いつも、どあほうとか、無鉄砲とか」

怖いもの知らずとかって、周りから罵倒されてた人生だけど

マツキーとか、マツキー姉に褒められて、やつも舞い上がっちゃったんだよ」

「話題のうちのねーちゃんは、もうすっかり良くなって

家で安静にしているよ。ねーちゃんがズツキーによろしく

言ってるっていうから、連絡してみたんだ」

「そっか。おねえさん、退院したんだね！よかった！

こちらこそお大事にして伝えてくれよ！」

「ズツキーありがとう。姉ちゃんに伝えておくよ。」

「じゃ、お兄さんお大事に。またな。連絡する。」

「お、じゃな」

木菟との会話が終わると、速攻で茉莉沙に連絡をとる

真己人。しつかりはつきり伝えたいときは、やはり念より生の音声がいい。

「ねえちゃん!!! やっぱり、ズッキー兄、倒れてたよ。40度熱あるって」

「え??? やっぱり!!! なんか、胸がわさわさするなって

思ったの・・・そうとうひどいのね・・・大丈夫かしら」

「うん・・・だから、思考も飛んでこないはずだよ。熱でうなされてるからね。」

「なにも考えられない状態だと思う」

「心配ね・・・」

「病院には行ったようだから、安静にしていれば、大丈夫だと思う」

「お礼をしたって思ってたの。よくなったら、お食事にでも

お誘いしたい。もちろん、木菟君とマツキーも一緒に」

「それはいいね。でも、しばらくは安静にした方がいいかもね。」

ズッキー兄もねえちゃんも」

「そうね・・・時期を待つわ」

「なにか食べたいのある? これから地下鉄乗るから

その前になんか買ってくよ?」

「まあ、ありがとう。シフォンケーキが食べたいって思ってたの。」

もし、その辺にあったら、買ってきてもらっていい?」

「お! ちょうどアルシフォンの前だよ。紅茶とバナナとバニラビーンズ

買ってくよ」

「ありがとう! お茶用意しておくわ。夕ご飯は作ってあるから」

「おー、じゃ、速攻買い物して帰るよ」

なんとスーパー助っ人無邪気な英雄

鈴木煤無は高熱でダウン。そんな彼を心配する茉莉沙。

少しずつ距離が縮まりそうな予感。

煤無は男性恐怖症の茉莉沙が初めて心を開く男になるのだろうか。

あの日に帰りたい

20XX年10月1日

照橋琴美はある海沿いの部屋に宿泊していた。

こんなところに年頃の女性が一人で泊っていると

妙な気を起こすんじゃないかと訝し気に思われてしまう。

カモフラ用のパソコンをテーブルにセッティングし、

書類が詰まったブリーフケースを開いて夜の食事配膳を待つ。

和室ふすまの向こうから、配膳をするために仲居が声をかける。

「こんばんは。お客様、お夕食お持ちいたしました。」

その呼びかけに琴美が応じる。

「はい、どうぞ」

(こんな若い女性が一人で宿泊って・・・)

琴美の予想通り、仲居は一瞬顔を曇らせた。

その表情から、やはり女性一人の宿泊は一旦、怪しまれるという

前情報はガセではないことが明らかになる。

いかにもとばかりテーブルに広げた書類をみながら

パソコンを打つ手を止める琴美。

「あ、これ、いまどけますね」

テーブルの様子をみて、仲居は納得した表情でお盆を畳の上に

一旦置いた。

「あら、出張かなにかですか？」

用意しておいた台本通りの答えを、淀みなく自然に述べる。

「ええ、ちょうどこのあたりの土地に関するリサーチがありまして

こちらの宿が一番近かったものですから、数日お世話になります」

安堵の表情を浮かべ饒舌になる仲居。

「あら、お忙しいのね。ここの温泉はお湯がいいから

ゆっくりお休みくださいね。入浴時間は深夜1時までですから

お食事後のお好きな時間にご利用いただけます」

「ありがとうございます。お食事もよいと伺っておいりましたので

楽しみにいただきますね。あ、これ、少しですけど」

琴美は1000円札をたたんで入れた小さい封筒を仲居に渡した。

「あらあ、お氣遣いくださってありがとうございます！」

「ほんの心ばかりですが・・・」

（若いのにチップとは気が付く子ね。育ちがいいのね。）

仲居は気をよくして、お茶を丁寧に入れて配膳を済ませ

部屋をあとにした。

（ほっ・・・これで、とりあえず怪しまれることもないわ。

ここなら、少しタイムトラベルしてきても戻りやすいし、怪しまれない。

食事を済ませたら、予定通り●●年の11月に戻らなくちゃ）

輝橋琴美はタイムトラベラーだ。なんとかタイムトリップを行っているせいか

実年齢よりは上に見える。また雰囲気も落ち着いているため、ビジネス旅行での

宿泊という名目でも、なんら不自然ではない。

タイムトリップ前の第一段階の作戦は成功だ。

時間旅行上の法則は、時間軸を狂わせないことだ。

時間をさかのぼったときに、仮に自分がいた場合、同場所に存在することは

できない。ただし、琴美は憑依能力も持ち合わせているため

当時の自分に憑依して、タイムトリップを達成できる。

なくしたものを探すため、数年前のある場所にいく必要があった。

深夜、宿泊客も寝静まった頃、琴美はタイムトリップをするための手はずを整えた。布団を敷き、いったん中に入り、寝ていた形跡をつくる。

テーブルの上には、飲みかけのお茶を置いておく。これで準備は整った。

精神を集中させ、日時と場所を念じ大きく深呼吸し、いったん息を止める。

体中に大きな圧力がかかる。ほんの数秒とはいえ、時間旅行がこれほど

肉体に負担をかけるのは、なんとかならないものかと、毎度思い知らされる。

静寂が琴美を包む。ゆつくり目をあける。

そこは公園の木陰だった。

(あ．．．俊だ．．．海藤俊。間違いない。あの頃の俊だ。

足が長いのに、スリムだからってワンサイズ下をえらぶから、制服のパンツがつんつるてん。くすつ．．．おかしい。

久々に笑ったわ。ここ最近、笑ってなかった気がする。

さて、自分を探すか．．．みついたら、憑依しなくちゃ)

ちようどその年その日、その場所に4年前の琴美がいる筈だ。

(あーいたー走ってる。ちようどいいわ。今、憑依すれば

自然ね。)

精神を集中させ、走っている自分の体に現在の自分を憑依させる。

同日同時刻に同じ人間が居合わせるということは、時間軸の法則に逆らってしまう。犯してはならないタイムトラベルの法則だ。

したがって、琴美は戻った時の自分の体にすぐさま乗り移ったのだ。

(あ！私だ．．．。走ってる。そして、車に戻ろうとしている。

「海藤さんが戻ってくる前に車に戻らなくちゃ」

ぷっ．．．当時の私、こんなこと考えてたのね。意外にまじめだね)

自身に憑依した場合、その人物の思考が憑依した方の脳に流れ込んでくる。したがって、過去の自分の思考を、現在の自分が把握できるということだ。その逆は不可。つまり、一方通行。過去の自分は乗り移られた方の思考はわからない。

(俊は．．．？あ、戻ってきた)

「あー、海藤さん、戻ってきた。怒られるかな．．．」

なんだって？怒るだどー？ケツを蹴り上げてまえ！琴美！)

車に戻っていた琴美をみて、海藤が話しかける。

「あ、戻ってきてたんですね。次のお客さんはなかなか

手ごわいですから、気を引き締めて行ってくださいね」
車にもどるやいなや、琴美に指導をする海藤俊。

琴美より早く入社したため、仕事上では先輩ということになる。
ただし、同年代なのにもかかわらず、琴美は落ち着いているため
取引先でも、琴美が先輩に見られがちだ。

そのことを海藤は気にしてか、琴美にはきつい言葉を
投げかけることもあったようだ。その実、海藤は琴美の仕事ぶりを
買っており、一刻も早く一人前になってほしいと思っていた。

しかしながら当時の琴美は、そんな海藤の気持ちなど露知らず、反
発することも

度々あった。

ともかくにも、目指していた時間軸に到達することに成功した琴
美。

探し物は見つかるのだろうか。

探し物はなんですか？

照橋琴美と海藤俊はシステム部で開発を行うチームメンバーだった。

同プロジェクトにかかわっていたため、クライアントに出向き共に打ち合わせを行う業務に携わっていた。

「お客様の意向通りに進めるのもいいんだけど

それだとプログラムを構築する上でバグが発生しやすくなって結果、ちゃんとしたものができなくなるんだよ。

なんでも、はいはいじゃだめなんだ。わかる？」

「まだなんにも言っていないじゃん。とりあえず顧客の要望とプランをきいてから、こちらで企画して説明するって流れでいいんじゃないの？」

「いいえ」

海藤のこめかみあたりの血管が一瞬浮き上がった。

「はあ？俺の言ってることわかんない？」

不満をあらわにしながら琴美が答える。

「なんでも、はいはいじゃだめって言ったから」

「あああああ、そういうへりくついらない。

とにかく、プログラムってのは、あとあと変更をかける上でできることとそうでないことがあるんだから、

ここまではできますが、それ以上はできませんってことをしつかり言わないといけないんだよ」

「へい、わかりました」

「……………はい、じゃなくて、『へい』ときたか。

照橋さんってつむじまがりだね？」

「なんか表現古いんだけど……………」

「あまのじゃくともいうな」

「言い方変えただけじゃん」

「不満そうだなー。まあいいや。とにかく

徹夜覚悟でプログラミングに臨んでほしい。

俺はベーシックの部分やるから、君はバグ修正をやってほしい」

「わかりました。」

(そういえばこんなやりとりしてたっけ……)

当時はカチンときたりしたことあつたけど

今思うと、俊って、仕事に対して本当に真剣なんだよね。

また、相手を思いやっていないわけじゃなくて

期待しているからこそ苦言を呈するってタイプだから

誤解されることも多々あり。

期待もしていない人は、存在消すって言ってたもんな……

私も余裕がなかったから、ふんっ、って顔しちやっただけど

悪かったな……今なら無条件に笑顔で、はい！って言うんだけど)

「じゃ、今日はこれでおしまい。」

あとは、ゆっくり寝て鋭気を養って。先は長いからね」

「はい、お疲れさまでした」

社用車を降りると、琴美は自分の車のある駐車場へと向かった。

琴美の姿を見送りながら、海藤は社用車の窓をあけて一服することにした。

右手の人差し指と中指で持ったタバコをくゆらしながら、左手に持った携帯の画面を右手の親指でスライドしながらメールチェックをした。

「あゝ。同窓会か……しばらく顔だしてなかったな。」

とりあえず行くって返事しとくか。酒も飲めるし、この日程ならプロジェクトが

終わる頃だから、たぶん大丈夫だよな。結婚してるやつらも多いだろうなー」

地元から動いていないにも拘わらず、同窓会にはほとんど顔を出していないかった

海藤。久しぶりに旧友の顔を拝みたいという気持ちにかられ、出席の返信を送ってみた。

自家用車に戻った琴美は、帰路に就こうとしていた。

「あー、つかれた。ほんと、いちいち細かいよね。まあ、まじめな人なんだろうけど・・・わかってるっつーの！って言うってしまいそうになっちゃった。でも、瞳がきれいな人だな・・・近眼なのかな？」

当時の琴美の思考を受け取りながら、憑依した琴美が考えをめぐらす。

(とりあえずこの日に戻ってみただけど・・・目的のものは

この日から何日目だったろう・・・話し方の感じから、だいたい今頃のはずだけど・・・)

いったい琴美が探している「もの」とは？

あんなことこんなことあったでしょ

(今日は別の先輩とクライアントのところに
出向くんだったわね。)

今日は、中澤さんと……か。)隣に座っている中澤の携帯が鳴る。

「はい……お、海藤か。どした？」

あー、おまえなー……わかった。

無理すんな。オレがやつとく。ああ、うん。

解析の件な。問題ないぞ。心配すんな。

なんとかつないどくから。じゃな。」

ふつと一息ため息をついて、携帯を閉じる中澤。

「海藤さん、具合わるいんですか？」

中澤の方をみながら、琴美が話しかける。

「食欲ぜんぜんないらしくて、熱もあるらしい。」

「風邪ですか？」

「インフルじゃないらしいが。疲労かな。」

「そうなんですネ……もしかして、昨日徹夜したのかも？」

私にはすぐ帰って寝ろつて言っていましたけど……」

「まあなー。なんでもひとりで背負っちゃうからな。」

こっちに振ればいいのに……」

「私力が不足ですいません。」

「いやあ、琴ちゃんのせいじゃないよ。」

というより、琴ちゃんの負担にならないように

できるところまで完成させようとしたんだろうな。」

「……そうなんですネ……」

私、むつとしたりして悪かったな……」

「いやあ、それはわかるよ。」

あいつ、言い方がな……言ってることは正論なんだけど

実直すぎてオブラートに包むということを知らないから

言われた方はさ、最初はカチンときちやつたりするんだよな。

わかっちゃうと、あー、不器用なやつ！で、笑って済ませられるけど」

「そうなんですネ・・・私知らなくて、つい無礼な態度しちゃいました。」

「はっはっはーあいつ相手に無礼な態度したの？」

「勇気あるねえ？みんな怖がって、遠巻きにしちゃうんだけど。でも、君はどこ風で、くぬうーって、しがみついて負けんと必死についていってる。」

「彼はそういう相棒の方がやりがいを感じるからね。」

「あいつの技量にはだれもついてこれないけど、そんなやつの才能を見抜いて、一歩でも近づきたいっていう人を」

「求めているんだよね・・・なかなかいなかったんだな。で、やっと見つけた、かな。」

「それで、はりきっちゃったのかもな。」

「こりやー追い越されるかも？っていう」

「ある種の恐怖感とライバル心を煽ったのかも」

「え・・・やっぱり追い詰めたの私じゃないですか」

「いやいや、気にしなくて大丈夫。」

「あいつ、いつも溜めて溜めて溜めまくって」

「ぶったおれるのよ。自分自身を追い込むの得意だから。」

「今まだこの段階なら、周りでフォローできるから無問題。」

「進んじやったら、やつしか処理できなくなる。」

「そうなるよ、高熱でも仕事しなくちやと無理するやつだからますますコトが厄介になる。」

「俺だったら、クライアントに待ってもらおうけどねー」

『諸事情で遅れます、すみません！』って

「奴はそれをしない。そんなことをすること自体」

「許せないっていう、一本気な奴だから。」

「職人堅気なんだよ。」

「ごめんねー、不器用なヤツで。」

「いえ・・・とんでもないです。」

私のこと嫌いなのかと思っちゃいました。」

「とんでもない！君のことは期待してるって

言ってたよ。見込みがあるって。」

「ほんとですか!!!」

うれしい！あの・・・お見舞いとか行ったら

かえって迷惑ですよね・・・

スイーツとか届けたいんですけど・・・

今は食欲ないかもしれないませんが

少しでも食事できるようにになったら

食べてほしい・・・」

「やさしいねー。あ、俺さ、データ届けようと

思ってたから、一緒に渡してあげるよ。」

「え！ありがとうございます！

ヨックノックのチョコサンドあるんです。

いただきものなんですけど・・・

オフィス戻ったら、渡します。

あと、これは先輩の分です。どうぞ召し上がってください。」

「おーーーーー！ありがとうございます！

これはあがるね。じゃ、海藤に渡しとくよ。

琴美ちゃんからって。」

「とにかく無理なさらさないようにつて

伝えてください。あと、失礼なこととして

ごめんなさいって。」

「りよー！

じゃ、さっさとクライアントへの報告

済ませちゃおう。納期も伸ばしてもらおうように

俺から交渉する。」

「はい。わかりました。」

(たしか・・・この後だったかな。彼が治ってから・・・

だったような気がする。あと少しで見つかりそうだけど

無駄にタイムトリップするわけにはいかない・・・)

そろそろ探し物がみつきりそうな気配。

え？

タイムトリップして過去時空にいられるのはせいぜい3日。
琴美が現在の時間から遡ってきた時間軸で過ごせるのは
72時間だけということになる。
すでに過去時空で2日目を迎えた。
タイムリミットはあと1日。
今日決めなければ、一旦元の時間に戻らねばならない。
記憶を鮮明にしようと
しばし過去の自分に思考をゆだねていた。

(BGM)

あなたの目に映る
空は今日も高い
紺碧の天井に浮かんだ
綿雲が泳ぐ
追いかけてみたけど
追いつけなかった
手を伸ばせば
届くところにいるのに
思いは白い綿に包まれながら
小さくなっていった
あの頃に戻って
もう一度笑っていたい
それぞれの道を歩んでも
思はずっと一緒だから
伝えられなかった思いは
森の中に置いてきた
小鳥がさえずる
木の上に佇む
思い出の箱を探しながら

(end BGM)

(懐かしい。あの頃気に入っていた曲だね。

ん・・・たしか次の日だったような気がする。

これを聞きながら仕事に出かけると

回復した彼がいて、その時だった・・・間違いない)

仕事場に着くと、過去の琴美は必要な書類をまとめ

車の助手席に乗り込んだ。

すでに運転席には、当日の担当者が

ハンドルを握っていた。

「あ、おはようございます。照橋さん。

迷惑かけて、悪かったね。」

「海藤さん、大丈夫なんですか？

顔色まだよくないですよ」

「え、もう大丈夫。ぶっ倒れても

回復早いんだ。だから、がんがん行きますよ。オレ。

覚悟してくださいね」

「よかった・・・顔色はよくないけど、とりあえず

元気そう。あまり無理はしないでほしいけど、助かった・・・

私ひとりじゃどうにもならなかったから」

「覚悟してます。どんどんしごいてください。」

「あれ？なんかいつもと違うな・・・素直に前向きですね。

じゃ、とりあえず出発しますよ」

「はいっ」

(そろそろ・・・かな?)

車のエンジンをスタートさせる海藤。

都会の喧騒は道路事情にも及んでいた。

「あ、照橋さんって・・・ですか?」

車のエンジン音や周りの騒音にかき消され

海藤の質問がききとれなかった。

「え?」

「え?」

(ここだ!)

「え・・・聞こえなかったから、え？って言ったのに

それに対して、え？返して・・・それ以上質問できないじゃない」
過去の琴美が躊躇する。聞こえなかったから

聞き返したのに、かぶせて聞き返されたら、次の言葉がつながらない。
い。

(は、はーん。なるほどね。だから俊は聞き返したのか・・・

車のエンジンで聞こえなかったのは

『照橋さんて、お休みの日は何してるんですか？』

私が『え？』って、聞き返したから、俊は自分の質問が

なんかまじかったかな？プライベートのときいきちゃって、

あれ、やっちゃった？って、思ったのね・・・

これまで仕事の話しかしてこなかったのに

不自然だったかなって、焦ったのか・・・

再スタートは仕切り直し。相棒とはうまくやって

いなくちやって、場を和ませようとしたのね。

私琴美は単に聞こえなかったから、聞き返したのに・・・え？で

返されちゃったもんだから、確認しようにもどうしたらよいものか

困っちゃったんだよね。

二人とも可笑しいね。

さつとと、溜飲がおりた。ずっと探していたものが

みつかったから、現代に戻るか・・・

もうちよつとこの時代にいたいのはやまやまだけど・・・)

目的を達成した琴美は、後ろ髪をひかれる思いで

もとの時間に戻っていった。

紅葉だより

頬を刺すような乾いた冷気が、森の衣替えを手伝い木の葉が色あざやかに変貌を遂げる季節になってきた。

体調も回復し、プロジェクトも終盤を迎えゴールが見えてきた月末、

海藤は同窓会会場に向こうとしていた。

駅までの電車内で、海藤は出口近くに立ち、外の景色を眺めていた。

（何年ぶりか・・・ほとんど同窓会には出席してなかったからな。

でも、久々にうまい飯を食いたいし、この会費で飲みほ食べほつてのは

アリだよな。今回は、牧田がバックアップしてんのか。

あいつホテルチェーンのオーナーだったな。そういえば。

昔からいけすかねえやつだったけど、まあ、今は大人だからそれなりに距離置いて話せるだろうしな。

恩師も来るって言うから、顔だすことにした。山田先生

あの時お世話になったからな。礼もいいたいし)

高校の同窓会会場に着くと、海藤はゆつくりと入口に近づいて行った。

背後から誰かに声をかけられた。

「お、海藤じゃね？懐かしいなく。おまえ今、なにやってんの？」

早速、いやなやつにめっかつちやっつた。

「おう、牧田。久しぶり。俺は阿蘇通電工でSEやってる。」

ニヤリと不敵な笑みを浮かべ、牧田が言葉を返す。

「へえ、阿蘇通でSEね。あの時退学免れてよかったな。

無事卒業できたから、進学できたんだもんな」

（人間ってのは、そうそう性格が変わるもんじゃねえな。

相変わらず、嫌味なヤツだ)

海藤は小さくため息をつきながら、牧田に笑顔で答える。

「ああ。あの時山田先生にフォローしてもらわなかったら

今の俺はねえからな。お礼の意味も込めて、今日出席したんだ。

おまえも相当はぶりがいいようだな。腹に金色のどら焼きがくつついてる

みてえだな」

「はっはっは。おまえ、変わらねえなあ。相変わらず尖ってんのな。まあ、理系だし、正直で遠慮ねえのはしゃあないな。

人間、丸くなっちゃーおもしろいからな」

海藤の通っていた学校は私立高校だったため、

中学部や小学部からの持ち上がりも多く、牧田は小学部からの持ち上がりだった。

「まあ、貧乏は暇がねえんでな。おまえみたいに坊ちゃんには

わからねえ世界だよ。今回の会、寄付ありがとな。腹壊すまで

飲み食いさせてもらうよ」

「おう！頼もしいな。がんがんやってくれ。宣伝も兼ねての

同窓会主催だからな。うちのホテルチェーン、どんどん口コミしてくれよ」

「おまえのそういう正直なところは、嫌いじゃないぜ。

そろそろ時間だよな。会場にいこうか」

会場に入ると、見覚えのある顔、一見して誰だかわからない顔が並び

挨拶をかわし、会話をすれば思い出す同級生もいた。

乾杯のグラスを手に会場を見渡すと、一人の女性に目が留まった。

(あれ……あれって、まり……さ、じゃね?)

たしか幼稚園一緒だったよな。小・中は別だったけど

高校で一緒になったんだよな……あまりしゃべったことはないけど

幼稚園の時は一緒に遊んだ覚えがある)

会場の照明が一旦落ちる。マイクから司会の男が挨拶をはじめ。

「皆さんお、お忙しい中、お集まりいただきましてありがとうございます。時間になりましたので同窓会を開催したいと思います。本日は、ゲストで山田先生をお呼びしております。」

時間になりましたので同窓会を開催したいと思います。本日は、ゲストで山田先生をお呼びしております。

乾杯の後、皆で談笑したいと思いますので、どうぞゆつくり楽しんでください。

飲み放題、食べ放題、バイキングですので、ご自由にどうぞ！
それでは、乾杯！」

主催者の牧田が乾杯の号令をかけると、皆各々杯をかたむけて旧交を温めた。

海藤は先程みつけた、幼少時の友人女性のところへ歩み寄った。女性振り向くと、海藤をじつと見た。

（誰……？あ……！幼稚園の時一緒だった

シユン君だ。おもちゃに手を触れていないのに、勝手に動いていた……

きつとサイコキネシスだって認識したのは、大人になってからだっただけ

子供の時はただ、他の子とは違う力があるんだって、漠然と
思ってたっけ……）

海藤の方をみていた女性に思い切つて声をかけてみた。

「こんにちは。もしかして、光傳寺幼稚園で一緒だった

まりさちゃん？高校ではほとんど話したことはなかったけど……」
「うん。茉莉沙よ。あなたはシユン君よね？幼稚園では

クラスが一緒だったね。砂場で一緒に遊んだりしたから
覚えているよ。高校はたしか……野球部だよな。

私、吹部だったから、高体連の応援演奏しにいったよ」

「あ、そうなんだね？俺は中学は陸上だったんだけど

高校は野球部だったんだよ。足が速えから、センターやってくれ
か

そんなノリだったかな……懐かしいな。

茉莉沙ちゃん、今なにやってんの？」

「私は、隣の洋服屋で店長やってるの「ナカJ」ってところ。
よかったら立ち寄って」

「ナカJって、あのオーダーメイドのお店？俺なんか
場違いじゃねえの？」

「そんなことないよ。カジュアル系もあるから

気軽に遊びにきてよ。この間もスポーツ系の人がいろいろ買ってくれたんだよ。来てくれたら

割引してあげるから。はい、これショップカード」

「お、ありがと。今の仕事はスーツとかいるから

一つぐらいちゃんとしたの作っててもいいかもな。

高くて手がでねえなあって思ってたけど、割引してもらえんなら

大丈夫そうだな。俺、カードないから現金なんだよ。」

「掛買いも大丈夫だよ。身元がちゃんとわかってるから

2分割とかにしてあげられるし。」

「おまえ、無口なやつだと思ってたけど

営業うめえな。」

「今も人見知りだよ。お客さんは仕方なく対応するけど

プライベートでは、あまり気軽に話さないよ」

(なんとなくマツキーにいちゃんと同じ匂いがする・・・)

思考も邪がないし。なによりこの人はサイコキネシスかもしれない。

できれば、これからもやりとりする必要があるわ)

茉莉沙は久しぶりに会った旧友が、仲間かもしれないと

直観していた。良いサイキクスなら協力しあえる。

「そうなんだな。俺と一緒にだな。俺も仕事上は他人と

しゃべるけど、基本心を許した人以外は、必要最低限しか

話さないからな。でも、おまえはなんとなく、警戒心なしで

話せるよ。来春、なんちゃら式典とかあるから、それに向けて

スーツ作りにいくから、よろしくな」

「うん。ぜひ来てね。うちのお店、ものはいいから

決して失望させないから」

久々に再会したこの二人は、超人の能力を持つ者同士なのだろうか。

ミッションは森の中から

「琴美は宿泊先に延長を申し出ていた。

長い時間旅行は体に負荷をかける。

食事もおプションをお願いし、ビタミンが取れるものをオーダーした。

「お客さん。これサービスです。延泊していただいたし。

長野から送ってきたリングゴなんです。毎日リングゴ1個で医者知らずって

いうらしいですよ。西洋の方では。蜜が入っていておいしいですから

「お召し上がりくださいね」

「わあ、ありがとうございます！ほんとみずみずしくて

おいしそうですね。遠慮なくいただきます！」

タイムトラベル中は犯してはならない掟があるため精神的に非常に負荷がかかる。

時空移動で体力を消耗する上、神経も使う。

へたすると入院レベルで、体調を崩してしまう。

しかも、タイムトリップ中に、悪質なサイキクスと出会った場合時空法則を破られてしまう可能性もある。

慎重に行動しないと、琴美自身が闇に葬られてしまう。

琴美はまだやり残したことがあるため、今は葬られるわけにはいかない。

照橋琴美はある指令を受け取っていた。2062年の国家管理事務局より

ある人物と遭遇し、クライシスを救えというものだ。

基本、過去の出来事をねじまげることをしてはいけない。しかしながら

2062年における、国家管理事務局の綿密な調査により

ある微調整を行えば、国存亡の危機から救えるというものらしい。

そのためタイムトラベラーの協力が必要であると。

なんだか、漢字ばかりでよくわからないが
とにかく、あるテロサイキクスを封印しなければいけないらしい。
そのこと自体はさほど難しくないのだが、実行前に
テロリストに知られてしまつては、計画が遂行できないため
神経がすり減らされる。

そして、力強い協力ををみつけないと
ひとりでは、実行できないのであつた。
協力者リストはすでに入手してあつた。

名前と画像データ。移動年代、場所。

第一段階は終了。次の段階に移るまで
しばし充電しなければならぬ。

幸いこの温泉は体力回復にすばらしい効力を
発揮するようだ。琴美の体に合っているらしい。
食事も胃にもたれず、しかしながら栄養満点だ。
懐かしいふるさとの香りがする。

かぐわしい森の香りも琴美の心を癒してくれた。

「さて・・・あとはテレパスとの合流か・・・」

実際はすれちがつていた人たちだけど、あの時代は
遭遇しなかつた。本来なら合わなかつたかもしれない
人たちだけど、今回のミッションでは会う必要が
あるらしいわね。

それにしても、俊はいつもムリをする。だいたい彼が
体を壊すのつて、ストレスからくるものじゃない。真剣すぎるの
よ。

もちろんテキトーがいいってことじゃないけど、
いい加減、そう『良い加減』がいいのよ。体壊しちゃ何もならない
じゃない。

まつたく・・・胃液吐くまで自分を追い込むなつーの！

悪は必ず淘汰されるんだから・・・」

計画表をパソコンでチェックしながら

サイキクス達のデータを今一度確認する琴美だつた。

地球の真ん中で叫んでみる

温泉につかりながら琴美は課せられたミッションを
どうやって遂行するかプランを練っていた。

そんなとき、天井からポトリとしずくが琴美の背中に
落ちた。

「冷たっ・・・」

過去の1シーンが、湯舟から立ち込める湯気のスクリーンとなって
琴美の瞳に映し出された。

「俺はね、神も科学も信じない。」

正面を見据えながら海藤がつぶやいた。

琴美はそれに応える。

「自分、SEじゃないですか。応用数学は一般に形式科学って言うし
科学の一部じゃないんですか？」

「プログラミングは数字だ。数字の羅列が
実行回路を作り、そして命令通りの操作が行われる。

科学でもなんでもない、事実だ」

「はぁ・・・なるほど・・・それじゃあ

神も科学もないのだとしたら、この世は誰がどうやってつくったん
ですかね？」

横目で海藤をみながら、琴美が詰め寄る。

「神なんかいない。科学もたんなる科学者の自己満足だ。

「この世を作ったのは宇宙人だ」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
はい？」

「宇宙人がこの地球を作り、はるか何億万年の彼方から
操作しているんだ。そして、実験している。

人の善悪がどうやって動くのか。人物Aに

プログラミングされていることが、正しく動くのであれば
それに直面した人物Bはどのような反応をし、どのように

影響されるのか。

それを、実験しているのさ。すべての事象はプログラミングされている。

それを宇宙人がはるか遠くから観察してるって、考えたら面白くない？」

「おもしろい!!! それ、ものすごくおもしろいですよ!! なるほどね。じゃあ、私が、神様お願いです!!!

って、願ったりしてるのって、宇宙人の司令官にお願いしてるんだね？」

「んまあ、そういうことになるかな。

悪いことをしたら、悪いことが返ってくるとか

因果応報プログラムがどれぐらいの確立で

どのぐらいの人間が実行できるか、した場合の悪の生存率の確証を取る」

「んー、なんだか難しくてよくわからないけど

とにかく、宇宙人がすべて、人間とか作って

どうやって、進歩するとか、実験してるってことですね？」

「そういうことだな」

「あー! だから、ときどき不時着した宇宙人が

NAZAかなんかで、ホルマリン漬けになってるんだね！」

「UFOとかもあれ、視察だな。

と、俺は考える。で、弱肉強食の実証とか

文明が進んでくると、人の肉体や精神が弱くなってきて

そうなった場合、人間はどうやって、それを克服していくのか。

科学と称する人間の自己満足はどこまでいって、どうやって

実証されつづけて、いつ、宇宙人司令官に到達するのか

それを、鼻くそほじくりながら、観察しちやっぺんだよな」

「(バシバシ手をたたきながら) 面白い!!!

私たちって、宇宙人に支配されていて、いろんなプログラムが試されているのね!

ある人は、スポーツが得意で、それを極めたらどうなるか成功してもその後どうやって人生切り開くのかとか

大学行って、専攻したものを活用できるかとか
いろんな誘惑に勝てるのかとか、墮落しまくるひとは
どうやって墮落の一途をたどるのかとか
ある人は感性が豊かで、いろんなものを見て聞いて感じて
それを表現して、人の世について感慨深げに右脳で分析したり
いろんな人間がどうやって動いて、そしてどうやって
世界が作られたり、変わっていくのか
プログラミングされている・・・そう考えると
いろいろ納得いくわ」

「だろ？いかに自己実現できるかってのが
課せられたテーマでさ、達成できる人間がどれぐらいいるのか
データとって、優れた遺伝子プログラムを解析したりとか
そーゆーこと諸々
なんじゃねーの!!って、想像したりすると
楽しいなー、なんて思ったりしてね。
なんかさ、科学ってうさんくさいって思うんだよな。
だって、金もらって研究してるわけだろ？
スポンサーの都合に合わせてやってるわけださ。
純粋な気持ちで科学目指した人も、最後は金の従者になっちゃうわ
けで。」

神様も信じたら、それで救われるってのか
楽にはなるかもしれないけど、都合よく神の教えを
解釈しちゃう人もいるわけで。

これまた、宗教やってる人たちが墮落してくると
都合よく利用したりする人もいるでしょ。
だから、俺は自分とデータしか信じないの。」

(まったくもって、面白い考え方をする人だったわ・・・
こんな考え方をする人、みたことも聞いたこともない。
独自の思考発想をするのよね。だから、クリエイティブな
プログラミングもできちゃうのね。
すごい才能だわ・・・彼こそ宇宙人だったりしてね)

過去の出来事に思いを馳せながら、ミッション遂行への道のりを模索する琴美だった。

神様は宇宙人

きっと会えますように。

会って話ができますように。

宇宙人の神様お願いします。

ミツシヨン前に気持ちを集中させる琴美。

『俺は歴史も嫌いだ。

あつたことない人に興味もてん。』

って、言つてた俊。

次から次へとおもしろ論を展開してくれるヤツだ。

たしかにねー。歴史上の人物って会ったことないし

これからも会うことないだろうから、興味もてないってのは

わかるけど・・・

私は会ったことがない人に

会えてしまったりするから

この能力を持つてしまった場合

歴史は必然なタームになってくる・・・

時間を行き来するのが

歴史ロードを歩むことだからね・・・

過去を気にしないで生きていけたらね

いいのかもね

でも、気にしないって言うより

そういうことがあつたつて

色あせて風化してしまえば

単なる記憶の残骸でしかないのではないかな

その「会ったことない人」達に

私はこれから会いに行かなくちゃいけない

本来犯してはならない法則を

あえて破つてこい、との指令を

遂行するため・・・

休息をとつてエネルギー補給完了

あの時のあの場所へ・・・」

琴美は目的地へと気持ちを集中させる。

目をあげると、そこはかいわい町の駅付近だった。

ちようど駅前で海藤の姿をみつける。

歩み寄って話しかける琴美。

「あ、海藤さん。どちらへ？」

(憑依したが当時の琴美には眠っていてもらう)

「お、照橋さん。逃えた服をとり」

「へえ、無頓着にみえるけど、海藤さん、服、逃えたりするんだ？

ちなみにどこですか？」

「ナカJだよ。ほら、すぐその角にある」

うまくいった。これで目的の人物と合流できそうだ。

「あ、私も行きたい。ちようどフォーマル一つ

必要だったから。ついてついてもいいですよね？」

「あ、ああ・・・(なんかスーツみられんの恥ずかしいな・・・

試着とかすんだろ？あれ・・・) いいけど・・・」

一瞬躊躇した海藤だったが、琴美と一緒にナカJに行くことになった。

店に着くと、中から外の二人に気が付く茉莉沙。

(あれ？俊君だ・・・一緒にいる女性は彼女かな？)

海藤と琴美は一緒に中に入る。

「うーっす、茉莉沙っち。スーツ取りにきた」

笑顔で茉莉沙が応対する。

「いらっしやい！俊君。お連れは彼女さん？」

「え？ちがうちがうちがう！単なる同僚」

海藤と琴美は同時に手を左右に振る。

茉莉沙は二人の様子をほほえましく眺めながら

(どうやら本当に同僚さんみたいね。

・・・え？・・・私に話しかけてるの？)

茉莉沙の目が一瞬大きく見開いた。

琴美が茉莉沙に思考で話しかける。

(あなたがテレパスの茉莉沙さん？私には

あなたの声が聞こえないけど、私はタイムトラベラーなの)
茉莉沙が驚愕し、両手をぐっと握りしめる。

(・・・!!!!どういこと!!!!)

琴美は茉莉沙を見ながら心で話しかける。

(あなたと二人で話したい。なんとか、こいつを

追い出してもらえない?)

事情はわからないが、目の前にいる女性と話す必要があると
即断した茉莉沙は、めくばせで合図した。

(わかったわ・・・やってみる)

「そういえば、この間モデルの●●が来たの。」

「え！そうなの？私、彼女のプライベートの服、結構好きなの」

「そうなの！同じのあるよ。よかったら、合わせてみない？」

「ええ！ぜひ！」

「あー、なんだか女子で盛り上がってるなー。

おれ、外で一服してくるわ」

「俊君。どうぞどうぞ。ガールズトークに花が咲いているから

ゆっくりしてきていいからね。」

「けっ、邪魔もの扱いだな。ったーよ。なんか食いてーのある？」

スイーツ買ってきてやるよ。俺の分も買うからさ、あとで

お茶いれてくれる？」

「あら、俊くん、気が利くのねー！じゃあ、シフォンケーキお願い。

紅茶用意しておくわ」

海藤にわからないように、琴美にウイंकする茉莉沙。

女子同士話が盛り上がるふりをして、うまく海藤を追い出し

すかさずSNSでのIDを交換する、琴美と茉莉沙。

海藤が外に出ると、茉莉沙は琴美を中に案内し、

お茶を入れながら話をはじめ。

「突然ごめんなさいね。何分時間がないもので、

焦ってしまっただけど、あなたが理解の早い人でよかった」

ソファに腰かけながら、琴美が口を開く。

「はじめは驚いて、動揺してしまっただけ」

俊君の同僚さんだし、なんとなく事情があるようだと思って」

「助かったわ。俊も単純で。すぐにひっかかってくれたもんね。」

「下の名前で呼ぶなんて、仲が良いのね？」

「ああ、ごめんなさい。今はまだ、苗字にさん付けで

呼んでるわ。私は未来からきたの。」

実はある指令があつて、過去に戻ってあなた方と合流するよう

言われたのよ。弟さん？もテレパスよね？」

「そうよ。弟も同じ能力があるわ。まだ調節機能が不十分で

時折つらい思いをしているようだけど」

「そうなのね。あなたは熟達しているのね。心強いわ。」

ところで、あなたの近くにサイコキネシスがいるらしいんだけど

存在は自分で確認するようになって言われてきたの」

「え？知らないのね。知っているのかと思った・・・」

茉莉沙は、琴美が海藤と連れ立って来たため、海藤の能力を知っているのかと

想定して話をしていた。

「どういうこと？」

琴美が一瞬動揺する。

「俊君よ。」

「え？」

琴美は驚いて飲もうとしていた紅茶をこぼしてしまった。

「大丈夫・・・？やけどしてない？」

茉莉沙はすぐにこぼした紅茶をティッシュで拭き取った。

「あ、平気よ。ありがとう。で、どういうことなの？俊って？」

茉莉沙は琴美の手についた紅茶をぬぐいながら答えた。

「俊君ね、私と幼稚園が一緒だったの。高校も一緒だったから

一瞬同時にいたんだけど、その後、私たちが引越してしまったか

ら

消息はわからなかったけれど、先日同窓会で再会して、軽く会話を

うちのお店を紹介したら、スーツが必要だから行くよって。そんな流れ。

でね、幼稚園のときは同じクラスだったから、一緒に遊んだ・・というより

砂場にいるときに彼の不思議な行動を私が眺めていたの」

「不思議な行動？」

「ええ、砂場で遊んでいたときに、目の前のおもちやが

勝手に動き出すのよ。彼が頭の中で命令すると、目の前のおもちやが動き出す。

いつもそうだったから、俊君ってそういう力があるんだなってこどものときは漠然と思っただけ。

大人になってから思い起こしてみると、彼はサイコキネシスだったんだって

わかったのよ。でも、もうその頃は連絡が取れなくなっていた」

琴美は瞬きすることすら忘れて、茉莉沙の話に聞き入っていた。

「ぜんぜん知らなかったわ・・・でも、確かに

彼はとっても変なヤツだから。言われてみればそうかも・・・

一緒に車に乗っていても、あれ？信号ちよつと長いよね・・・とかお客さんのところに遅れそうになると、決まって信号が早く変わつたり

ちよつとフェイントかけたいたってときは、信号が長かったり。

単に、感覚の問題かとは思っていたけど・・・

それに、サイコキネシスの名前だけは明かされず、自分で探せってなぜかしら」

琴美は紅茶をすすりながら首を傾げた。

「おそらく、遂行に支障があると思っただけではないかしら？」

なんとなく思ったんだけど、琴美さん、俊君のこと好きでしょ？」

「・・・」

図星をつかれて、言葉が出ない琴美。

「でも、大丈夫よ。メンバーがそろえば冷静に対処できるわ。

私もフォローできるし。きつとみんなで力を合わせれば

あなたが受けたミッションは遂行できると思うわ。
ところで、どんなミッションなの？」

「封印しなくちゃいけないテロキクスがいるの。」

おそらくクレオバヤンスと思われるわ。あなたの周辺にいるらしいけど。」

名前は牧田」

「牧田……あ！高校にいたわ。いけすかないやつ。」

たしか、弟の真己人の同級生が妹のはず。真己人も苦手みたいよ。
その娘」

「きつとその人達ね。妹の方は能力はないと思うわ。兄の方だけだと思おう」

「そうなのね。わかったわ。家に戻ったら、弟に話してみるわね。」

さりげなく妹の方も探ってみるわ。」

「ありがとう。助かるわ。私もあなり長くここにいられないから……
そして、この時代の照橋琴美には眠ってもらってるの。」

今、ここで話して思考しているのは、未来の照橋琴美。

本来ならあなたたちと出会う予定ではなかったの」

「そうなのね……未来に戻ってしまったら、この時代の照橋さんは
私たちのことは忘れてしまうのね」

「ええ。残念だけど、琴美は知らないままで」

あと、かかわった人達の記憶は消去させてもらう。
もちろん、かかわった部分だけね

私が未来に戻る直前に、デリートコマンドを送らねばならない」
「そう……せつかく知り合えたのに、なんだか寂しいけど」

でも、とにかくミッションを成功させなくちゃね」

「ええ。よろしくね」

二人はしっかりと手を握りながら、心を一つにした。

「ところで、俊君にはいつ話すの？」

「とりあえず、牧田に関する情報が入ってから」

必要な時に呼ぶわ。ぎりぎりまで黙ってましよう。

ただ……私がトラベラーだってことは、言わないでね。

最後までかくしておきたいの。あなた方、姉弟と俊達には協力して

動いてもらって、私は陰であなたをサポートするわ」

「わかったわ。あなたの気持ちは大切にするわ。

とにかく最初にミッションを成功させなくちゃね」

「ええ」

ガランガラン。お店のドアが開く音がした。

「うおーっす、レディースアンドレディース。

スイーツ買ってきたぞ」

ちようどよいタイミングで、海藤が戻ってきた。

シヨウよんだったなら

【お休み回】

人間の能力を超えた力を持つ二人の女の子。

二人がもし子供の時に巡り合っていたら・・・

琴美：まりさちゃん。まりさちゃんはゲームとかするの？

茉莉沙：うーん。今はしないよ。こどもはだめだって言われたから・・・

琴美：ぜんぜんしないの？

茉莉沙：ううん。お父さんの古いパソコン使っていいって言われたから

それで、ソリティアとかフリーセルやってたよ。

琴美：あ、トランプのゲームでしょ？

茉莉沙：うん。でもね、ごはんも食べないでずーっとやってたから禁止になっちゃった。

琴美：そんなにやってたの？ゲーム好きなんだね。

茉莉沙：うん・・・やるとはまっちゃうから、しないようにしてるんだ。

琴美：あとはなにやったの？

茉莉沙：サスペンスとかのRPGやったよ。

琴美：へえ！難しい？

茉莉沙：んー。あっちいって、もどってもいかいってとかかってそういうの繰り返しだから、すごく時間かかって、途中でやめて次の日やってって、毎日やってたよ。

琴美：すごいね！私は、グアムにいったときに、たまごつちが落ちてて

拾ってそれ育ててたよ。

茉莉沙：懐かしい！でも、学校あるときとかどうしてたの？

琴美：おねえちゃんに頼んで、育ててもらってた。

茉莉沙：だよ。みんな親とかにあずけるよね。

琴美：じゃないと死んじゃうからさ。

茉莉沙：そうそう・・・激オコとかになってるよね

琴美：そー。まりさちゃんは、したくない？

茉莉沙：んー、なるべく見ないようにしてる。でも、弟が

昔、おもちや屋さんのゲーム大会で優勝しちゃってZEGA本体もらってたよ。

琴美：すごい！まりさちゃん兄弟って、ゲームの達人だね。

茉莉沙：あ、たつじんといえば、たいつはやる！

琴美：ゲーセン行っても大丈夫なの？

茉莉沙：おとうさんがお酒のむとゲームしたくなる人で

そのとき一緒にやってたよ。

琴美：太達おもしろいよね？

茉莉沙：うん。あともぐらたたきとか、車のやつとか。

それだと勝つよ。でも、みんながやってるような携帯のとかはできない・・・

琴美：わたしもけいたい持たされてるけど、容量少ないから入らないんだって。

茉莉沙：だよね・・・

琴美：マリオとかもやったなー。

茉莉沙：あー、弟がすごく得意だったよ。

琴美：今も男子とかやってるよね。女子でもいるしね。

茉莉沙：うん。

琴美：わたしさ、なんかいつたりきたりできちゃうから

とちゅうで負けてももいつかい戻ってやつたりして、勝つのね。

でさ、つまんなくなつてやめた・・・

茉莉沙：あ、弟がそうみたい。対戦系とか、目の前でやってると

相手がなに考えてるかかわかっちゃうから、勝っちゃうんだって。

琴美：だよね・・・楽しめなくなっちゃうよね。

茉莉沙：うん。みんな周りで楽しそうに話しても、どうやって

クリアしたかわかっちゃうから、楽しくなくなっちゃうんだ。

琴美：なんかいらぬよね・・・この能力

茉莉沙：うん・・・こどもだとつらいよね

琴美：大人になったら便利になるのかな？

茉莉沙：うーん・・・わからないけど、もしかしたら困ってる人とか

助けてあげられるかもしれないね。

琴美：そうだよね。そうだったらいいよね。

茉莉沙：うん。だれか喜んだらうれしい。

琴美：あ、もう帰る時間だ。じゃ、まりさちゃん、またね！

茉莉沙：うん。ことみちゃんも、ばいばい！

ミツシヨン終えたら会えなくなる二人が

もし、小学生のときに会っていたら、こんな会話をしていたかもしれません。

報告だつてばよ

「いやあ、シフォンケーキと紅茶、うまかったなあ」

口元にケーキのクリームをつけたまま、海藤が話し始める。

(こういうところ、子供みたいなんだよね・・・)

「さ、いったん事務所にもどって仕事片付けるぞ」

「今日、救命訓練あるんですよ。知ってました？」

ちよつと呆れながら、琴美が確認のツツコミを入れる。

「あー、俺の代わりにやってて」

「だめですよ。必修なんですから」

「人工呼吸とかすんでしょ、あれ」

「人形ですよ。しかも、ガーゼのつけて

アルコール消毒するから大丈夫ですよ」

「君のあとにやったら、間接キスになっちゃうじゃん？」

「あのね・・・アルコール消毒するって

言ってるでしょ？」

ちよつとむつとして琴美が海藤にかみついた。

「でも、間接だよね？」

「もう、いいです。はい、訓練うけないって

上に報告しときますから。あれ、大事なのは心肺蘇生ですからね。

言つときますけど」

「なーにそんなにムキになつてんの？」

「海藤さんが変なこというからですよ」

「そっかなー。間接キスで反応するなんて

小学生レベルでしょ」

「はあああ？そもそも間接キスとか言ってる時点で

そつちが小学生だろうが！」

「あらら・・・なんでしょ。そのお口ぶり。

ずいぶんと強気だねえ。僕と組みたくないのかな？

パートナー変えてもらおうか？」

(あ・・・やばい・・・つい、相手のペースに飲み込まれちゃった。

ここで、パートナー変わったら、ミッション成功できないじゃない）
「い、いえ・・・救命訓練って大事なのに、ちよつとふざけたから
ムツとしただけです。心配しないでください。海藤さんになにか
あっても

絶対助けませんから」

「はっはっは!!そんなこと言わないで、間接してよ
ちゅ〜」

（んもう、完全つに、おちやらけてるわ・・・）

「わかりました。間接じゃなくて、直接いきますんで。
覚悟してください」

予想外な反撃に、今度は海藤が顔を紅潮させた。

「え・・・」

「海藤さん、データが届いていますから、あとは解析お願いしますね。
海藤さんのおかげで、ずいぶん進みが早いので、私も助かってます」
急な琴美の方向転換に、少々戸惑う海藤。

「お、おう・・・やつとくよ。照橋さんも、ずいぶん
成長したね。じゃ、俺、集中管理室に行ってるから。
あつちで合流しよう」

「はい、わかりました」

（ふう・・・危うくあつちのペースに巻き込まれるところだったわ）
額の汗をぬぐう琴美。とにかく今は冷静に対処しなければならな
い。

事務所に戻ると、琴美は自分の仕事を開始した。
すると、思わぬトラブルに見舞われてしまう。

マシントラブルで、復旧までに少々かかりそうな気配だ。

すぐに担当者である、海藤に連絡しようと、携帯をバッグから取り
出す琴美。

「あ、海藤さん。照橋です。今、マシントラブルで

復旧までに少々かかりそうなんで・・・」

「俺に言われても困る（ブチっ）」

「はあああああ？報告でしょ！あなたにどうにかしてくれってん

じやなくて

現状報告をしただけでしようがっ!!!」

すでに通話が終わっている携帯に向かって思わず叫んでしまった琴美。

しかしそうやって吠えている場合ではなく、1秒でも早く復旧をさせなくてはならない。

一心不乱にバックアップデータを確認し、復旧作業に勤しむ琴美。数時間して海藤から電話が入る。

「あのさ、データのバックアップはもう一台のマシンがあるからそれ、俺がいつも使ってるやつ。そいつにこまめに入れといていいから。」

あとは、ステイックメモリに入れて、ディスクにも焼いておいて。三重四重にしとけば、何かあっても慌てることないよ。

君のマシンはもう少ししたら調達できるから、そうしたらそこにに入れておけばいいし、外部メディアも注文しといたから」

(なんなの・・・このものスゴイ怒涛のフォローは・・・)

すごすぎる・・・彼のアドバイス、的確超えて、超絶レベルだわ) 「ありがとうございます。助かります。今回はとりあえず大丈夫でしたが

今後のことを考えて、今いただいたアドバイス通りにします」

「うん。今、俺が言えることはこれぐらいだけど、あとは自分で工夫してバックアップとっておくといいよ」

(・・・あのにつくたらしいやつが、急にこんなことを言うなんて・・・惚れてまうやろ!!!) ↑もう惚れてるやろ

とりあえず、目の前の仕事は順調に進みそうだ。あとはタツクルを組んで、茉莉沙達と協力していく必要がある。

取り急ぎ仕事に取り掛かり、茉莉沙達とのプロジェクトについてはこの後に実行しなければと、考えながらキーボードをたたく琴美であった。

前触れ

「あ、筋トレきつつ、最近腰痛でさあ」

サッカーチームで筋トレを指導する鈴木煤無。

同僚のアシスタントコーチと、ベンチで雑談をしていた。

「おい、そういえばもう警察沙汰は解消したのか？」

アシスタントコーチは、たばこに火をつけながら煤無に

問いかけた。

「なっ・・・もう、過去の出来事でえ。オレの記憶からは

抹消されております。復旧はできない模様です」

煤無は右肩を回し、首を左側にひねりながら

とぼけた様子で応えた。

「そのなんだっけ、洋服屋のおねえさん、きれいなもの？」

俺にも紹介してよ」

同僚の予期せぬ質問に、一瞬たじろぐ煤無。

「おねえさんって、弟の友達のおねえさんだからね。

友達の友達はまたその友達ってか、うん。そんな感じだしな

紹介とか、ねえわ」

動揺をごまかすかのように煤無は話を変えようとした。

「いやあ、元代表キーパーの藤山さんが亡くなったニュースは

シヨックだったよな」

「あ、そうだな・・・鈴木君、藤山さんと会ったことあるんだよね？」

「ああ。俺の事務所のすぐ裏がたまたま練習場だったんだよ。

散歩してたらさ、監督の都海さんと一緒に藤山さんがいてさ

ブラジル人選手と話してたんだよ。一人選手が日系人だったから

通訳してあげてたみたいで」

「癌だったみたいだよ。残念だよな・・・」

「スポーツ選手って結局寿命短かったりするよな・・・

サッカーもそうだけど、他のスポーツもなあ・・・

体酷使するから、実はボロボロだったりな・・・

そこいくと、俺たちあ、ピーク迎える前に

選手は辞めてるから、なんとかキープできてるよな」

「そういえば鈴木君の弟、料理上手なんだって？」

そういうのポイント高いよなあ。やっぱり、健康は
栄養からっていうしき。俺は一人暮らしだから

どうしても、コンビニとかになつちやうんだよ。

たまに実家帰ると、やっぱ手作りいいなって思うわ」

「だよなあ。弟が料理作ってくれるとかって

あまりないもんな。だから、スポーツ選手って早く結婚するやつ
多いんだろうな」

「おまえ、その洋服屋のおねえさんをお嫁さん候補にしたら
いいんじゃないかね？」

(やべっ……せっかく話そらしたのに戻ったたじやねえか)

「うっ……なんか乾燥してるから、のどがイガイガする。

飲み物買ってくるから」

「あ、ああ。」

やっこの思いで話を逸らし、同僚との談話の場から立ち去った
煤無だったが、茉莉沙の話題になると、なぜか

冷や汗が出てくる自分に驚いていた。

「そういえば、あれ以来会ってないな……」

木菟の話だと、退院して元気にしてるって言ってたから
安心したけど……騒ぎになって迷惑かけたから

スイーツでも買って、お詫び入れとくか」

週末の3連休を利用して、お礼がてら茉莉沙のところに
立ち寄ろうとしていた煤無だった。

三役そろい踏みとばかり、主要人物が揃う日が近いとは
この時はまだ気づいていないやんちゃヒーローだった。

明日の行方

「なんかさ……結局。人生って何かなって思ってた。生きててこの先どうなっちゃうんだろ……。俺なんかいない方がいいんじゃないかなって思ったり」

「煤無さん、同業先輩の訃報を聞いて、落ち込んでるのね。スポーツ選手だからってことだけじゃないと思うよ。」

人によつてはストレスの解消の仕方とか、遺伝とか……。

野球のあの大監督は、倒れたけどちゃんと復活してるじゃない。

もう一人のコツコツ実直型の大物だって、長生きしてるし……

確かにスポーツ選手はワイルドな人がおおいから

人によつては健康管理が残念な人もいるかも、だけど

必ずしもそうだからってことでもないかもしれないし」

「でも、あんなすごい人たちは、短命でも大往生ってか

すごいなーって称賛されていくわけでしょ……

おれなんか、なにがあんのかなって。生きてて意味あんのかな。

って。あの世の方が居場所かな、とか……」

「は？なんだって……??死ぬとか言ったら許さないからっ！

死にたいとかいったら、ぜってー許さないっ！ぶちころす

!!」

「……茉莉沙……ちゃん？」

てか、ぶちころされちゃったら……同じ……だよね？」

「うるさーい!!!とにかく、許さん!!」

二度と死にたいとか、生きたくないとか言うな!!!

地獄の果てまでストーリーカーしちよる!!!ばかっ!!!」

叫び声をきいて、真己人が部屋のドアをたたたく。

「ねえちゃん!どうかした?」

弟の声に気が付き、ベッドから起き上がる茉莉沙。

「いやだ……また夢だ……。でも、今のって

夢じゃなくて、思考が飛んできていたような……」

「ねえちゃん、開けるよ?」

ドアを開け、真己人が心配そうな顔でおそるおそる姉の顔を覗き込んだ。

「マツキーごめん。なんか変な夢みちやっただ。」

「もしかして、ズッキー兄ちゃんの？」

「うん・・・」

「僕もなんとなく聞こえてきた。はっきり言葉じゃないけど

念・・・っていうのかな、ネガティブな感じが伝わってきた」

「でしょ・・・あんなに天真爛漫に明るい人なのに

心の底は悲しい思いがあつたのね・・・」

「そうみたいだね。僕もびっくりした」

「私たち、表層の考えは読み取れるけど、深層心理って

簡単に読めないじゃない？その人と深い付き合いになつていくと

思考が読めてきて、深層心理も見えてくるけど」

「逆に僕は、表層心理が飛んできたあと、直観っていうのかな

この人なにかある・・・ってのは、わかるよ」

「そうね・・・私も昔はそうだったけど、コントロールしていくうちに

無意識にその人の深層心理は読まないようにしていたの」

「ねえちゃん、ずっきーにーちゃんのこと心配してたから

深層まで届いてきているのかもしれないね。でも、もしかして

近いうちにねえちゃんとか来るかもね。僕にはそんな風に聞こえ

た」

「そうなのね・・・私、自分が怒って叫んだところで

目が覚めたから、そこは冷静になれなかったわ。でも、

もし来てくれたら、気を付けて観察してみるわね。ミッションのこ

とも

あるし・・・」

「うん。僕もさりげなくズッキーから、なにか聞き出せたら

すぐにねーちゃんに教えるよ。」

「たのむわ。しばらく琴美さんとも会えないから

相談できないわ・・・琴美さんもうまくやってくれていると

いいけど・・・」

「うん。あと、僕、牧田さんのことも気を付けておくね。」

「おねがいね。彼女の兄貴の情報が入ったら教えてちょうだい」

「わかったよ。」

「今日は日曜遅番だから、お昼食べてからいくわ。マツキーの分もつくるから」

「ありがとう。食べたら僕も塾行くね」

二人はランチを済ませると、一緒に各々の行き先へ向かった。

茉莉沙が店につくと、見覚えのあるジャケットが目に入った。

ジャケットを纏った男は、店の中をのぞいていた。

「あれ？木菟君お兄さん？」

「あー！おねえさん！」

マツキーお姉さん！よかったー。今日休みかと思った」

「日曜の遅番だったの。ごめんなさいね。連絡くだされば

よかったのに。シフト教えるわよ」

「いやあ、なに、そのね。この間のお礼というか

お詫びしたいなどおもって、買い物のお礼によったんですよ」

「そうだったんですね。よかったら、中にどうぞ。

お客さんまだこないから」

「え？日曜だけど大丈夫？」

「ええ。今日は通りの向こうでゲリラライブイベントがあるから

しばらく暇よ。夕方以降にちょっと来るかもしれないけど」

「あー！、じゃ！遠慮なく失礼します。」

実はね・・・お姉さんの好きなシフォンケーキ買ってきたんっすよ

！

俺もスイーツ大好き派だから、おいしいとこの知ってんでー

これ！一緒に食べましょう！」

「まあ！うれしい！！早速、お茶入れるわね。

昨日お客さんに、焙煎珈琲をいただいたんだけど

お兄さんコーヒーは大丈夫？」

「あ！なんでもいけるっす！てか、シフォンケーキに紅茶もいいけど

「コーヒーつてのもしゃれおつつすねー」

「ふふっ・・・淹れ易いから紅茶にしてるけど」

私はコーヒー派なの。最も今はセーブしてるけど

昔はいちいちミルで挽いてから飲んでいたの。だから

今日は挽いて差し上げるわ」

「うおっ・・・今日きてよかったー」

喜ぶ煤無の顔を見ながら、深層心理を読み取ろうと

静かに観察を試みる茉莉沙であった。

(うまくいけば、いつか食事に誘えるかもしれないわね・・・

少し話す必要がありそうだわ)

データは確かか？

琴美は現在いる時間上の仕事をしながら
密かにミッション調査書類をまとめていた。

(俊つて、突拍子もない自論を持ち出してくるけど)

プログラマーっていうより哲学者みたい。哲学者で
ご飯を食べていくのは難しいけど、かなり興味深い
論文がかけそうだよね・・・あんな人なかなかいないわ
すごく才能があるのに、そういうところ謙虚なんだから・・・
強気と弱気が同居する人。

私はどんな俊でも好きだけど・・・優れたところも欠点も
どこからどこまでも好きなんだ・・・さて、資料をまとめておこう
か)

【主要人物】

霧雨茉莉沙 (きりさめまりさ)・テレパス (精神感應者) ブティック
「ナカJ」のマネージャー

霧雨真己人 (きりさめまきと)・茉莉沙の弟で同じくテレパス。バリ
バリの文系で本好き。

鈴木木菟 (すずきずく)・真己人の同級生で親友。運動と料理が得
意。

鈴木煤無 (すずきすすむ)・木菟の兄でプロサッカーチームのスタッ
フ (トレーナーや選手管理などマネジング担当)

照橋琴美 (てるはしことみ)・タイムトラベラー (時間旅行者) 現職
はシステム従事者

海藤俊 (かいどうしゅん)・サイコキネシス (観念動力者) 業務はシ
ステム管理者、琴美の先輩同僚。

茉莉沙とは幼稚園と高校が一緒。

牧田国生 (まきたくにお)・クレオバヤンス (透視能力者)。海藤、茉
莉沙と高校が同じ。

ガタイがいい。フットボーラーだった。

牧田七香美 (まきたながみ)・国生の妹。木菟と真己人の同級生。

日本人離れした明るい茶髪を持つ。透き通る白い肌、そばかす顔が特徴。

#####

(関係者は……こんなところか……)

鈴木さん達はなんでこのリストにあるんだろう……？

確か茉莉沙さんを事件から救ったようだけど……。弟同士は同級生で仲がいいみたいね。

バチッ！……あれ？停電……困ったな……

バッテリーはあるけど、オンラインが行かない……

この時代にある本部システムにアクセスしとかないと

正しくデータが反映されない……)

―数分して停電が解消された模様―

ぐういくん。パソコンが再起動した。

(あくよかった……大丈夫そうだわ)

この部屋だけは自家発電がないのね……予備室だから

仕方ないか……ここで作業してるのがイレギュラーなんだから……

えつと……牧田は某大陸国での核爆弾ボタンを狙っているようだ

わ。

彼は大陸国の影の参謀とつながりがあるらしい。どうやら

母方のお大叔父がそのようね。

大陸国の参謀本部内にあるスーツケースの中に

爆弾のスイッチがあり、それを押すと瞬時に地球上の大陸5／6が

壊滅する。

すべてを滅ぼせば、意のままに世界を操ることができるわけだ……

とんでもないわ。クレオバヤンスの力を悪用して

世界を手に入れようとするだなんて……

そんな無謀な野望をもった牧田を阻止しなければ

世界は破滅してしまう……いいえ、世界は牧田の黒い思惑に覆

われてしまう。

絶対駆逐しなければ。

とにかく相手に気づかれずに接近して、計画直前でストップさせる必要がある。

全員が力を合わせなければね。

俊が一番手腕を振るいそうだけど・・・彼の身になにかあったら

私は生きていけない・・・彼がいない世界はただの無意味な世界・・・

とにかく慎重に進めなければ・・・

いつ茉莉沙さんたちと合流しようか・・・

琴美はふっ、と小さくため息をついた。

各々方

「なんで連絡よこさねーんだよー！」

海藤が烈火のごとくまくしたてながら、電話口で怒鳴っている。

「……………（前に連絡したら、俺によこされても困るって言ったのは、

私の記憶が正しければあなた様だったではないでしょうか……………」

「とにかく、すぐ来て！」

「……………?」

「あ、いや……………そっち行く」

「……………わかりました……………」

（まったくもって、めっちゃくちゃだなあ……………

でも、彼なりに理由があるから、ブチ切れるんだよね……………

理由より先に感情がっつぱしっっちゃうからこうなる。

損な性格だわ……………てか、気を遣いすぎってか我慢しすぎなのよね。

やれやれ……………)

息せき切って、街道が琴美の作業場に入ってくる。

「データのバックアップ……………」

肩で息をしながら、海道が焦って琴美に詰め寄ろうとした

その時

配線につまづいて、琴美の方に倒れこむ海藤

「あ……………!」

突然のことに、目を丸くする琴美

「海藤さん!大丈夫?」

海藤の腰を押さえながら、琴美が海藤をいたわる

「ん……………あ……………だいじょ……………痛っ……………!」

「海藤さん!!出血してるわ!ちよつとまって」

倒れこみそうになったとき、机に置いてあった

セロテープカッターで手を切ってしまったようだ。

琴美は素早く救急箱を持ってきて、海道の手のひらを

消毒した。

「俊さん・・・深く切れちゃってるよ・・・」

とりあえず応急処置しとくから、すぐにお医者さん行ってね。ばい菌入ったりして化膿するといけないから。

血が止まるまで、ぐっと抑えていてね。」

琴美の手早さに驚きながらも、海道は瞬時の

対応に感謝した。

「わ・・・悪いな・・・」

「ぜんぜん悪くないよ。データはとにかく大丈夫だから

心配しないで。海藤さんの指示通り、バックアップとっておいてるから

この部屋で停電になっても、データは無事よ。」

「ずいぶん進歩したな・・・」

「ふふっ・・・俊さんの愛弟子だもの。できるに決まってるでしょ。」

「もいつかい言ってる?」

「え?」

「名前で呼んでくれたでしょ。もいつかい、呼んで」

「俊さん」

「おれさ、上の名前が非凡だから、下の名前で呼ばれることって

あんまりないんだよ。でも、下の名前で呼ばれる方がなんつーか

親しみ感じるってか、ほっとするんだよな・・・」

「シユンさん。傷口ひどくならないうちに

さっさと病院行きなさい」

「は・・・はいっ!」

いつもは拗ねたりいばつたりのさすがの海藤も、

不意の負傷時には少々気弱になったらしく、素直に琴美の提案に従った。

(こういう素直なところは、とつてもかわいいよね)

一方、茉莉沙達は、休憩室のテーブルを囲み和気あいあいと雑談をしていた。

煤無が立ち寄ってくれたことが、茉莉沙は心から嬉しかった。

ここ最近、不思議な現象が起きて、煤無と思われる念が

飛んで来ていたため、気になっていたからだ。

「おねえさん・・・茉莉沙さんって呼んでいいかな？」

「ええ、もちろんよ。煤無さん」

「なんか、照れるな・・・あはは。てか

茉莉沙さんってサッカー好きなんだね？」

「ええ。大好きよ。特に国際大会。」

この間もホンジュラス戦をみたわ。前から3番目の

特等席だったの。ちやうどうちの系列がスポンサーだったので

よい席をいただけなの。」

「へえ！すごいね。あれ、接戦だったよね」

「そうなの。ひとりで行ったんだけど、盛り上がっちゃって

隣に座ってた小学生とハイタッチしちゃった」

「茉莉沙さん、子供が好きなんだね？」

「ええ。子供、大好きよ。煤無さんは？」

「俺もね、今は大人のコーチしてるけど

子供のチームを教えに行ったこともあるんだ。

子供の真剣な顔って、ほんとうにかわいいんだよね。

できるまでずっとリフティング練習する子とかさ

すごいなーって」

「ほんとそうね。こどもの集中力って

スゴいわよね。子供に教わることも多いわ」

「あれ、なんだか茉莉沙さんと話が盛り上がるなんて

嬉しいなく。Jならまだわかるけど、国際大会熱狂する

女子ってめずらしいから、俺もなんかうれしくなっちゃうな」

「あら、そうなの？そういうえば、スタジアムの

女子トイレはガラガラだったわ・・・圧倒的に

男子が多いわよね。外国なんか、9割男子よね。

リアルナドリックの試合なんかそうらしいわ」

「ヨーロッパ行きてえ。本場の試合、見てみたいな」

「煤無さん行ったことないの？」

「うん。ちやうど故障しちやって。機会逃しちやった」

「そうなのね・・・私も海外はほとんどないの。」

留学生のお友達の結婚式で、韓国に行ったぐらいかしら」

「今度、みんなで行かない？うちら弟も誘って」

「わあ！賛成！他のお友達も誘っていい？」

「お、いいよ。じゃ、その前に懇親会でも

開きますか？」

今まで持ったことがない感情が湧いてくるのが明らかかな茉莉沙
だった。

（木菟君お兄さんって、本当にピュアな人だわ・・・
でも、どこか心に陰りもあるのね。

彼の秘密ってなんなのかしら・・・詮索しては

いけないけど、気になるわ。

それより、懇親会はよい提案ね。これで琴美さんや

俊君も誘えるわね。」

「ちようどバーベキューやろうかって言ったの。

マツキーと。よかったら、煤無さん、ズツキーといらして」

「おー！BBQね、いいね！じゃ、日にち決まったら

連絡して？弟経由でもいいし」

「ええ。そうするわ。今日はどうもありがとう。

シフォンケーキ、おいしくいただいたわ」

楽しいひと時を過ごした、茉莉沙と煤無だった。

ミッシヨン計画への日はそう遠くなさそうだ。

初会合

琴美がPCに向かいながらデータを整理している。

(女性がお化粧しないでゴミ出しとかできないーい、

ちよつと外にでるのでも、人に見られるのはいや

つてのを聞いて、だれもみてねーっし!!つて

不思議がるのが男なのに

自分の仕事や趣味のものだったりするものは

完璧にしたがるよね・・・

べつにそんなに完璧じゃなくていいじゃない？

って思うんだけど

おもしろいなー

俊もなにごと完璧を目指す男ゆえ

自分を追い込みがちなのである。

もし、私が明日までしか命がありません

ってなったら

後悔しないように、言うことは言っておこう

タイムトラベルはできても

置かれた運命を変えることはできないから)

ともかくにも時間が限られている故

待っている暇はない。

琴美が茉莉沙に連絡をする。

今度、紅葉みながらBBQをしない？という提案だ。

すぐに返信がきた。茉莉沙は琴美の提案をのみ

幼馴染の海藤も誘うことにした。

開催主は、茉莉沙ということに。弟や弟の友達とその兄も誘うから

海藤にも、先日の同僚を誘うよう促した。

すると、いつも返信が遅い海藤から

すぐに了承のメールが届いた。

1週間後の土曜日、皆が集うことになった。

絶景の紅葉カーテンに囲まれながら

茉莉沙、真己人、木菟、煤無、海藤、琴美の6人は郊外の渓谷にて紅葉BBQをするという段取りになった。

「琴美さくくん!!海藤君こっち!」

茉莉沙が離れたところから、琴美達に手を振ると

海藤は茉莉沙の横にいた煤無に反応した。

「あれ?・・・すっさん?」

すると煤無も目を見開き驚きながら

「かいどつちか?ひっさしぶりだなー元気だったのか?」

二人は抱擁しながら、お互いの背中をたたきあつた。

「あれ?二人知り合いなの?」

茉莉沙が問いかけると、琴美も同様に男子二人の顔を覗き込んだ。

「あー、鈴木君とは小学校のときにボーイスカウトで

一緒だったんだよ。な?」

海藤が答える。

すると、煤無が続ける。

「キャンプとか行くとさ、俺らつるんでやんちゃして

リーダーに怒られたよな。高校生のリーダーに怒られて

中学生にはふるぼっこされかけたよな」

「でもさ、すっさん強えから、中学生も

たじたじだったよな。なんだ、この小学生?つて」

「僕ったら、血気盛んでしたね。ハハハ。でもさ、あんときの

高校生リーダーかつこよかったよなあ。黒子のヒナタみてえ

だったな。

名前なんだつけ?」

海藤と煤無は話が盛り上がっている。

茉莉沙と琴美は啞然としながら顔を見合せていた。

(俊くんと煤無さんが知り合い・・・)

(俊と鈴木さんって知り合いなのね・・・)

男子の盛り上がりが治まったあたりで

ちようど肉が焼きあがった。

「さあ、皆さん召し上がれ。マツキーも木菟君も

「たくさんたべてね」

「ありがとうございます！にーちゃん、女子に焼いてもらったんだから」

「後片付けは男子だからね！」

「おう、わかっているって。もちろんそのつもりだよなあ？」

「かいどーっちっ？」

「あ、ああ・・・そんなの楽勝だな。てか、ズッキー

大きくなったなあ。あんどきは、ちびっこで、びやあびやあ泣いてたよな？」

「だって、シユンにいったら、いたずらすんだもん。」

「かわいさ余って、だよ。まるっこくて、お前ほんと、かわいかったよな」

「あら、今でもかわいいわよ。ねえ？茉莉沙さん？」

「ええ。木菟君ってとってもいい子よね。真己人もいつも

木菟君のこと褒めているわよ。自慢の親友だって」

「いやあ・・・オレ、そんなたいしたもんじゃねーっすよ。

たしかに、小さい時は神童とか言われましたけど。」

「調子こくところは、兄貴と似てんな。」

海藤が笑いながら、木菟の頭をつつく。

「シユンに、相変わらず口が悪いな！」

「琴美が笑顔で立ち上がる。」

「盛り上がり中、ごめんね。水がなくなりそうだから

汲んでくるわ」

「琴美が立とうとすると、茉莉沙も続いた。」

「私も一緒に行くわ。男子たち留守番よろしくね」

「え？重いから俺たちいくよ」

「煤無が立とうとすると」

「飲酒運搬は危険だから、あたしたちがやるわ。」

「キャスターあるから大丈夫。じゃ、ごゆっくり」

「そう言い残すと、茉莉沙と琴美はサーバーを持って

人影のない方に歩いて行った。

「これで二人きりで話ができるわね。琴美さんと話ができる日を待っていたのよ。」

「ええ。私も。今回、牧田も誘おうか迷ったのだけれどとりあえずこのメンバーでつて思っただけの。」

それにしても、俊と鈴木さんが知り合いだなんて驚いたわ」

「ええ。私もびっくりしたわ。さすがにそういうことは

普段から意識して考えていないだろうから、解読だけでは把握しきれなかったわ」

「そうよね・・・昔の記憶つて、ふとした瞬間に

蘇ったりするしね・・・あれ?・・・サーバーがひっかかっちゃった」

「琴美さん大丈夫?」

「ええ、ここがひっかかって・・・あ・・・きゃー!!!」

琴美が木の根っこにひっかかったサーバーを

外そうとした瞬間、バランスを崩し足を踏み外して、崖下に落ちそうになった。

とりあえず木の枝をつかんでいるが、力尽きれば下に落ちてしまう。

慌てる茉莉沙。すぐに真己人に念を送る。

(マッキーすぐきて! 琴美さんが・・・)

(え? ねえちゃん? どこ?)

(どこつて・・・ああ、周りは木しかないから

どう説明してよいの・・・)

(ねえちゃん、携帯は?)

(おいてきたわ・・・)

(さつき西の方に歩いて行ったよね? あのまままっすぐ?)

(ええ、たぶん・・・)

(今、すぐいくから、待ってて)

茉莉沙の念を受け取った真己人は、不自然にならないようにトイレに行くフリを装って、他のメンバーに断りを入れた。

「にーちゃん、s。おれ、ちいとおしつこ行つてくる！」
「おお、ゆつくりいってこいー」

真己人は大急ぎで茉莉沙達が行つたと思われる方向に走っていった。

ーつ木菟ー

祈りは届く

「ここはどこ……？森の中？」

あれ……俊だ……むこうに俊がいる……
何か箱みたいの持つてる……

腕が痛い……」

「琴美さんしつかり！気を失っちゃだめ!!」

「ん……」

ずり……琴美が捕まっていた木の根が撓る。

もはや力尽きそうだ……

その時、琴美の下方に煤無が現れた。

「俺が足を押さえているから、ひっぱりあげるんだ！」

煤無が叫ぶ。

「え??どうやってそこにきたの?」

茉莉沙が驚きながら、琴美を引き上げようとする。

だがしかし、引き上げるには女性一人では

無理がある。

すると背後に海藤が現れた。

目を閉じる海藤。そして全身に力を込め、両手を

合わせ、集中する。

その時、琴美の体が宙に浮き、崖の上に

体が移動した。

後から追いついた、真己人と木菟は

かたずをのんでその様子を見ていた。

茉莉沙は、はっ、と我に返ると

琴美の体を起こし、頬をたたいた。

「琴美さん、琴美さん!!!しつかりして！」

「ん……ま、りさ……さん?」

ゆっくりと琴美は目を開けた。

「琴美さん大丈夫？」

「茉莉沙さん……あたし……」

「崖から落ちそうになったのよ。」

「そうだったのね・・・でも、誰かが下にいたような気がしたけど・・・持ち上げてくれていたわ」

「煤無さん・・・え？なんで煤無さんが・・・」

崖から上がってきた煤無の方をみる茉莉沙。

ぱんぱんと膝あたりについた土ぼこりを払いながら煤無が答える。

「みられちったから、しゃーねーなー。おれっち

実は瞬間移動とかできちゃうみたいで。いわゆるひとつのテレポーターとかいうやつらしいな」

「・・・」

琴美と茉莉沙は哑然とする。

「にしても、もひとり力あるやついるみたいだな。

なー、かいどっち？お前、サイコキネシスだったんだな」

「すっさん、ここでこのタイミングで力披露とはな・・・

人助けだからしゃーないね？」

「煤無さんもそんな力があつたのね・・・俊君が

念力あるのは知ってたけど」

「え？知ってたの？まりさっち。なんで？」

驚く海藤に、琴美が答える。

「それはね・・・茉莉沙さんはテレパスなのよ。」

「え？？？・・・そんじゃ、おれっちの

やらしーこととかも見抜かれてたの？？」

「ふふふ・・・俊君も煤無さんも一般男子からみたら

すごーくジェントルマンよ」

「参ったな・・・マッキーねえさんがそんな力があつたとは・・・」

「こんなタイミングでカミングアウトするのはびつくりだけど

話しておかなくちゃいけないわね（大丈夫あなたがタイムトラベラーだって

ことは伏せておくわ）。」

目で琴美に合図をおくりながら、茉莉沙が皆の方を向き直った。

チキン

カミングアウトした勇者達。

全員になんらかの力がある模様。

「みんなすごい力があるんだね・・・僕だけ
なにもない・・・無個性?」

木菟が感心しながらも残念そうに呟く。

「おまえ、気づいてないの? お前が念じないと
俺の力が出せないんだよ」

兄の煤無が意外な答えを導きだした。

「え?」

「おまえが強く念じてくれたから、俺がテレポートできたわけ
にーちゃん、そうなの?」

「そう。言っただけじゃなかったけどね。おまえが念じてくれなければ

おれは動けない。しかも、テレポートしたら1時間はそこから移動
はできない」

「・・・あ!!!だからか!!!」

小学校の時、にーちゃん急にいなくなったと思ったら

しばらくして戻ってきた・・・」

「そうそう。喧嘩して、にーちゃんなんか学校の体育館の倉庫に
閉じ込められちゃえ! って、思っただろ?」

めでたーく、俺は体育館の倉庫に閉じ込められました」

「やばっ・・・それで、どうやって出てこれたの?」
「親切な用務員のおじさんに助けられたのさ。」

近くを通りかかったときに、おれが叫んだから、気づいてくれた。
不思議がってたけどな。超絶焦ったけど、なんとかごまかした

よ・・・」

「ご、ごめん・・・でも、知らなかったんだ」

「だよな。しょうがないよ。でもさ、今回は

人助けに役立ったんだから。琴美さんのこと助けて! って
念じただろ? だから、動けたんだ」

煤無と木菟の会話を聞きながら、一同驚きながらも納得していた。

「ところで、琴美さんはどんな力があるの?」

真己人が尋ねた。

「あ……あたしは状況把握能力。」

感覚で見えてない部分の状況を瞬時に把握できる能力よ」

(琴美さん、それがいいわね。本来の能力と一番ちかいものね)

茉莉沙がわからないように、かすかに目配せをした。

「とにかく、ありがとう。みんなのおかげで助かりました。」

また、不手際があつてごめんなさい……

これから、みんなと力を合わせて、あることをしなくちゃいけないのに」

「あることつて?」

真己人が隣にいた琴美の顔を覗き込んだ。

「うん……これから話すね」

「んじゃあ、堅苦しい話のまえに、肉や野菜も焼けたんで

これら、ガリガリつてたべて、モリモリつて元気になって

士気を高めようや!」

海藤が気ぜわしくトングをパタパタと動かした。

「肉だけじゃなく、魚もあるよ。近所のおじさんから

サンマ差し入れもらったんだよ。これ、焼こうよ。」

木菟がクーラーバッグを開けた。

「おおおお!!サンマかあ〜おれ、好きなんだよな〜

シユンだよな旬。あ、だじゃれじゃないよ。

しゅん君♪」

煤無がふざけて海藤の腕をつついた。

「なんだよ。俺だつて好きだぞ。俺は甘露煮の方が

いいけどな」

箸を啜えながら海藤が続ける。

「あたくしはカルパッチョの方がよくつてよ」

茉莉沙がおどける。

「ぷふっ！ねーちゃん、魚苦手じゃ〜ん。

なに、きどつちやってんだよー！」

「ふふっ、言ってみただけよ。このサンマ、あまりに新鮮だから、カルパッチョできそう、って思ったから」

「あ、ねーさん、俺つくろうか？」

「ああ！ズッキー、お料理得意なんですよものね？

ぜひお願いー！」

茉莉沙が琴美の方をみながら、木菟に願いでた。

「木菟君って、料理ができるのね！いいわね！」

料理男子って素敵よね？ 食べ専の男もいるけどね？」

琴美が海藤の方をみながら意地悪っぽい笑顔で、ウインクした。

「食べ方が素敵♪って、言われるんだからな。

食べる専門で何が悪い」

海藤はちよつと不貞腐れて琴美を睨んだ。

「あら、だれに言われるのかしら？買って猫かしら？」

猫缶奪って食べたことがあるって、風のうわさで聞いたけど？」

「はあ？どんな風の噂だよ。買ってるの猫じゃねーっしっ！

犬だっしっ!!!」

「そうね〜。犬並みに足が速いものね？」

「おまえなー！ー！！！」

海藤と琴美のやりとりをほほえましくみていた

煤無が間に入る。

「はいはい、夫婦喧嘩はあっちでやってください。

VIP席用意しますよ？」

「ほんとー！仲が良いのね。羨ましいわ」

茉莉沙がビール缶を片手にほほ笑む。

「茉莉沙さんだったら・・・てか、茉莉沙さんと煤無さんだって

お似合いよ？」

「え・・・」

茉莉沙が狼狽しながらビールを飲み干す。

「もーさー、なんなの、この合コンモード。」

じゃ、おれはマツキーとラブラブに……」
木菟がおどける。

「てかさ、あなたたち二組は別に席を設けたら如何？」
真己人も続ける。

「えっ!!!いいわよ。このままで……」

それより、食事が終わったら、デザートあるからね。
たいらげたら、またまじめな話しなくちゃ、だよ？」
茉莉沙が焦りながら、話を戻そうとした。

「はいはい、わかりました。じゃ、とりあえず
食事楽しんでおきましょうかね？」

海藤がまとめた。

いよいよ大詰め。ミッシヨンミーティングは
この後始まるようだ。

ハプニング

森の中を歩いている琴美と海藤。

「大きなミツシヨンって何？」

海藤が琴美の顔を覗き込む。

「え．．．うん．．．それがね」

琴美が言い淀む。

「ダークリウニオンがやってくるとか

言うんじゃねえだろうな？」

「はい？ そういう妄想の話じゃなくて．．．」

少タイライラしながら海藤が琴美に詰め寄る。

「あるところから指令がきてね。

阻止してほしいことがあるって。

で、超次元の力を持っているメンバーで

解決してほしって」

琴美が下を向きながら、歩幅を広げて石ころをよける。

「あるところって、なんでお前の所にくるの？」

めんどーくさい、つじつーさんの指令なら

俺んどこに来るはずだろ？」

「そんなんじゃないの．．．」

シュンさん、牧田って知ってるでしょ？」

「うん．．．え？なんで、お前知ってるの？」

(てか、いま、下の名前で呼んだ？)

「奴も能力を持っているけど、それを利用して

悪事を企んでいるらしいの」

「ふくん．．．なんかよくわかんねえけど

あいつなら企みそうだな。で、出所は

言えねえってか。」

「まあ．．．そんなところね」

「あれだよな。秘密結社じゃねえけど

指令がきても、それ以上何も尋ねるな

ってやつだろ？知らなくていいこともある。

おまえらは、ただだまって従ってろ、ってか？」

「うん・・・時期が来たら言えるかも・・・だけど」

「今頃、あつちでは茉莉沙つちが、すつさん達に

説明してんだろうな」

「うん・・・きつと、みんな驚いているかも。

茉莉沙さんの弟君、真己人君の同級生だものね。

牧田の妹は」

「てことは、ズッキーの同級生でもあるわけだ」

「そう。いろいろつながっているわね」

話しているうちに、森深く歩いてきてしまったようだ。

BBQ場所からこぼれる明かりも見えなくなってしまった。

「やべっ・・・道に迷ったかも」

「大丈夫よ。GPS使えば戻れるわ」

「電波ないんじゃないか？」

「そんな・・・あ！本当だ」

「おまえの、状況を把握する能力、まあ、千里眼ってところ？

それ使えばいいんじゃないか？」

「・・・能力はあまり使うと、体力を

消耗しちゃうのよ・・・あなたもそうでしょ？」

「あ・・・まあ・・・窮地に立たされなければ

使わないな・・・ってか、今、クライシスじゃね？」

「大丈夫よ。今来た道をそのまま戻ればいいわ」

「こう暗いとな・・・」

「ごつちよ」

琴美が海藤の袖をひっぱる。

「おいっ・・・あっ!!!」

草むらに足をとられつまづく海藤。

それを琴美が支えようとしたが、バランスを崩して

倒れこんでしまった。

どさつ・・・

琴美の上に海藤が重なる。

「あ・・・ちよ・・・」
焦る海藤。

顔と顔が10cmの距離に近づき、琴美の顔の真上に海藤の顔が、覆いかぶさる。

琴美は真つ赤に紅潮した顔をそむけた。

「あの、えと、っ、ごめん・・・」
必死にとりつくろう海藤。

「謝らないでよ・・・」
琴美がぼそつと呟く

「いいよ、しばらくこのままで・・・てか、このままでいて」
言葉を絞り出すように、琴美が声を発した。

琴美の肩の上に手をつけていた海藤はそつと手のひらを琴美の頭に置いた。

琴美も自らの腕を海藤の背中にゆつくりと回した。日が落ちて肌寒さを感じさせる空気が

一帯を包む。琴美は、回していた腕に力を込めて海藤のぬくもりを引き寄せるように、彼の体温に寄り添った。

その時、遠くから声が聞こえた。

「お〜い!!! 兄貴い〜!! 琴美さあ〜ん!!」

懐中電灯を照らしながら、真己人と木菟が森を歩いてきた。

はっ!と我に返った海藤と琴美は互いの体を起こし

服についた土ぼこりを払った。

「お〜〜弟どもお〜〜こつちだ」

海藤が声を出すと、真己人と木菟は歩みを速めて

声の方に進んでいった。

「あ! 兄貴!!! こだったか! 迷ったって聞こえたってマツキーが言う

からさ。

探しに来たんだよ」

懐中電灯を海藤に照らしながら木菟が心配そうに声をかけた。

「ああ、ありがとよ。ってか、邪魔しやがって」

海藤はホツとしながらも、少々不本意とばかりに
助っ人に毒を吐く。

「あー兄貴い・・・ごめんごめーん!!!」

いいところだったのにねえ。空気読まなくて
すまない!!! 俺のスイーツあげるから許して!!」

木菟は、立ち上がった海藤の背中に付いた枯れ葉を
払いながら軽くハグして許しを請うた。

「あ、ああ。なら、許す。てか、話は聞いたか？」

「うん。あらかた聞いたよ。あとは、どうやって

計画を阻止するか、話合わなくちゃねってとこまで
行った」

「そうだな・・・あとは、SNSとかでこまめに連絡
とりあう感じで、軌跡をたどっていくしかねえな」

真顔の海藤に、木菟、真己人、琴美がうなづく。

「じゃ、とりあえず戻って、撤収して

今日はおひらきだな。こおみいちやんの自然の呼び声も
解消したみたいだからな」

琴美の方をみながら軽くウィンクする海藤。

「真己人君、木菟君ごめんね。ビール飲みすぎて

お手洗い行きたくなっちゃって。シユンさんがいるから
大丈夫だと思ったら、この人ともない方向音痴なのよ。
まったく頼りになわないわ」

照れ隠しに毒づく琴美。

「はあ?なに、この勇敢なナイトをこき下すわけ?」

君?そんなんじやお嫁に行けないよ?」

「別にあなたにもらってもらおうと思っただけから
いいわよ」

「どうぞどうぞ。俺だってモテモテですからね
まったく無問題ですわ」

じゃれはじめた二人をいさめるように

木菟が割って入る。

「にいさん、ねえさん、痴話げんかはそのぐらいにして

戻りましょうよ。戻ったら、結婚披露パーティーにするから。

もうね、見てられないわ。とろけすぎ。

ピザのチーズもびっくりだよ。甘すぎて

たまりません。な？マツキー」

黙ってニヤける真己人。

「ん？なに、ニヤニヤしてんの？マツキー。

……もしかして、あちらの茉莉沙ねえと

おらの兄貴もイチャラブ満喫中？」

真己人が口を結んだまま右頬を上げながら

うなづく。

「はあ〜どいつもこいつもお熱いことだ。

夏が戻ってきちやうんじゃね？」

真己人、木菟、海藤、琴美の4人は

笑いながら、BBQタープのところに向かった。

告白

茉莉沙が煤無を見つめ戸惑いながら

問いかける

「煤無さんって、その……彼女とか……」

煤無は笑いながら答える。

「いないよ。わかるかと思うけど、おれ、こんなんだし」

「煤無さんは性格もよいし、かつこいしいし、運動神経も

抜群なのに……女子の方から寄ってくるでしょう?」

「んー。そうでもないよ……。きさくに話しかけて

くれるけど、俺みたいなのとつきあっても、ね……

楽しませることもできないだろうし、サッカー一筋野郎だったから

なんも知らないし……」

「それがいいんじゃないの!すごく素朴で純粹で……」

「いやー。サッカー野郎ってさ、チャラいつてか、モテるんだけど

俺の場合は、みんなが想像しているのと、実像とに違いが大きくて

さ。

だから、きつと俺の本質知ったら、がっかりするんじゃないかと

思って。

別に無理して女子と付き合いたいとか思わなかったし……」

(だから邪な心がないのね)

いたずらっぽい笑顔で茉莉沙が煤無に畳み掛ける

「告白されても断るの?」

「え……?あ、ん……今まではピンとくる人が

いなかったけど……」

もし、茉莉沙さんに告白されたら、そんなの二つ返事で

YESだよ!あ、3文字だな」

茉莉沙は満面の笑みで煤無に向き合う

「じゃあ、私とつきあってください」

「へ???あ???…な???…ば…???」

「あなたみたいなの、初めて会ったわ。」

これまでは、邪な思考しかない人ばかりで

正直、男性なんてみんな同じだと思っていたの。

でも、あなたのような人に出会って、私の意識が変わった。

真己人も同じ。木菟君といるとすごく気持ちがいいって。

私たちは、あなたたちといると、ホツとするの。」

「そんな・・・海藤つちとか・・・やつの方がイケメンだし・・・」

「俊君は兄弟みたいなものだから、ときめきはないわ。」

それに、俊君は琴美さんとイチャラブ中よ」

「へ???・・・あ、そうなの?」

「あら・・・琴美さんに興味があつたの?」

軽く嫉妬してみせる茉莉沙

「いや・・・いや、違います違います。」

素敵な人だとは思うけど、ちよつと冷たい感じだし

ぼぼぼぼぼくは、あ、いや俺は・・・茉莉沙さんが

その・・・

憧れってか、そんな、あの、茉莉沙さんみたいな人が

俺を気に入ってくれるなんて、思ってたから・・・」

「大好きです」

茉莉沙は煤無の方に椅子を近づけて、煤無の手の甲に

自分の手のひらを重ねた。

「まままま・・・茉莉沙さん・・・」

煤無は戸惑いながらも、衝動を抑えきれず

茉莉沙の頬に手を当てて髪をかき分け、自分の体を近づけた。

茉莉沙はそつと目を閉じた

その瞬間

(見つかった！)

という真己人の声が、茉莉沙の脳裏に響いた。

茉莉沙はすかさず立ち上がる。

「見つかったって！」

煤無は一瞬のけぞって体制を崩したが

持ち前の瞬発力で、左手でテーブルをつかみ
立て直した。

バランスを崩した煤無を支えようと、茉莉沙が煤無の腕を引っ張る
そのとき煤無の体が茉莉沙の方に密着する

(やべ・・・茉莉沙さんって・・・うわっ・・・胸でかつ・・・
ってか、これ、読まれちゃってんじやんなー。。。あー。。。終
わったー。。。)

チーン・・・)

茉莉沙は煤無の腕をつかみながら笑った。

「ふふっ、大丈夫よ！そんなことで軽蔑なんかしないわ。きわめて健
全健全！」

煤無はホッと胸をなでおろした

「よかったー。。。心が裸って、恥ずかしいなー。でも
いちいち言わなくていいってのも、いいかもな・・・

あ、見つかったんだよね。じゃ、行こうか」

「うん！行きましょー！」

どちらともなく手をつなぎ

二人は真己人たちが歩いていった方に進んでいった。

しばらく進むと、海道、琴美、真己人、木菟の4人が
笑いながら、煤無と茉莉沙の方に向かってきた。

「ねーちゃん。邪魔してごめんよ〜」

「おい、すすさんに、茉莉沙っち、よくも邪魔してくれたな」

海道はこぶしを垂直に差出し、煤無を殴るふりをした。

「はあ?かいどっち、こっちこそ、邪魔されちゃったんだけど!!!
すつごくいいとこだったのにー」

煤無は海藤のボディにストレートを決めた。

「(ボスツ) 痛てっ・・・てかさ、ぶっちやけ邪魔したの

弟らじゃね?なあ?・・・えーおまえら?

あれ???いねーしっ!」

あたりをキョロキョロ見回すと、木菟と真己人が消えていた。

事前に打ち合わせていたように、真己人と木菟は

途中からコースを変えて歩いて行ったのだ

「いや〜。まつぎー、さすがだな。こりやーふるぼっこされることを
見込んで、さつさと逃げる作戦を立てたのは正解だったな」

「だってさー。なんかさ、軽く癩に障ったんだよねー
あっちもこっちもラブラブでさー。どうせ、これからずつと
イチヤラブできるんだから、今ここでしなくても。ミツシヨン終
わってから

やってくれ!って感じだよ」

「真己人が石ころを蹴りながら、軽く不貞腐れる。

「だよな!まあ、でも、結婚式が続くのはよくね?俺ら、
学生で親族だからご祝儀とかいらねーし。飲みほ、食いほだぜ?」

木菟が真己人をなだめる

「ねーちゃん、結婚しちゃったら、僕、寂しいじゃないか……」
はっ、と気づいたように木菟が目を見開く。

「そっか……じゃさ、マツキーと俺、一緒に暮らしたらどう？
俺ん家こいよ。下宿代は、俺の勉強みてくれるってことでさ」

「え……それって、楽しそう……てか、いいの？」

「ああ、いいよ。どうせ家庭教師つけなきゃーとかそういう話も
出てたから、だったら、よく知ってて、成績優秀の

霧雨真己人君を、俺は推薦する!!」

「提案してくれてありがとう！なんか、うれしくなってきた。

邪魔すんのやーめよっと」

「ははっ……マツキーも意外に幼いところあんだなー。

かわいいな」

「なんか、僕たちもラブラブだね？彼女とかつくんないですよ？」

「今は、野郎といるのが楽しいからな。彼女とかめんどいし」

「じゃあ、ズッキーとの同棲生活を夢見て、ミッション

成功させるか！」

「ああー！」

二人はハイタッチすると、遠回りして

二組のカップルの方に戻ろうとしていた。

ゲレンデラブ

真つ白な銀世界が目の前に広がる。

茉莉沙、煤無、木菟、真己人、琴美そして海藤の6人は七王山脈のふもとに集まっていた。

「牧田の野郎、またなにか企んでんだな。」

でも、またとないチャンスだから、うまうま乗ってやったよ」海道が吐き捨てる。

「この間の同級会でも、名を広めるために」

今後もいろいろ開催するって言ってたんでしょ？

まさによいタイミングだったんじゃない？

温泉宿泊付きスキー場でのパーティーなんて

なかなか企画よね？」

茉莉沙が琴美の方を見ながら同意を求める。

「そうね。私みたいに滑らない人でも温泉は

入るわ。それにディナーも楽しみ。会費がたったの3,000円つてのが

すごいわよね。

会社の福利厚生でもここまでのお得プランってないわ」

琴美も感心しながら、改めてパンフレットを手に取る

「ねー、妹の牧田も来るんでしょ？僕、ほんっと苦手

なんだよね・・・」

真己人が太ももをさすりながら落ち着きない様子を見せる。

「だいじょぶだって。俺もいるし、ねーちゃん達だって

いるんだから。今回は。なんも心配いらねーよ」

木菟が真己人をなだめる。

「なんかさー、いやなんだよね・・・」

泥沼から覗いてる【目】みたいで・・・」

「真己人君、心配いらないわよ。なにかあったら、みんなすぐに

動くから。君が心を読んだら、お姉さんに知らせ、木菟君が指令を出せば煤無さんもすぐに行動に移せるから」

琴美が真己人を励ます。

「うん．．．やつの考えてることは、なんとなく飛んできたんだけど．．．ねーちゃんの方が、しっかりキャッチしてると思うけど」

真己人が茉莉沙のほうを見る。

「そうね．．．ヤツの目的は最終的に、B国大統領室にある「核ボタン」を

押すことらしいけど、このスキープランからどうやってそこに行くかは

まだ謎ね．．．おそらく、テレパスの存在を警戒しているのね。綿密に思考を隠しているようだよ」

「はあ．．．やだなあ。悪徳超能力者程、怖いものはないよ」

真己人がため息をつく。

「おい、未来の弟よ。案ずるな。俺らがいる。いざという時は実弟が指令を出し、俺が現場に瞬間移動する。」

あとは海藤大佐が念力でなんとかしてくれっから」

煤無が真己人の肩をたたく

「そうよ。総司令本部は私が担当するわ」

琴美も続けて真己人を励ます

「あれ．．．今、【未来の弟】とか、おっしやいました?」

木菟が煤無の顔を覗き込む

煤無は横を向き、ポケットに手をつっこみながら口笛を吹く

「もうー茉莉沙さん達ったら、いつの間にな!!」

琴美が満面の笑みで茉莉沙の両腕をつかみ、激しく揺さぶる

うつむき真つ赤になりながら、茉莉沙が説明しようとする

「いままでこんなすばらしい人に出会ったことがなくて．．．

この間、思わず告白してしまったの。自分でもびっくりしたわ。でも、この時を逃したら、もうない．．．って思ってた。

そしてこのプロジェクトが成功したら．．．

祝言をあげられたらいいなって．．．」

紅潮したままで、茉莉沙が言葉を絞り出す

「でね、僕はズッキーと同棲することに決めたの。

だから、ちっとも寂しくないから、とつとと嫁に行ってくれよ
ねーちゃん！って、背中を押したわけ」

少し元気を取り戻した真己人も続ける

「ほー、それはなかなかいい考えだね。

ねーちゃんが里帰りすると、弟に会えるっちゅーわけか」

上を向き高笑いをしながら、海道が拍手をする

「いやね・・・とにかくね、俺もそうやって奮起しないと・・・

このプロジェクトを絶対成功させなくちゃ！って

士気高揚ってかね。うん。なにがなんでも成功させなくちゃね」

煤無は頬を赤らめながら、こぶしを握って

皆に向かつて決意表明をした。

「そろそろ中に入りましょうか。牧田達も

揃っているわよね」

琴美がまとめると、皆荷物を持って、スキー宿泊場に

向かった。

有言実行

「おお。皆様、よくいらつしやいました。どうぞごゆつくりしていつてくだされ」

海道、美女をお連れだなあ？」

アメリカンフットボールで鍛えた強靱な体格を備え態度も大きく、威圧的なこの男は海藤を揶揄した。

「牧田さん、それはどうも」

そっけなく海道が答える。

「おねえさん、もの好きだねえ？」

こんな変わり者」

口元をきゅつと結んで、深呼吸してから

琴美が答える。

「ええ、私も彼に負けない変わり者ですから。

割れ鍋に綴じ蓋ですわ」

ふつ、とため息をつくときと皮肉交じりに牧田が返す。

「おや、なかなか気の強いお嬢さんで。

お友達もどうぞゆつくりなさってください。

ああ、若男子二人は、うちの妹の同級生だったね？」

真己人をかばうように木菟が一步前にでる。

「ええ、七香美さんと同じ学校です。」

いつもはおちやらける木菟も、真面目に直球で返した。

「ほお・・・なかなかの好男子だね。お二人さん。

君はスポーツ男子のようだね。もう一人の君は

文学少年？」

真己人は答えたくないという思いをぐつと堪え

仕方なく返答する。

「ええ・・・本は好きです。木菟君はめっちゃめっちゃ

運動神経よくて、高体連にも出ました。ユースでも

トップ張つてます。」

牧田は木菟と真己人の肩をポンポンとたたきながら

二人を見る

「まあ、どちらでもうちの七香美の彼氏候補じゃないなあ。運動神経が良くても頭が悪けりや困るし、成績がよくても弱つちいとなあ。」

握りこぶしに力を入れる煤無だったが

茉莉沙が抑える。

「自己紹介が遅れました。私、霧雨茉莉沙と申します。

かいわい町で、ナカJの店長代理を務めておりますのでどうぞごひいきに」

牧田は振り返ると、茉莉沙を上から下まで嘗め回すようにじつとりといやらしい目つきで侮辱した。

「僕ねえ、この通り筋骨隆々でしょ？オーダーメイドじゃないとだめなのよ。今度、利用させてもらおうよ」

(おい・・・茉莉沙、こんなやつ店に入れんなよっ!!!)

煤無の顔色が変わる。

茉莉沙は目で合図しながら、大丈夫、と煤無の腕をつかむ。

「ええ、ぜひ。来月は新婚旅行で不在にしますが

担当者に伝えておきますわ」

牧田の顔色が変わる。

「ほお・・・ご結婚なされるのだね？もしかして

隣にいる、いかにもスポーツ男子ってかんじのチャライ彼？」

煤無が歯ぎしりをする。見かねて海藤がフオローする。

「チャラさじや、お前に勝てる奴はいねえよ。

ケガで引退してなけりや、今頃日本代表だぜ。こいつは。

茉莉沙さんはお目が高いんだよ」

「なるほどね。そういう男性がお好みなわけだ？」

おねえさん、上品そうに見えて、なかなか肉食なんだねえ？」

牧田の言動に堪えきれなかったのは弟の真己人の方だった。

「姉を侮辱しないでください。義兄はとても紳士なんです。

そんなところに姉は惹かれたんです。」

(マツキー、いいのよ。こんなやつに何言われても

どつてことないから。とにかくミッションを成功させなくちゃ、だから、冷静にね)

茉莉沙は、念話で真己人をたしなめた。

「そりゃあどうも失礼しましたな。」

皆さんの人脈を期待して、牧田グループをどうぞ

よろしく願いますよ。会費以外一切お金がかかりませんから。ガンガン飲んで食べて温泉浸かってってください。

紹介チケットもお渡ししますから、お知り合いにぜひ。

明日は妹も合流しますから、挨拶させますよ」

(げっ、やっぱりあいつも来るのか・・・やだなあ。

まあ、にーちゃん達もいるから大丈夫だけど)

口をすぼめて拗ねた表情で茉莉沙をみる真己人。

「それは楽しみですわ。学校でも評判だそうで。」

なにげに茉莉沙も嫌味で返す。

「どんな評判かな？美人だが意地が悪くて

気が強いとか？」

牧田がボーイに目で合図しながら、シャンパンの瓶を受け取る。

「あら、妹さんの噂よくご存じなのね？」

さすが牧田グループの跡取りね。調査に抜かりはないようだわ」

琴美がシャンパンのグラスを向けながら、挑戦的な目で

牧田を凝視する。

「はっはっは。好きだなあ。そういう気の強い女性。

もつとも人のモノには興味ないけどね。さ、どうぞどうぞ

どんどん飲んでください。洋服屋のお嬢さんも」

(ほんっと、どこまでイヤミなヤツなのかしら。

茉莉沙さん、よく我慢できるわね？シユンと茉莉沙さんだけよ。

冷静なの。他はみんな頭から湯気が出てるわ)

茉莉沙の方を見ながら、心で話しかける琴美。

牧田は皆に会釈をするとマイクの方に移動した。

「それでは、皆さん。どうぞごゆっくり。

飲みほ食べほですから、早い者勝ちですよ。

存分に味わってください。それでは、メリークリスマス！乾杯！」
クラツカーの乾いた音が場内に響く。

同時に騒がしいBGMが流れ始めた。

「琴美さん、大丈夫よ。なによりミッションが大事だから。

何を言われても平気。とにかく成功させなくちゃね」

茉莉沙が琴美に近づいて耳元でささやく。

「あのね、正直、昔だったら、思考を読んだ瞬間

あんなやつなら、目を合わせず避けてたんだけど

煤無さんと会ってから、心が安らぐの。

彼が守ってくれるって思うと、それだけでどんなことも

嫌じゃなくなってくる。不思議ね。人を好きになるって

自分も変わるのね」

BGMにかき消され、茉莉沙の声は他には聞こえない。

(そうなのね・・・よかったわ。私、ぶんなぐりそうになったわ。

あなたをいやらしい目で見ているのもわかったの。ほんとに

ゲスな野郎だわ。それにしてもシユンも飄々としているわよね)

琴美はそのまま念で返答する。

「俊君は慣れているのよ。最初からわかっているから

予想ついていたのね。それに、彼も何かあったら、琴美さんを

守るわ。おそらく、彼が怒ったら一番怖いと思う」

(そ、そうね・・・確かに、何も言わないけど、頼りがいは

あると思うわ。)

「私たち、幸せになりましたよね？私は彼さえいてくれたら

何もいらぬ。なにがあっても全力で受け止めたいわ。

ねえ、琴美さん、ミッションを成功させたら

またみんなで遊びに行きましょう？」

(.....ミッションが成功したら

私は自分の時代に戻らなければいけないの。)

「何とかならないの？私はずっとあなたと友達でいたい」

琴美はだまって佇んでいた。瞳にうつすら涙を浮かべたまま。

その様子を感じ取った茉莉沙は、唇をかみしめていた。

ジョーカー

高級バイキングに舌鼓を打ちながら

一方で茉莉沙と琴美は、このパーティーの主権者

牧田太鳳（タオ）の観察は怠らなかつた。

（海道が連れてきた女が同僚？理系か・・・使えるかもな。

だがしかし、相当気が強そうだな。簡単に言うなりにはならないだろうな。

弱みはなんだ？

もう一人の女は服屋と言っていたな。店のスポンサーになるって話を

持ちかけたらのるだろうか？代理とか言ってたから、上に話を通すのは

あいつがやるんだろうから、やり取りは可能だろう。・・・ふっ

牧田の念を受け取ると、茉莉沙の顔色が変わった。

「!!」

「茉莉沙さん、どうしたの!」

琴美は茉莉沙の青ざめた顔を見て驚いた。

「琴美さん・・・あいつ・・・牧田・・・相当能力の高いクレアボヤンスだわ・・・」

「茉莉沙さん、どういうこと?」

「・・・ちよつと言いくいんだけど・・・気を悪くしないでね。

一般の男たちは、女性をみるとその人の裸を想像するのよ。勝手にね。

洋服の外から見て、勝手な妄想を繰り広げるわけ。

ところが、こいつは私の体をほぼ実物通りに描写していたわ。

なぜそんなに正確に描写できるかというところ、それは

能力が高い透視能力者だからよ」

茉莉沙は歯ぎしりをしながら説明を続けた。

「透視能力者がいることはきいたことがあったけど、ここまで正確に見えるとは思わなかつたわ・・・」

琴美は驚きながらも納得した様子で茉莉沙に問いかける。

「じゃあ、こいつは私の生身もわかったということね・・・」

「気持ちわるすぎるわ・・・」

「ええ・・・虫唾が走る・・・しかし今は、冷静にならなくちゃ。」

「こいつにも弱点はあるはず。それを見つけて、計画を阻止しなくちゃ。」

「洋服をつくりにきたら、それがチャンスね」

「茉莉沙さん・・・くれぐれも気を付けてね。」

「大丈夫。私がテレパスだということは気づかれていないから

こいつが来そうなききは必ず、一人勤務はしない。シフトも

夜間勤務はしばらく入れないようにするわ」

「こいつ、きつとお店のレイアウトとか監視カメラなんかを

事前に見通すんじゃないかしら」

琴美が茉莉沙を心配する。

「そうね・・・しばらくの間、男性のバイトを雇おうかしら」

二人が話していると、後ろから煤無が割って入ってきた。

「そのバイト、俺がやるよ」

「え???煤無さんが・・・?自分の仕事はどうするの?」

「ん?ファイアンセが窮地に立たされているから、手伝いますって

ヘッドに話すよ」

茉莉沙が驚く。

「そ、そんなことできるの?クビになっちゃうんじゃないの?」

「あ、だいじょーぶ。有給あるからね。ぜんぜん使ってないし。」

それに公式試合はしばらくないから。それにね、実はスポンサーを探していたんだよ。君のところで働いて、スポンサー契約を

とれるかもしれない、的な方向に持っていけば、それは仕事として認められるから、君のところからじゃなくて、うちから給料が出る。

ま、アウトソーシングみたいなものだな」

「それは良い考えね!茉莉沙さん、どう?」

「確かに・・・うちはJクラブのスポンサーを考慮に

入っていたのよ。前に、私が押してみたら、良い感触だったから。」

きつと、それは受け入れられるわ。

ちようど人も足りなかつたので、バイトを増やそうかつて話も出ていたの。それが、アウトソーシング契約になるなら

渡りに船だわ。煤無さん早速すすめましょ！」

茉莉沙は煤無と手を取り合つて喜んだ。

「はいはいいゝお二人さん、ラブラブのところ、ごめんねえ〜」

バイキングの皿を持ったまま、木菟が茉莉沙と煤無をからかう。

真己人も笑顔で、煤無の皿からサーモンを拝借する。

「おいっ！まつきー！意外に意地汚いな！」

「よそ見るからだよくん。」

「こらっ！、じゃ、そのマカロンよこせ!!」

「やくだよっ」

学生男子二人がじやれていると、笑顔で海藤が近づいてきた。

「おまえらこそ、ラブラブじゃねーか。てか、やっぱ若いよなあ。

なんだ、その食欲。胃に穴でも空いてんじゃねーか？そこなし腹だな」

「あにきだつて、ずいぶん皿に盛ってるじゃないか！」

は、はあくん……いとしの琴美さんに取ってきてあげたのねえ？」

木菟が海藤をちやかす。

琴美が海藤を見上げながら、笑顔で海藤の皿からスイーツをつまむ。

「あら。シュンたら。私の好きな物取ってきてくれたのね。ありがとう！」

「お……おう……。おまえと茉莉沙がちがさ、話こんでたからさそのうちにオードブルとかなくなっちゃやうと思つて」

照れながら海藤が琴美に皿を差し出す。

「シュン君つたら、ほんとうにツンデレねえ〜。そんなところに琴美さんもデレデレなのね？」

凶星をつかれて、琴美もほほを赤らめる。

「もう……茉莉沙さんたら……でもね、たしかに

意地悪なほど冷徹にされればされる程、チツクショーって

こつちが熱くなるのは否めないわね。そんでもって、たまにこうやって

やさしくされると、とろけちゃうのは本当だわ」

海道が聞こえていないフリをする。

「おいっ、かいどっち。しれっとしてんなよ。」

いちやいちやはしたいときにしておいた方がよいぞ〜

これから戦闘クライマックスを迎えるのであるから

今のうちに甘み充電しておいたほうが良いぞ?」

煤無が海藤にそう告げると、琴美の方に向き直る。

「なあ、茉莉沙。一日も早く、式をあげられるよう

ミツシヨンぜつたい成功させたい。すぐにでも終わらせたいから

最短で終わる方法を考えてくれ。

俺らはガードに周るから。琴美さんと二人で細かくやり取りしてくれ。

かいどっちと琴美さんは職場で顔合わせるからその連絡はスムーズだろうし

決まり次第、俺か弟に送っておいてくれる?」

真剣な眼差しで煤無が茉莉沙と琴美を見る。

「ええ、分かったわ。透視ができないよう遮光フィルターをかけて

メールのやり取りをするわ。あいつの能力はかなり高いから

暗号化して送る。慎重に迅速に進めるわ」

6人が話していると、少し離れたところから、こちらを窺っている女性がいた。

牧田の妹、牧田七香美だった。

極秘の計画

会場の入り口付近で、こちらの様子を窺っていたのは
牧田太鳳の妹、牧田七香美だった。

七香美は、真己人と木菟を見つけると
近づいてきた。

「あら、お二人さん。来てたのね？」

貧乏人の来るところじゃないけど？」

(うわ・・・いきなりきた・・・)

真己人が手に持っていたオードブルを一瞥してから
七香美の方をみる。

「ずいぶんとお金のかかったオードブルだね。

これで、この会費ってどうやって捻出するのかな？」

皮肉を含んだ真己人の言葉に、一瞬むっとしながら
七香美が答える。

「ふん・・・兄が何考えてるかなんかわからないわ。

とりあえず振舞っておいて、なんか利益があるかもって
思ってるんじゃないの？」

続けて木菟が会話に入る。

「へく。なるほど、えびタイってやつね。えびでタイを釣る・・・

「牧田さんって正直だね。それって、トップシークレット
っていうやつじゃないの？そんなこと俺らに
べらべら教えちゃっていいわけ？」

七香美が焦って一瞬言い淀む。

「え・・・あ・・・まあ経営者っていうのは

そんなもんなのよ。あたしは経営のことはよくわからないわ。
とにかくいつもは金持ちの集まりだけど

あんたたちみたいな平民が来るなんて珍しいなって
思ったからね」

すると木菟が続ける。

「まあ、平民のふりして実は大金持ちとかって

案外いるよね。

ほら、ジョニーズ事務所の社長さんとかって
オーデイションの時は、掃除のおじさんのふりして
会場にうろうろしてるんでしょ？

それで、少年たちの様子をみていて、掃除のおじさんに対して
礼儀正しい子とかみてて、ちゃんとしてた子を
採用するらしいよ？

なんかかっこいいよね。ほんとーはすごく偉い人で
お金持ちなのに、そうやって身分かくしてるって。

だから、顔を出さないんだってね。マスクミとかに」
悔しそうに下唇を噛みながら、七香美が言い返す。

「ふん・・・体育バカの割に詳しいわね。」

「あー、俺ね、ジョニーズにスカウトされたことあるから」
(まじか！)

真己人が目を見開いて木菟に肘鉄をくらわす。

(うそに決まってるんだろ。やり込める口実だよ)

木菟が真己人に向かって小さくウインクする。

「俺さ、こう見えても硬派だから礼儀正しいんだよ。

サッカーの試合してるときに関係者の人から声かけられてさ。

仕事ができる人は礼儀正しい人だって言われて。

スポーツ選手は礼儀ちゃんとしてる人多いから。

もちろん、そうじゃない人もいるけど。

でも、うちのチームはそういうのきっちりしてるから」

木菟が凜と答える。

「なるほどなー。だから、女子にもモテるんだよな。

ズッキーって。しかも賢くて折り目正しい女子力高い子に人気だ
よね。」

すると七香美が顔を真っ赤にして鼻息荒く言い返す。

「はん！貧乏人がなに言おうとも、負け犬の遠吠えにしかな

聞こえないわ。あたしにつりあうのは、外車に乗ってて

見てくれもよくて、すぐに海外行けちゃうような財力のある人よ」

真己人がクスツと笑いながら言う。

「なるほどねー。そういう人って浮気とかしそうだよね？」

金に物言わすってか」

「……………」

七香美が黙って拳を握り占める。

(マツキー……おい！おまえ!!!地雷踏んだぞ!!!)

こいつ、KN財閥の御曹司にこっぴどく振られたんだぞ！

三ツ星の女子に乗り換えられちゃって。)

木菟が目配せしながら、真己人に耳打ちする。

(え？ホント?)

「あ、牧田さん悪い。兄貴の恩師見つけちゃったから

挨拶行ってくるわ。兄貴がえらいお世話になったから」

木菟が慌てて取り繕う。

「あ、じゃ僕も行くよ」

真己人も足早に木菟に続いた。

七香美は二人を睨みつけながら、ボーイを呼んで

オレンジジュースを頼んだ。

少し離れたところから様子をみていた茉莉沙と煤無は

一旦会場を出た。

「どうだった？あの娘はなにか企んでた？」

煤無が茉莉沙に確認をする。

「いいえ……案外単純で、言っていることと

腹の中はあまり変わらない。頭はあまりよくないみたい。

兄程、陰険じゃないわね。ただの金持ちわがままお嬢さん

みたいよ。」

「そうか……じゃ、なにも情報は得られないのか」

「んー。ああいうこは、意外にボロを出しやすいから

接触してたら、兄の行動パターンとか、教えてくれちゃったり

するかも」

「なるほど。誘導尋問にひっかかりやすいってことだね？」

「そうね。マッキーも一人じやいやみたいだけど
木菟君がいれば、けっこういい感じでやり込めたりできるようだから。」

利用価値は大ね。まつきーも天然だから、意外に良い戦力かも」
「なるほどー！ところで、茉莉沙……」

俺が気になってるのは……」

「わかっているわ。シユン君と琴美さんのことですよ？」

「うん……ミツシヨンは早く終えたいんだけど……」

「ミツシヨンが終わったら、琴美さんは元の時代に戻ってしまう。
そうしたら、あの二人がどうなるのか？ってことですよ？」

「うん……俺らがなんとかしてあげたいけど、

俺らの記憶も消されてしまいうし、なにしろ琴美さん自身が

元の時代に戻っちゃったら、この時代の琴美さんは忘れてしまいうん
だろ？」

これまでのことも、俺たちのことも……」

「ええ……関わったすべての人と、すべてのことは

その部分だけ記憶が消されてしまいうわ」

「俺たちの関係は変わらないよな？」

「それは大丈夫だけど……あの二人は……」

「なあ、考えたんだけど……」

「なに？」

「ほら、子供の時に、タイムカプセルとかってやらなかった？」

「ああ、なりたいたいことや夢を書いて、カプセルに入れて

埋める。そして、大人になったらみんなが開けるっていうやつね
？」

「そう……そのやり方をヒントに、彼らに教える方法はないかな？」

「どうかしら……データは基本的に、瞬時に消されてしまうけど
アナログも、琴美さんの意識にかすっているものは消されてしま
うでしょう。」

カプセルも私たちの記憶から消されてしまったら、どうやって
開けたらいいのか……」

「俺に考えがあるんだ。協力してもらえん？」

「ええ、もちろんよ。私もあの二人には幸せになつてほしいの。

だって、本当に気が合うんですもの。そして、お互いがお互いを必要としてるし、唯一無二の存在だと思ふのよ。」

「同感だよ。俺にとつて茉莉沙がかげがえのない存在であるように

あの二人もそうだから。縁あつたらきつと、状況が変わつても

結ばれると思ふんだ」

「そうね・・・私もできる限り協力するわ。

牧田のミツションも阻止しなくちゃだけど、あの二人を必ず

幸せにする私たちだけの秘密のミツションも成功させなくちゃね

！」

二人は見つめ合いながら、秘密の計画を遂行させるために力を合わせようと強い決意を見せた。

縁と絆

琴美さん……？

照明の陰にひっそりとたたずむ琴美に気づき、近づいていく茉莉沙。

「琴美さん、どうしたの？」

茉莉沙が声をかける。

「ん……。ちよつと考え事をしていたの。」

この間の学会でIQの話が出てね。それとシユンのことを重ね合わせていたの」

琴美が視線を落としながら茉莉沙に語り掛ける。

「IQが高い人は数的処理能力が高いのよ。つまり

理数系の人はIQが高い傾向にあるんだけど、そういう人は周りの人と折り合いをつけにくいんだって」

「ああ、聞いたことがあるわ。アインシュタインも160〜190あつただろう

って言われているわね。」

「そうなの。IQが高い＝頭の回転が速く数的理論系の

ロジックで話すから、一般の人がついていけないのよ。

でも、純粹にその理屈が正しいと思って話すからなぜ理解してもらえないんだろうって苦労するらしいの。

言われている方は、『何言ってるんだろ？』的な目で見るから

単なる変人扱いされちゃうのよね」

「そうかもしれないわ……。そういう人を前にして

議論するのも面倒くさいから、あわせとこ、的な対応をする人もいるわね。」

「そうなのよ！それがシユンなんかも許せないのよ。

心底彼の理屈に同意してくれて、すばらしい！と認めてくれた上で賛同してくれるなら本意なんだけど、テキストに合わせて

とりあえず、従つとこ。こいつめんどいしって顔されるのが一番腹が立つみたいで。

同じSEはそういうことないけど、クライアントでねそういうのがいたり、文系の上司なんかには、わかってくれるまで熱弁をふるうから

はいはいって軽くあしらわれて、すごく悔しそうにしているわ」

「琴美さん・・・自分の時代に戻ってからのシユン君のことを

心配しているのね・・・」

「ん・・・まあ・・・。今でも、私がどうこうしてあげられるわけじゃないんだけど・・・」

彼は正しく理解されたいって思っているのよ。」

「ねえ、琴美さん？今ここにいる琴美さんは未来の琴美さんだけど

この時代の琴美さんも琴美さんよね？

パーソナリティが変わるわけじゃないわよね？」

「え・・・？まあ、そうだけど・・・」

「つてことは、たとえ現代の琴美さんがシユン君と向き合っても

その考えは同じだと思うわ。行きつくまで少し時間がかかったとしても」

「そうだといいけど・・・物事のベクトルって

なにかのきっかけでどうなるかわからないから・・・」

「大丈夫よ。あんな面倒な彼のことを理解して受け止めてあげられるの

あなたしかいないわ。

あ、ごめんなさいね。面倒とかいって。面倒なほど、緻密に理論的な

思考回路をもっている優れた人物って意味よ」

「ふふっ、茉莉沙さんだってシユン君のことちゃんとわかってるじゃない」

「それは、同じ超能力者として同感してるだけよ。小さい頃からみてきて

きつと大変だろうな・・・って、そんな気持ちで見えていたから」

「彼もある意味救われたと思うわ。小さい時にあなたみたいな人が近くにいて。私はずっとボツチ気分を味わっていたわ。」

だから、今、あなたたちに会えてとてもうれしいの。」

「現代の琴美さんと会えなくても、きつとシユン君とあなたは強い絆で結ばれているから、心配しないで。縁ってなかなか切れるものじゃないのよ」

「そう・・・ね・・・そう信じたいわ」

「大丈夫よ。ミッションだって、必ず成功するから。」

「こんなにすごいメンバーが揃ったんだから。稀有な巡り合わせよ。これも縁。だからきつと・・・ね？」

「がんばりましょうね」

「ありがとう。茉莉沙さん。ずっと孤独だったから、こうやって心を開いて話せる人がいなかったのよ。本当に心強いわ。」

「自分の時代に戻っても、きつとあなたたちとどこかでベクトルが交わるように、祈ってるわ」

「ええ。必ず！」

「琴美と茉莉沙はまるで長年の親友のように絆が強まっていくのを感じていた。」

遠隔治療

時は2000年・・・

「ねえ、シユン。どう?」

「あ、うん。今タツチ認証したのを医療センターで

血圧と体温測ってもらってる。咽頭はリアルタイムスコープで

見てもらって、喉奥の細胞も消毒済みアタッチメントを端末につな

いで

検査結果が出る」

「インフルかな?」

「どうだろう・・・聴診器データは異常ないようだけど」

「結果がでたら私にも送信してね」

「りよ」

数分後

「コト、残念なお知らせ。インフルA。やつちまったな」

「あらやだ。大変。5日間は外出できないわね。滅菌室にいても

3日はだめよ」

「そしたらさ・・・」

「はいはい。いいから。薬取ってこようか?」

「あ、いいよ。薬剤センターから届くから」

「平成なら考えられなかったわね」

遠隔診療。しかも、薬が宅配されるなんて。

平成の薬剤師さんたちは、宅配までさせられるなんて

思わなかっただろうね。」

「そうだな。看護師さんまでついてきちやうんだもんな。

点滴などが必要な場合は、医師の処方と共にやってくる。

美人な看護師さん望むって、診療データに入れといた」

「・・・・・・・・・・・・・・・・(ボスツ)」

「うぐっ・・・・・・・・、ごめん・・・・吐くもん

なんもないけど、胃液が出てきた……」

「美人の看護師に治してもらえば？」

「ごめんごめん。うそだって。」

「ジョーク、冗談、JODAN、ね？」

「今更遅い……」

「あれ？着信だ」

部屋内の空間に着信ランプが灯る。

どうやら、誰かからの通信連絡のようだ。

「あら、茉莉沙さんたち、ハネムーンから帰ってきたみたいね」

「おおおお!!!お早いご帰還だなあ〜。」

にしても、あれのおかげで、俺たちもこうして……」

「タイムカプセルね。あれには驚いたわ。」

「ミツシヨンが成功したら……」

「あんな経由で知らされるなんて、夢にも思わなかった。」

「未来がこうして変わったっていうのも……」

「あなたなんかと結婚するなんてね？」

「あ………せつかく機嫌直ったかと思ったら」

「まだ、怒ってる？」

「怒ってないわよ。そうやってふざけられるんだから」

「大してひどくないんだなって、安心してるわ」

「いや……熱はあるよ……でもさ。」

「コトちゃんの特製、鶏粥のおかげで、元気百倍だよ。」

「食欲ないけど、これなら喉を通る。」

「ヨーグルトバナナも、つるん、って入ってくるしさ」

「じゃ、薬届くまで、だまっておとなしく寝てなさい。」

「鈴木カップルには、私から返事しておくから。」

「うつす……あの、心配させないでね。」

ぼくちん、寝込んでるなんて聞いたら、茉莉沙ちゃんが飛んできちゆうからあく」

ボスツ!!

枕を顔に投げられる海藤俊。

「高熱で脳もやられたみたいね」

言い捨てると、琴美はトランスルーセントのプロジェクターから茉莉沙に返事を書こうとしていた。

花粉舞う

いつも通り木菟と真己人は一緒に
帰途についていた。

互いの部活が終わるのをなんとなく待っている
どちらからともなく歩み寄って帰る二人だった。

「なあ、ズッキー。今日、牧田が気になることを
言っていたんだけど」

真己人が木菟の方を見る。

「ん？お前に直接話しかけてきたの？」

無造作に肩にかけていたバックパックを直しながら
木菟が真己人の方を見る。

「いや・・・金持ち感じ悪グループで

話してたのを小耳に挟んだんだ」

「ああ、取り巻きな」

「うん。なんでも、冬休み中にハワイに行くらしいよ」

「兄貴と一緒にか？」

「そうらしい。そんで、あの女たちも連れていくらしいよ。」

「え？招待か？なーんか怪しいなー」

「だろ？ぜったいなんか企んでるよな。しかも、やつら、

ハワイに自家用機があるらしいよ。」

「ひゃー。金持ちは違うね。」

「ま、そこ驚くところだけどさ、で、ハワイから自家用機で

本土に行くらしいんだ・・・」

「え・・・それ、やばくね？まさかペンタゴるわけじゃ
ないだろうな・・・」

「さすがにそれはないだろうけど・・・だって、

妹も乗ってるわけだからさ。自分が乗らないで、パイロットと
妹達だけ乗せるにしても、妹は犠牲にしないだろう？」

「んーんーんー。わからねえな。こころはちと

おまえかねーちゃんが近づいて、やつら意図をつかまないと

だめかもな？」

「どうやって兄貴に近づこう……」

「まずは、ねーちゃんに相談して

それから、シユン兄の力を借りたらどうだ？

なんかよい考えだしてくれるかもよ。暗号呼び出し

できんだろ？」

「うん……ねーちゃんから、琴美ねえさん経由で
いける。」

「じゃ、早速作戦会議だな。おれらはまた明日

昼、屋上で一緒に飯食うか？おれ、お前の弁当作ってきてやるよ」

「ええ!!ありがとうー！なんか楽しみな……」

不謹慎だけど……」

「いいっていいって。緊張しすぎもいけないからな。

楽しみにしてろよ」

「おうーありがとうー」

家に戻ると、真己人は早速先程の情報を

姉の茉莉沙に伝えた。

「なるほど……ほんと、なにか臭うわね……」

でも、ついていくわけにもいかないし……牧田兄は

功名に仕組んでいるだろうし、思考を表に出さないようにしている
から

私たちがじゃあ手に負えないわ。」

ピン。携帯が鳴る。

「あら、煤無さんよ。……え？遠征で

メキシコに行くのね？アメリカ経由……で！

マツキー。これ、いいタイミングじゃない？」

「そうだね……でも、煤無兄きの能力って……

ズッキーがないと動かせないんだよね……

なんとか、全員でアメリカ行きできないかな……」

「私は有給が余っているから10日ぐらいの休みは
とれるわよ。品物の買い付けっていう名目でもいいわ」

「僕、どうしよう・・・シユンにいや琴美さんは出張ってことで、行けるって前に行ってた。」

「まっキーは、通訳。」

「え？」

「テレパスなんだもの。通訳のフリできるでしょ。」

私と一緒になら、なおさら」

「そうだね！じゃあ、その線で行ってみるよ。」

あした、ズツキーと一緒にご飯たべるから。」

弁当作ってきてくれるんだって」

「まあ、よかったわね。じゃあ、

そんな感じで話してみてくれる？」

私は、琴美さんに新製品が入ったから、見に来てって

誘ってみるわ」

「らじゃー！」

いよいよ6人の行動は本格化するのだろうか。

ワールドワイド

「何時のフライト?」

「あー……夕方方」

「ぎっくりすぎててわかんない!」

チケット自分で取ったんでしょ?確認してください」

「はい。秘書・コトミーは厳しいなあ」

「いや、厳しいじゃないよ、

フツーだから。海藤先輩。ちゃんとしてください。

ただの出張じゃないんですから」

「へいへい……あー」

えつと、成田19:25分発ホノルル行き。

到着は同日の朝7時でございます。時差は7時間。」

「よろしい。よくできました。他のメンバーも時間差で

到着するらしいから。全員海外で使える携帯じゃないから

pcテレビ版スカイペのidとっておいたからね。いざという時、

そこに

アクセスして画面チャットするから」

「ふあゝ。琴美さん、さすがですね。準備万端」

「あたりまえですよ!!!なぜ、あなたはそんなに

呑気でいられるの?」

「だってきー……。相手の出方がわからないのに

慌てても仕方ないじゃん。

いちおう現地のwifi接続状況の調査っていう名目あるんだか

ら

そつちもやんなきゃいけないじゃん?アセロつながり具合の評判

とか

速度とか」

「そつちはいちおうデータ作ってあるわ。あとは検証だけ。

実際にその場所にいつて、wifiのつながり具合と混雑状況を

調べてレポートするだけだから、普段だったら、お遊び気分満載の

出張旅行だわ」

「うおっほーい！こっちの仕事は楽勝だ〜」

「だーかーらー、こっちの仕事を楽勝にしといたのは

別のミツシヨンが実はメインだからでしょ!!!」

「わかるけどさー。それって、主な業務は

霧雨姉弟なわけでしょ？彼らの主導で、こっちが動くわけで」

「おんぶにだっこでどうするの？こっちもできる限りの情報を

収集しないとだめでしょ？しかも、牧田といちおう知り合いなの

シユンさん、あなたなんですよ?」

「まあね．．．でも、やつは簡単に心開かないからね。

むしろ、きれいなおねえさん達に、ユラっ．．．って

油断しちゃうかもよ？邪満載野郎だから」

「『達』って?」

「は？茉莉沙ちゃんとまりさちゃんとマリサちゃん」

ボスツ!!!

なぜか、そこにあつたプラスチックメガホンで

思いつきり後頭部を琴美に殴られる海藤

「イテテテテテ．．．琴美さん、華奢なのに

腕力すごいっすね．．．」

「どうしてへそ曲がりなの？こどものとき

言われなかった？おへそ横についてるんじゃないの？って」

「んー。そうだね〜」

ああ言えばこう言うっては、言われたかも〜」

「ほんと、屁理屈リンピックってあつたら

金メダルとれるわ、自分」

「琴美さんも銀メダルぐらい取れそうですよ?」

「あー。でもイーライっつとくる!」

バームクーヘン買ってくるから、コーヒ―淹れって」

「はあ〜、大事な秘書さま〜」

ケンカしながらも仲の良い海藤と琴美。

茉莉沙、真己人姉弟と、煤無、木菟兄弟とは
現地で落ち合う模様。

アクエリウム

窓の外は粉雪が舞う。

ちまたではインフルエンザが猛威を振るい

一度インフルAになった人も再度変型のAに感染するなど
とんでもないことになっている。

受験シーズということもあり

ちように試験を控えている子供たちの親は戦々恐々としている。

生まれてこの方インフルにはかかったことがない鈴木兄弟である
が

念のため予防接種を受けた。ただし風邪ではなく、黄熱病などの予
防接種だ。

木菟と煤無の二人はサッカー事情で一旦渡米することになったが
メキシコで合宿をすることになっていたため、
アメリカ経由でメキシコに行く段取りとなった。

煤無は休暇をくつつけることができるため、このプランは難なく設
定できた。

木菟もサッカー代表でユースにも入っていることから、兄と一緒の
行程としてのプランは

すんなり学校で受け入れられた。

二人は一旦ハワイに行き、そこからカンクン行きへのチケットを
取っておいた。

霧雨姉弟もハワイ行きの計画を立てている。

茉莉沙は、夏向けアイテムの買い付けでハワイ行きプランを提出。

以前もグアムに行っていることから、こちらも無問題で承認を得
た。

真己人は付き添い兼通訳という名目でお店に出張費用の1割を
持つてもらえることに

なった。ティーン向けのアイテムも必要であるから、男子ティーン
の趣向で

商品をみつくりとうというPLUS案も、有効だった。

真己人の学校には、姉の仕事の手伝いということで、茉莉沙が直々に担任に話をし

普段から品行方正で成績の良い真己人は、すぐに許可が下りた。

ハワイまでの日程は鈴木、霧雨共に同じだったため、

座席は、煤無と茉莉沙が隣同士で、木菟と真己人が一緒に座ることになった。

しばしフライトを楽しむ4人。

煤無はエコノミーシートをリクライニングさせながら考えていた。

―人に伝えるのって難しいね。

どうやって思いを伝えたらよいのだろう。

って思ってた。でも、何も言わなくても

君は僕の想いをわかってくれる。それは

この上ない喜び。

これまでは人に伝えることが難しく、どう表現したら

伝わるんだろう。・ってことばかり考えてたから。

君でよかった。君だから好きになった。

こんな気持ちになったのははじめてだ。

これからはずつとそばにいてほしい。

未来永劫寄り添って生きたい。

こんなこと、恥ずかしすぎて言葉になんかできないよ。

だから、テレパスの君には、心の水族館をじっくり眺めてもらえるんだから

がんばって泳いじゃうよ。―

フライト中、窓の外を眺めながら煤無は茉莉沙への想いを

募らせていた。

もちろん、気づかないフリをしながら、茉莉沙はしっかりと

煤無の心を受け取っていた。

ミッションは必ず成功させて、目の前にいる唯一無二の存在である

煤無と一緒に歩もうと
密かに決意する茉莉沙だった。

バレンタイン？

煤無と茉莉沙の座席から

ひとつおいた列に

木菟と真己人が座っていた

「なあ、マツキー。VDさ、もろう予定ある？」

「VD？」

「ほらー、スイーツもろう日だよ」

「・・・あーバレンタイン？」

「そうそう・・・マツキーさ、なにげに

たくさんもらえそうじゃね？」

「んー、おいらいつもねーちゃんからしか

もらってないよ。

あ・・・幼稚園のとき隣の席だった真珠（まじゅ）ちゃんがくれたけど。

でも、それって、真珠ちゃんのストラップを拾ってあげたからおかあさんがお礼にしてくれたんだよね。

だから、それってバレンタインだからもらったっていうより

ただのお礼だよ」

「ふうくん・・・」

「なに、気にしてるの？」

「だってさー、この時期渡米しちやったらさ

VDにももらえないじゃん？」

日本にいれば、間違ってもらっちゃったりすること

あるじゃないかなー、なんて・・・」

「あつちでもらえるかもしれないでしょ？」

「それがさー、外国は、つか欧米とかは

男子が女子にあげるんだってよ？」

「そうなの？」

「うん。男が花束とか女性にあげたり

レストランとかで食事したりするんだって。

もうさ、日本と真逆なんだよね。

ってかね、恋人とか夫婦だったり家族が

日頃の感謝の気持ちを込めて、プレゼント贈ったりするんだって。だからさ、告るってのとは違うらしいよ」

「そうなんだ？」

「そうそう。日本はうまうま企業戦略にのっかっちゃってるわけ。」

「そーいやチョコレート売れるもんね。この時期」

「そ。シャニーズなんか、トラックで届いたりするらしいからね
どんだけ？って感じだよね」

「ふええ。トラックかあ。僕もそんなにもらってみたいな」

「トラックは困るでしょ」

「ん。だって、腐るものじゃないから、ストックして

毎日5個づつ食べるとか・・・」

「マッキーどんだけ、スイーツ好きなんだよ？」

「あ、僕ね、結構好きだよ。ねーちゃん粉もの好きなんだけどね。

シフォンケーキに始まり、バームクーヘン、フィナンシエ、スコーン

ホットケーキ、ドーナツ。時間がないときは買うけど

休日なんか自分で作っちゃってるからね。」

「へえ。俺も料理は好きだけど、スイーツはたまにしか

つくらないな」

「あ、でもズッキーはお菓子とかも上手そうだな。

ほんと、才能あるって。シェフかパティシエになれば

いいと思ってるよ」

「ははは。ありがとな。けっこううれしいぜ」

「お世辞とかじゃないよ。本心。あれってやっぱ

才能だと思ってる」

「じゃ、このミッション終わったら、本格的に

勉強しちやおうかな」

「うん。その道に進んで、お店でも出したら

僕、営業部長やっちゃおうよ」

「お、いいねー。おねーさんここにも置いてもらうかな？」

「あ、それ絶対大丈夫だと思うよ。」

いろいろ夢が広がるね。とにかくミッション早く終わらせてあとは遊ぼうとひそかに企んでいるんだ。」

「俺もそれ、乗っかる。サーフィンとかしたいんだよね」

スキューバもやりたいぜ」

「僕も泳ぎたいな。落ち着いたら、1日ぐらい

遊べる日があるといいね」

「おう。終結が早ければ早いほど、遊ぶ時間が増える！」

まったくもって打ち合わせになってない二人のじゃれあいは大仕事前の憩いのひと時であった。

着陸態勢

あと数分で着陸態勢にはいる時間帯に突入した。
煤無は小さい手荷物からごそごそ何かを取り出した。

「あ……これ……」

煤無が茉莉沙に小さい箱を手渡した。

「え？なにかしら？」

煤無は直前まで違うことを考えていたため
思考は茉莉沙に読まれていない。

茉莉沙は、きれいな包み紙に覆われた箱を見て
少々戸惑いながら煤無に問うた。

「あ……開けてみて」

煤無も照れながら、答えた。

茉莉沙は丁寧に包みを開き
箱をあけた。中にはかわいらしいバイオレットの
ピアスが入っていた。

「まあ、素敵ー」

茉莉沙は頬を赤らめて喜びながら

「でも……どうしたの？」

と、突然の贈り物に喜びながらも予想外のサプライズに
戸惑いを隠せなかった。

「あ……バレンタイン。とき、日本で

女子が男子にあげるじゃない？本命だったり義理だったり。
でも、それって外国は違うらしくてさ。

試合で出会ったり、外部講師や選手でくる外国人にきいたんだけど
あつちは反対だって言うんだ。

日本のバレンタインみて驚いていたから
こんなかんじーって教えたら、欧米中南米もバレンタインの日は
あるけど、こんな感じだよ！って教えてもらったんだ。

あつちは、男が女にプレゼントするらしく、旦那さんとか

恋人が、普段の感謝を込めて贈り物をあげるんだって」
冷や汗をかきながら煤無が説明する。

「まあ！そうだったのね・・・ぜんぜん気が付かなくてごめんなさい。
今回このミツシヨンのことで頭がいっぱいで、バレンタインのチョコを

あなたに・・・っていうのはすっかり忘れていたわ・・・
それなのに、あなたの方からくださるなんて・・・」

感激で胸がいっぱいになる茉莉沙。

「いや・・・でき、でもプレゼントあげよう！って決めたのはいいけど
女子にあげるって、なにあげたらいいの？って

しかも洋服屋さんなんだから、自分でなんでも持つてるしな～っ
て。

すっげー悩んじゃって。そしたら、今いるメキシコ人アシストコー
チが

彼女の普段の姿を思い出してごらん？って。

それで、こんなかんじ～って言ったら、じゃあそれと似たものがい
いよって。

ピアスしてるの？って聞かれて、あ！赤紫系のなんかぶら下がって
るのみたことある！

って言ったら、じゃあ、それと似たようなものを
あげたらいいよって言われて。

で、店とかわかんないから、コーチの奥さんが知ってる店の場所を
メールで送ってもらって、それでお店の人に相談しながら
選んでもらったんだ・・・」

必死に説明する煤無の様子と気持ちを受け取りながら
茉莉沙は感涙にむせび涙が溢れて止まらなくなった。

「こ・・・こんな人、いない・・・よかった・・・」

本当にあなたに会えてよかった・・・」

「現地についたら、バタバタして渡せなくなっちゃうと
思ったから、今、渡した」

その言葉を聞くやいなや、茉莉沙は思わず煤無に抱き着いた。

その様子を、二人の弟たちはニヤニヤしながら座席の合間からながめていた。

「な！俺が教えたんだよー！ー！ー」

というか、外国のバレンタイン事情は兄貴も知ってるけどフライト中にあげたら？って勧めたんだ。」

木菟が鼻の穴を大きく膨らませながら得意満面

真己人に説明し始めた。

「ズッキーさすがだなあ〜」

これで、彼女いないっての、不思議すぎる……

まるで、カリスマ高校生じゃないか！

そこまで女子ごころわかる男子って

いないよ！

俺が女子だったら、速攻彼女立候補しちゃう！」

「いやいや。そういうことは気が付いても

びみよー！ー！ーな女心はわかんねえよ。」

そろそろ着陸態勢に入るため、機内アナウンスが流れはじめた。

現地では、すでに海藤と琴美が4人を待っていた。

対戦序盤

煤無、茉莉沙、木菟、真己人たちより

数時間早く現地入りしていた

海道と琴美が空港で4人の到着を待っていた。

「フライト時間がずれたみたいで

あと1時間はかかるらしいよ」

「そうなのね・・・」

空港ロビーで二人はコーヒーを飲みながら

時間をつぶしていた。

すると見覚えのある東洋人女性が

二人の前に立ちはだかった。

「あら、あなた、兄の同級生の

海藤さんじゃない？」

（うわ・・・やな奴が現れよった。）

一瞬顔をこわばらせて、海道は琴美の顔を見る。

「あー、牧田君の妹さんかなー？」

「どうもどうも」

仕方なく返答する海藤。

日本人離れた長い足を見せつけるように

牧田七香美は海藤の方に歩み寄った。

（この子挑戦的だわね）

琴美が反応する。

「先日の戦略パーティーにいらした威勢の良い

お嬢さんかしら？」

七香美が一瞬むっとして、琴美に応じる。

「まあ、主催者によくそんなことが

言えたものね。ただ飯くらったくせに」

「あら、いくらか払ったのよ。

なんだったら、ただにしていただければよかったのに。

金持ちのくせに、セコいわね」

琴美は容赦なく七香美に食ってかかる。

怖いもの知らずだ・・・と、少々ハラハラしながら海道がフォローにまわる。

「あ、牧田の妹さん。俺たち出張できてるから

お暇なお金持ちのお嬢さんのお相手はできないんだよ。

これから空港周りを調査しなくちやいけなくてね」

七香美にわからないように、海道が琴美の肘を軽くつく。

「あ、俊さん、データはこれに入れておいたわ。

上からチェックできるように、ソートかけておいた」

「お、さすがができる愛弟子は違うねー

ありがとう。じゃ、仕事にとりかかるか。

つてんで、お嬢さん、それではさよーなら」

体全身に不満をあらわにしながら、七香美は

二人の後姿を凝視していた。

(ふんっ、なによ。あたしのこのモデル並みのスタイルに

一瞥もくれないなんて。女を見る目がないんだわ。あの男)

七香美の魂胆は見抜いていたので、海道は

あえて七香美の方を見ようとはしなかった。

一方、七香美から離れて空港ラウンジに向かった二人は

影の方のソファに座って、煤無たちを待つことにした。

「なんなの・・・スタイルはいいかもしれないけど

根性悪いの丸出しね・・・兄も兄なら妹も妹だわ。

てか、あなたに色目を使おうとしていたのよ！

髪の毛むしってやりそうになったわ」

「おいおい、どうした琴美ちゃん。

あんな頭の悪い女、1ミリも興味ないよ。

ジエラる必要、まるでナツシング！」

「・・・・・・・・ジエラってなんかいいわよ・・・

頭にきただけよ・・・あなたに近づこうとするなんて・・・・・・・・」

「そういうのを、ジエラシーと言うのでは

「ないですか？ま、悪い気はしないけどね！きみがそんなに俺のことを思ってくれるなんて……想定外だな」

「……ミッシヨンの邪魔になるだけでしょ！」

「いやあ、利用できるかもしれないよ？」

「あの女の策略にうまうま乗るの!?!」

「ごらごら。乗るわけないでしょ。てかね

鈴木・霧雨チームを送り込めそうじゃないか」

「え？」

「俺なんかよりつつさんの方がイケメンだしさ。」

アスリートだから、牧田妹が興味を示すはずだ。

まりさつちはテレパスだから、落ち着いて対処できる。

「つつさんにひきつけておいて、知ってることを引き出せるかもしれない」

「………良い考えだわ。さすがね」

「気分、治まった？」

「私、とつてもやきもち焼きだったって、今の今

気が付いたわ」

「ぷはっ！いつも冷静なコトミンが、熱くい一面もあるって

わかって、俺、うれしいよ。焼くほど、俺のこと

思ってくれちゃってんだ！ヤンデレるコトミンも悪くないわ」

「わかってるなら、もつとリアクションしなさい！」

「あ………はい。了解いたしました。」

こうやって、へらへらできるのも今のうちだもんね。

そろそろみんな到着する頃だな。

部屋割りは男子4人と女子2人だから

初日ぐらいはお酒のんでバカ騒ぎしたいんだけどなー」

「それは残念だわね。初日から打ち合わせよ。」

最初は男子の部屋で打ち合わせて、あとは各々の部屋に戻って

ゆっくり休む。失敗は許されないわ」

「ふう……手厳しいなあ。でも、まあ
終わったらみんなで打ち上げするっていう楽しみを掲げて
ひとつがんばりますか」

茉莉沙達が到着する便のアナウンスが
館内に響いた。

撃沈

海道と琴美がラウンジにいると

後ろの席に座っている女性二人の話声が聞こえた。

「もうさ、いきなりだったから

雷に打たれた気分だった」

「なに、どうしたの？」

「超絶振られたわ・・・」

「あ、バレンタイン？」

「うん・・・諸々の事情があつて

直接はわたせなかったの。」

直接渡せないことも想定に入れて

シンプルなものを用意して、それを

ある人に依頼したの」

「その人がなにかまづかったの？」

「ううん。その人はとってもいい人なの。」

だから、預かって渡してくれるって言ったんだけど・・・」

「ちゃんと渡らなかつたの？」

「それが・・・想定外に渡っちゃつてたの」

「想定外？」

「うん。頼んだ人に渡したときは

今週は休みだから、来週になると思うけどいい？」

きいてくれて

私もその日しかチャンスがなかったから

それでもいいからってお願いしたの。」

その人の分もちゃんと渡して。」

「なるほど」

「そしたら、私ももらっちゃつていいの？」

「つていうので、食べてゝつて渡して

預かってもらったの。たぶん、義理つて思っただらうし。」

そしたら・・・なんと今日渡つてたのよ」

「なんでわかったの？」

「本人に会っちゃったから」

「え？どこで？」

「前の職場あたり」

「え!!なんでそこにいる？」

「私も一瞬そう思っ、頭が真っ白に

なっただけ、一応手を振って挨拶したの。

そしたら、あっちも一瞬驚いて

あ！って顔して。

でも、どうせまだブツは渡ってないだろうと思っ

そのままそこを離れようとしたの

そしたら……」

「そしたら？」

「あっちから近寄ってきて

そういうことしないでくれって」

「は？」

「ああ、ブツが渡ったんだなって思っ

あ、わかりましたって答えた」

「なにそれ……」

「で、ぼーぜんとしちやっ、なにをするのかも

忘れちゃっ……買い物もあつたのに

なにを買うかもわすれて、放心状態のまま

買いにいったら、なんと700円のものを買うはずが

4500円のかちやっ……パッケージは似てただけど

普通なら気づくの」

「そりゃあ動揺するよね……青天の霹靂も

いいところだね……」

「そう。いままであげてたのも、迷惑だったんだなって

思って。」

「はあ？ だったたら、もつと前に言えよ！ だよ。そこまで
気を持たせておいて、そこで落とすってどういうことよ!!」

「まあ、それがあの人だからね・・・」

「迷惑だつて言えなかつたのかもしれないね」

「いやあ・・・脈ないなら、とつとと言ってくれつての。」

「それは残酷すぎるよ」

「まあ、私もすぐに気づいて、場所を教えて

あげればよかつたんだけど・・・きつと不慣れだろうから
でも、そんな余裕がなくて。」

「そしたら、もう一度出口のところで会ったから

『迷惑だつたんだね。ごめんね』つて言ったら

黙つてた。相当嫌われてたんだ。あたし、おめでたいわつて思つ
て」

「いやー、断るにしてももうちよつといい方あるでしょ。」

『チヨコレートありがとう。せつかくいたただいたけど

ごめん。僕（俺）は応えてあげられないんだ』

とか、言わない？ やさしい男なら???

あとは好きな人がいるからとかさ。

なんか卑怯だよね!」

「まあ、表現が下手なんですよ・・・シャイっていうか。

だから、今まで迷惑だつていいたかつたけど

言えなかつたのかもね。私が勝手に、もしかして・・・つて

期待しちゃつてたのかもしれない。凶々しいのは私なのかも」

「いやー・・・大人のすることじゃないわ」

「いいの・・・そういう人なんだから。」

そういう人つてわかつて、好きになつたんだから
仕方ないわ。

でも、こうやってきてくれる友達がいるだけで

私は幸せね」

話を聞いていた琴美が心を動かされて、思わずタイムスリップしに行ってしまうような勢いで、海道に目配せする。ふたりはちよつと離れたところに移動した。

「コトミンのいいたいことはわかるよ。」

タイムスリップして、まりさつちを連れて

その男の心を読みに行くってんでしょ」

琴美はミツシヨンが終わるまで、タイムトラベラーであるということは

伏せておくつもりだったが、ふとあることで

海道にそのことがバレてしまっていた。

その時から、海道は琴美への想いを一層強くしていた。

「ええ・・・そんなことしている場合じゃないんだけど・・・どうにも納得いなくて。」

「そうだよな・・・あきらめるにもあきらめられないような

真綿でしめるような残酷さだよな」

「だって、あの彼女、なんだか他人とは思えないわ。

きつとはつきり理由が知りたいはずよ。

単に気遣い無用って言いたかったのか、

本当に全身全霊を拒否っているのか。

どうとも取れる解釈ってスッキリしないわ。

モヤモヤしたままって絶対よくないから！」

「まあまあ、落ち着いて・・・もうすっさんたちの便

ついでるはずだよ。ラウンジにいるってメッセージ入れといた」

「あーみんなよー」

煤無、茉莉沙、真己人、木菟が

ラウンジの方に向かってやってきた。

復活

「おーいー!」

煤無、茉莉沙、木菟、真己人の3人が

海道と琴美に手を振りながら近づいてくる。

「来たか!待ちくたびれたぞく。」

あんまり遅いんで、うちのハニーが旅行しちやいそうだったんだぜ
?」

海道が悪戯っぽく笑う。

真己人がそれを受けて尋ねる。

「え???旅行って、もしかして
???」

時間旅行の方?」

海道が笑いながら答える。

「そうなのよ。うちのハニーちゃんったらさ

意外に熱い女でさ。他人の会話をきいちゃって

うぬうー!!!あたしが!!!

って、時間遡りに行こうとしたんだよね」

「えええええ?何が起こったの?」

煤無も驚いて身を乗り出す。

「いや・・・ちよつと、自分と重ねちゃった

だけよ・・・」

クールダウンした琴美がバツ悪そうに説明しはじめる。

茉莉沙と真己人は琴美の心を見に行っていたので

だいたいの見当はついていた。

ちなみに、茉莉沙の方は深層心理まで読み取れる能力がある。

「かくかくしかじかで」

琴美が説明をしたが、煤無と木菟はいまひとつ

納得いかないようだ。

「つまり・・・以前、琴美さんも

シユン君に同じようなことを言われたことがあったのよね?

でも、よくよく確認してみると、シユン君お得意の

舌足らずで。全否定したわけじゃなくて、部分否定だった……
「そうでしょ？」

茉莉沙が補足する。

「え……まあ、そんな感じ」

歯切れ悪く琴美が答える。

「まあさー、かいどつちは確かに独特な感性もってるし

ストイックだから、人に厳しい。思いやりはあるんだけど……

だから、人から誤解されやすいってのはあるよね。

でも、ロビーにいた人が同じとは限らないんじゃない？

むしろ、海道つちは特殊なんだから、違うパターンだつてことの方が

確率高くないかな……

だいたいそういう場合、脈なし、つて思っちゃうよね。

脈ありだったら、そんなこと言わないでしょ？」

煤無は腕を組みながら海道を見る。

海道は、え？オレ？つて表情をし、茉莉沙に視線を向け

助けを求める。

「そうねえ……真偽のほどはわからないけど

そうひとことだけ言われたら、時期が時期だけに

拒否られてるつて思っちゃうわよね。女性なら」

茉莉沙が海藤と琴美を交互に見ながら応えた。

「僕とねーちゃんがそばにいたらね……

それ言った人の心理は読めたかも……というか、

ねーちゃんかな？深層心理がわかるから」

真己人が茉莉沙に続いた。

「まりさっちは深層心理が読めるのか……

それなら、牧田に近づいて深層心理を読み取るような

段取りにしていけばいいのかな」

急に海藤が本論に戻ったため、場の空気が変わる。

「そうだわ。さっきシユンと話していたら

牧田の妹が現れたのよ。それでね、シユンに色目使うから

心底腹がたったんだけど、冷静に考えたら、利用できるんじゃない？って

茉莉沙&煤無ペアに、初動ミッションを頼めばいいのでは？という結論に至ったのよ」

琴美が真剣な表情で、語り始めた。

「本論に戻りましたねー。七香美ににーちゃんを近づけて茉莉沙ねーちゃんが心理読みながら、牧田兄に接触していこうっていう

プランね。それで、危険だから、シユンにいとにーちゃんがボディガード

よろしく近くで待機……そんなかんじかな？」
木菟がまとめる。

「そうだな。細かい話は、宿でしようじゃないか。流れはつかめたな」

海道が手のひらをまつすぐに差し出すと、他の5人も手をあわせ、決意表明を確かめ合った。

絶体絶命

「ごめん、コンタクトがずれちゃったから化粧室
行ってくるわ。みんなここで待っててね」

琴美は数日前に入れ始めたばかりのコンタクトが不慣れで
違和感を感じていた。

「あーもー、入れるのに10分もかかって

毎回外すのも30分以上かかるんだもんな・・・

やっぱ合わないのかなー？眼鏡に戻した方がいいのかな・・・」

琴美はブツブツ言いながら、化粧室の鏡に顔を近づけて

コンタクトの位置を確認すると、バッグから目薬を取り出した。
顔を上にあげ、コンタクト上からさすことのできる目薬を

一滴眼球に落とした瞬間、ラウンジの方からものすごい爆音がし
た。

琴美は驚き目薬のキャップをあけたまま

すぐさま外に出た。

すると目の前には信じられない光景が広がっていた。

「え・・・・・・・・どういうこと・・・・・・・・

シユン・・・・・・・・？茉莉沙さん???

ねえ・・・・・・・・

いやあー！ー！ー！ー！！！！」

空港ラウンジは多くの人が倒れていた。

血まみれになって横たわっている男女の中に

煤無、茉莉沙、海道、木菟、真己人もいた。

ラウンジにいた数十人がどうやらピストルで撃たれたらしい。
すぐに空港警察が出動し、犯人も射殺された模様だ。

テロ・・・

その二文字が琴美の頭をよぎった。

まさか牧田と関係あるのだろうか。それとも

まったく無関係の者による仕業なのか。
ほとんど思考が停止した状態で

懸命になにか考えようとするが、あまりの悲惨な光景に
琴美は我を忘れて、海道の胸を押しして一心不乱に人工呼吸を
施していた。

するとまもなく救急隊員が近づいてきた。
脈も心音もせず、瞳孔も開いていたため、即死と判定、
不搬送とされた。煤無他、他の4人も同様。

琴美は絶叫しながら気を失った。

目を覚ますと、琴美は病院のベッドに横たわっていた。

「ここは……病院？なぜ私だけ？」

体を起こそうとするが、頭が割れそうに痛い。

すぐには起き上がれないようだ。

隣から話声が聞こえた。

「私……友達とラウンジにいたの。」

失恋旅行に行きたいから付き合ってくれって言われて。

私もパスポートの期限が残ってたし、ちょうど

休暇中だったから、付き合っただけのことにしたの

喉が渴いたから、飲みものを取りにいったら……

とんでもないことになってた……

大勢の人が打たれたみたいで、倒れてた。

友達もその中に……」

すすり泣く声は聞き覚えがある。

重い頭を無理やりおこして、カーテンの向こうを見る。

すると、琴美と海藤の後ろで会話していた二人の女性のうちの
一人がベッドに横たわっていた。

「あ、あの・・・私もラウンジにいたんです。

もしかして後ろに座っていた方じゃないかと思つて・・・」

琴美は隣のベッドに横たわっていた女性に話しかけた。

「あー私の前に座つてた方ね。男の方と

一緒にいましたよね？覚えています。」

(・・・夢じゃなかったんだわ)

琴美は心臓が張り裂けそうだった。

「友達を待つていたんですが・・・

会えてすぐに、私がお手洗いから戻ると、とんでもないことに・・・」

やっとの思いで声を絞りながら、ラウンジにいた女性に

話しかけた。

「そうだったんですか・・・私もあの時

席から離れていたんです。そしたら・・・」

どうやら、銃撃事件があつた時、この女性と

琴美はラウンジから離れたところにいたため

助かつたようだ。

詳しい状況はまだわからないが

とにかく、自分が置かれている事態は飲み込めてきた。

すぐにでもタイムスリップして事実を塗り替えたいところだが

どの時間に戻って何をすればみんなを助けることができるのだろ

うか・・・

ハンマーで殴られたような重苦しい痛みをこらえながら

琴美は懸命に思考しようとしていた。

果たして琴美はこのクライシスを救うことができるのか。

無数に存在すると言われている

パラレルワールド。

どの時空を選べば全員生還させられるのか

今、琴美の手腕が問われる。

仮想現実

「ねえ、今みているこの町って

10年後はどうなっているんだろう？」

「そうだな・・・きつと全く違った街並みが

広がっているのかもしれない

ベクトルは平行のままだけど

その距離はきつと近づいているのかもしれない

ひよんなことからそのベクトルが

交わる日がくると

信じて生きてきた」

「今、見ている景色って本当に存在するものなのか

もしかしたら仮想現実なのか

自分がみたいと思っっている世界の中で

生きているのか

パラレルワールドは幾重にも存在するらしい。

だから私は今、模索している。

どの層に移動したらよいのか・・・

あなたに会うことは簡単だけど

そこにずっと存在することはできない

自分の時代に戻り

そこで暮らしていかなければならない」

「僕は目の前から君がいなくなっても

きつとまたいつか会えるって信じてるよ」

「そうね・・・信じる者は救われるって

言うものね・・・

どんなに失望しても

幸せが訪れることを信じて疑わなければ

強く生きていけるの」

処方薬が強かったせいか

琴美はいつもより長い時間眠りに落ちたままだった。

極度の興奮状態で気を失い

病院に運ばれた琴美は、安定剤を打たれ

寝たり起きたりを繰り返していた。

シヨックのため食事は一切喉を通らず

点滴だけで栄養を取っていた。

なんとかしなければいけない

いつの時代に戻って

なにをどうしたらよいのか

それを考えると激しい頭痛とめまいが襲ってきて

発作を起こしてしまう。

このままでは皆を助けることができない。

失敗は許されない。

大きな重圧に耐えきれず、琴美は

眠りの中で、海道に問いかけていた。

「照橋さん、もしかして

このまま世界は変わらないかもしれない。

でもね、思いはずっと変わらないから。

僕が君を思いつづけることは

どの時代に行っても同じだから・・・

二度と会えなくなっても。

忘れないでくれ」

「海藤さん、教えて。

どうしたら皆を助けられるの？

私はあなたと寄り添えなかったとしても

皆を助きたい・・・

せっかく出会えた大切な仲間・・・

あなたと別の人生を歩むことに

なったとしても、皆を救いたいのに」

「フライト時間をずらせばいいんだよ」

「フライト時間？だって

すでに決まって……………」

はっ！そうか……………わかった。

そこに戻って、フライトをチェンジするように

そう仕向ければよいのね」

「ああ。君ならできるよ

がんばって。」

「海藤さん、ありがとう！」

海道の姿は笑顔のままフェイドアウトしていった。

無事にフライト時刻を変更できることを

祈るばかりだ。

本末転倒

琴美は渡米する前の時間に焦点を合わせ時間を遡ってきた。

「茉莉沙さんに連絡を取らなくちゃ……
今なら職場に電話しても大丈夫よね？
ツツツツツツ……」

あ、茉莉沙さん？私、琴美。実はね……」

琴美は詳細は伏せ、とにかく旅程を変更するように茉莉沙に頼み込んだ。

琴美の声色から、茉莉沙は一つのつぴきならない事情であることを察知し、了承した。

茉莉沙はすぐに弟の真己人に連絡をとり

木菟にも伝えるように告げた。

木菟は家に戻り、兄に状況を説明し、

なんとか旅程変更が可能であることを確認し

真己人に連絡を取った。

なぜこんなまどろっこしい段取りを踏まなければいけないのか？

茉莉沙が煤無に連絡をすればよいではないかと思ふところだが

二人が会っていたり、連絡をとる様子は

クレアボヤンスである牧田に察知されることを

恐れているのだ。

日程は最初の予定より1日遅らせて

4人が同便でホノルルに発つことになった。

琴美と海藤は予定通りの日程でホノルル入りし待機するという流れだ。

海道と琴美は出張で訪れたため

別部屋を押さえていた。後に到着した4人も

二部屋を押さえていたが、到着後

煤無、海道が同部屋、木菟と真己人が同室

そして女子が一つの部屋をシェアすることになっていた。
詳しい事情は話せないが、茉莉沙達が1日遅れるということは
海道に告げてある。

琴美は一旦安堵して胸をなでおろした。

「これで、みんな遅れて到着するから心配ないわ・・・

しかも銃撃事件の後で警備は手厚いから

大丈夫ね。

・・・・・・は！」

その時、琴美はラウンジで会話していた

二人の女性のことを思い出した。

「あの彼女達は・・・二人はあそこに来るはずだから

銃撃戦に巻き込まれてしまう・・・」

琴美は海藤の部屋をノックすると

外出することを告げた。

「おい、コトミン、急にどうしたの？海外で

女性が独り歩きなんて危ないぞ？」

「大丈夫。空港に行くだけだから。

すぐ戻るわ」

「俺もいくよ」

「いえ、いいの。私ひとりで行くわ。

あなたはここで待ってて。PCにデータがくるかも
しれないから」

「わ、わかった・・・気を付けて、な」

「ええ。大丈夫」

琴美はホテルからタクシーで空港に向かった。

空港に到着するや否や、琴美はラウンジに向かった。

「ちょうど今頃の時間だったわよね・・・

ラウンジにあの二人がいるはずだわ」

琴美はあたりを見回した。

すると、日本語で会話する声がしたので
そちらに歩み寄って行った。

「結局、相手が迷惑になるのが嫌なのよ。

あきらめろって言われたって、急に嫌いになれるわけじゃないし……

「こちらから追い回すことはしないで、アクションも起こさないけど
思い続けちゃうことはごめんね。って感じかな……」

「あんだ、それでいいの？」

「仕方ないでしょ。相手が嫌がることはしたくない。

だから、今までの思い出を大事に生きていく、それだけ。

嫌な相手に思われてて、不快かもしれないけど

サイセン！」

「ま、それぐらい元気なら心配ないね……

とりあえずここで、数日まったりして、あとは

ヨーロッパにでも行く？」

「んー。ボリビアの塩でできたホテルに泊まりたい。

塩湖にある」

「はあ？南米なんてそんな危険なとこやだよ！」

「ダイジョブダイジョブ。ツテはあるから！」

「あー……付き合うんじゃないか……」

(声がそうだわ……顔……)

あー！そうだ。あの二人だわ。いきなり話しかけたら

怪しまれるわよね……

確か……その男性の名前ってススムって名前だったわ
煤無さんと同じね、って思ってたんだもの

会話していた二人の女性に

琴美は近づいていった。

「あ……お話し中のところすいません。

すぐに空港入口に行ってください。ススムさんが

呼んでいます」

「……?」

二人は一瞬怪訝な顔で琴美をみた。

(なんとか取り繕わないと・・・)

「あの、うちの主人がススムさんの

職場の後輩なんです。今、主人もススムさんのところにおいて
それで、呼んでくるようになって」

女性二人は顔を見合わせた。

「そう・・・なんですね。」

日本語で話しかけられたのでびっくりしましたけど
知り合いなんです。わかりました」

「急いでください、早く！」

理由はわからないが、声をかけてきた人が

逼迫している様子だったので、会話していた二人の女性は
それに従い、急いでその場を立ち去った。

(ほっ・・・よかった・・・これであの二人も助かったわ)

と、その時

ダーン！ダダダダダダ

耳をつんざくような激しい破裂音が

ラウンジに響き渡る。

琴美は震撼し、咄嗟に座席の下に隠れた。

OH NO!!! キャー!!!

あちこちから悲鳴が聞こえる。

琴美は隙を見て入口側に移動しようとしていた。

すると、銃声が止んだ。

琴美はゆっくり立ち上がって、入口に移動しようとした
その時――

パーン

琴美が来ていた白いTシャツが真っ赤に染まった。
胸に受けた銃弾が貫通し、琴美は徐々に意識が遠くなるのを感じた。

バタツ

琴美はその場に倒れこんだ。

ウーウーウーウー

けたたましいサイレンが空港に近づき
救急隊員が到着。

あたりに倒れこんでた人々は
隊員によつて、バイタルチェックされていた。

が
自らの身を呈して仲間5人とゆきずりの女性を救った琴美だった

彼女の運命は如何に・・・

DOA

―集中治療室―

「なぜこんなことに・・・」

酸素マスクをつけられている琴美をみながら

茉莉沙が涙ぐむ

「もしかして・・・」

海藤が頭を抱える

「かいどっち・・・何かあったのか？」

海道の肩をおさえながら煤無が尋ねる

「もしかして・・・琴美のやつ・・・」

未来でなにか見たのかもかもしれない・・・

ホテルを急に飛び出して行ったんだ。

俺がついていくついても、来なくていいって」

声を殺して嗚咽する海藤。

「なあ、まりき・・・意識がない人の心も

読めるの？」

煤無が茉莉沙に尋ねる

「洞窟の中でラジオを聴いているような感じ・・・」

グワングワンって音はするけど、はつきりとは聞こえないの。

映像も電波がとぎれとぎれのワンセグみたいな感じ・・・

見えたり、途切れたり・・・」

「なんでもいい！手がかりをくれ・・・」

なんとかしてこいつを助けたいんだ」

海藤が半狂乱になりながら、茉莉沙に助けを求めた。

「にいさん、僕とねーちゃんやってみるから

落ち着いて。ずっとなにも食べてないだろ。なにか

飲むとか食べてきて。じゃないと、にいさん倒れちゃうよ。

せつかく琴美さんの意識が戻っても、にいさんが倒れたら

意味ないでしょ。ズッキーと煤無にーさんと一緒に
カフェテリアに行つてきなよ」

真己人が優しく提案する。

木菟も海藤の肩を抱きながら、カフェテリアに行くように
促した。

「意識戻りそうだったら、速攻で呼んでくれ」

「うん。すぐ呼ぶよ。安心して」

真己人は煤無と木菟に目配せをして、海道を連れ出すように
合図した。

「ねーちゃん、すっかりして。混沌とした意識を読み取っていたら
なにか手がかりがわかるかも。」

おれが書き取るから、ねーちゃんは琴美さんの意識に集中して
み

て」
真己人は茉莉沙の隣に椅子を近づけ、メモをとる用意をした。

——琴美の意識の中——

懐かしい！あの人が笑ってる。

昔の話をしているのね。入った頃の話。

すごく苦労したのね・・・厳しい先輩に囲まれて。

私はすごい！って思った

だって、できなくてもあきらめないで

密かに努力していたってこと

仕事を持ち帰ってやってた・・・

必死に覚えようとしていた・・・

あんなひどい仕打ちを受けたら

普通のひとなら、ヘタレちやうのに・・・

負けない！って、気持ちで頑張ったのね・・・

ほんと、ただただ尊敬するわ・・・

今じゃその先輩たちをしのいで

実力トップレベルだものね。

だれもあの人に勝てないわ。

速さと正確さ。そして、誠実な対応。

今では先輩の方を助けていたりするんだものね。

先輩たちも

「入ったころはさー、どうなるんだろう？なんて

思ったけど、あんなに立派になってさあ〜」

なんて言ってる。

手抜きって言葉はあの人の辞書にはない。

そんなにがんばりすぎたら、張り詰めた糸が切れちゃうのに！

なんて、思ったりすることもあったわ・・・

でも、それができないのがあの人なのね・・・

あなたのおかげで、私も仕事を覚えることが

できた。あなたのやり方を真似たのだから・・・

ありがとう

ほんとうにありがとう

だから、あなたが好きだっていうものを

差し入れたかったの

いつだって無理しちゃうあなたに

たまには休んでね、って気持ちで・・・

私は時空の法則を侵してしまったの・・・

だから、この世から消されてしまうわ・・・

幸せになっただけ

これからもずっと・・・

「ねえちゃん!!!」

茉莉沙と一緒に琴美の意識に集中していた

真己人が思わず叫んだ

「映像が見えたわ。マッキーも?」

「ああ。俺らが血まみれで倒れている・・・」

「もしかして、琴美さん以外のみんなが

何か事件に巻き込まれたのね・・・

それで、琴美さんが過去に戻って

事実を変えようとした・・・」

「うん。きつとそうだよ。間違いない。

でも、どうすれば・・・

僕たちは時間を戻せない。どうやって

琴美ねえさんを助けたいの!

シユンにいさんの、サイコキネシスの能力を使って

損傷した内臓をなんとかできないの?」

「できるかもしれないけど、今のシユン君は

動揺しているから難しいかも・・・

おそらく、反対なら簡単なんだろうけど・・・」

「打撃を与えたりするってことでしょ」

「そう・・・」

「なんとか、冷静になってもらって

助けてもらえないかな・・・」

「わからないわ・・・医療知識がなければ

どこをどう動かしたらよいか、命令できないと思うの」

「あああああ!超能力なんてあったって

なんも役に立たないじゃないか!!!」

「琴美さんは能力を使って、私たちを助けたのよ・・・」

「だからこそ、琴美ねーさんを助けなくちゃだろ!!

どうしたらいいんだ・・・」

茉莉沙と真己人は、もどかしい思いを

どこにもぶつけられずに、ただただ琴美の混沌とした意識を
たどるのが精いっぱいだった。
— 続く —

結集

煤無が病室に戻ってきた。

「どう・・・何か手がかりがつかめた？」

煤無は茉莉沙の肩に手を置きながら

寄り添うようにゆっくりと座った。

「それが・・・大変な光景が見えてしまったわ」

茉莉沙がため息をつきながら、煤無の方をうるんだ目でみつめた。

「言いつらいことなんだね？無理しなくていいよ」

「・・・琴美さん、私たちを助けようとして

時間を遡ったようだよ」

「え？」

「混濁した意識の中で時折、はつきり見える映像が

あったのよ。

空港で、琴美さんを除く私たち5人が倒れていたわ。

血まみれで・・・」

「なんだって！」

「想像だけど・・・」

なにかの事件に巻き込まれて、私たち5人が大変なことになるってしまっただと思っただわ。

おそらく・・・」

肝心な一言は言いよどむ茉莉沙。

それを察して煤無が言葉をつないだ。

「そうだったのか・・・このこと、今はまだ

海藤つちには言えないな・・・どうしたらいい？」

「救えるのは・・・シユン君かもしれないけど・・・

このことを言ったら、きつとシユン君は、動揺してしまうわ・・・

普通ではいられないと思う。」

「方法があるなら話してみてくれないか？」

「このままでは、琴美さんは助かったとしても脳死してしまうようだ

わ・・・

体の損傷がどんな具合かわからないけど
早急に損傷している部位を元に戻して
輸血しないと・・・」

その時、看護師が部屋に入ってきた。

「照橋さんと同じ血液型の人はいますか？」

看護師は日系人だったが英語で話しかけてきた。

茉莉沙は思考を読み取っていたので、意味を理解することができた。

「え・・・？あ・・・たしか、シユン君が同じだったと
思うわ。」

茉莉沙の言葉を片言の英語で煤無が看護師に伝えた。

普段から、外国人との接触が多いため、片言の英語やイタリア語は
話せる煤無だった。

(そういえばみんなBBQしてたときに

そんな話してたね？)

煤無が心で茉莉沙に話しかける。

茉莉沙は静かにうなづく。

「連れてきていただけませんか？

400ml輸血が必要なんです。男性なら助かります。
できるだけ多いほうが良いので・・・」

看護師の言葉に茉莉沙が煤無の方をみて応えた。

「400ml輸血が必要らしいわ」

「僕、呼んできます。」

煤無はジェスチャーを交えながら

看護師に意思を伝えた。

煤無は病室を出ると、カフェテリアに向かった。

木菟と一緒にいた海藤をみつけると

前に周って顔を覗き込み、話しかけた。

「かいどつち……確か、血液型

琴美さんと同じだったよな？」

「え？あ、ああ……」

疲れ切った顔で、煤無の質問に答えるのが精いっぱい海藤。

「輸血が必要らしい。すぐに検査室に行ってくれないか？」

煤無の言葉に、我に返る海藤。

「輸血……はっ！わかった。すぐ行く」

足元がふらついていたので、木菟が付き添って

海藤と検査室に向かった。

煤無が病室に戻ると入口の前に真己人が立っていた。

「シユンにいさん、どうだった？」

「うん……疲労困憊って顔してたけど

なんとか検査室に向かったよ」

「とりあえず、一命はとりとめたけど

予断を許さない状況だつて、今、ドクターが言ってた……」

「なにか……できることはないのか……」

俺たちにできることは……」

「とりあえずこの国の医師の力を信じましょう……」

銃弾の手術は日本のドクターより慣れているでしょうから」

目を真っ赤にしながら茉莉沙が海藤に答えた。

「本当にもどかしい……」

煤無は、病室の壁を殴った。

その時、部屋の外で男性の声が聞こえた。

聞き覚えのある声……

そう、その声の主は
なんと、あの牧田だった。

過去の記憶

集中治療室に入ったままの琴美。

朦朧とした琴美の意識を読み取ろうとしている茉莉沙。

ほとんど寝ずにリーディングしようとしていたため

かなり疲弊していた。

書き留めていた真己人もたまにコックリすることがあり

茉莉沙はボイスレコーディングに変え、ヒソヒソ声で

録音することにした。

混濁した意識には事件前後のものその他

昔の記憶もよみがえっているようだ。

どうやら琴美がまだ小学生の頃のようだ。

両親とみられる大人の男女と一緒に、子供の琴美は車に乗っている。

どこかに行こうとしているのだろうか。

その時、前方から外車がこちらに向かってくる。

運転手は居眠り運転のようだ。

琴美の乗っていた車を運転していた男性は、咄嗟にハンドルを切る。

琴美の隣に座っていた大人の女性は、琴美をかばうように体をかぶせた。

その瞬間、大きな衝撃が車の外から伝わる。

おそろおそろ目をあけると

目の前にはおぞましい光景が広がっていた。

運転していた男性は血だらけで意識を失っているようだ。

琴美をかばった女性も、微動だにしない。

少しして、救急車が到着した。

救急隊員が、何やら話をしている。

「大人二人は即死ですね。子供は

目を開けています。意識があるようです。」

そういうと、隊員は琴美に近づいてきた。

「おじようちゃん、わかる?」

琴美は茫然としながら、静かに頷いた。

「それじゃ、こちらの車に乗るからね」

と、救急車に運ぼうとしたその瞬間

(いやーーーー!!!)

琴美は意識を失った。

数秒だろうか数時間だろうか

どれぐらい経ったのかわからないが

目を開けると、琴美は車の中にいた。

(あれ……変な夢を見たのかな……)

「ねえ、パパ。トイレ行きたい」

小学生の琴美は運転していた男性に話しかけた。

「え?トイレ……。じゃ、次のサービスエリアで

止まろうか?」

「うん。おなかもすいたから、なにか食べたい」

すると、隣に座っていた女性が優しく話しかけた。

「あらあら。お昼食べたばかりなのに。」

お菓子が食べたいのね?こっちゃんは」

「うん、ママ。あのね、サービスエリアで売ってる

お菓子っておいしいんだって。この間、児童会で

6年の会長が言ってたよ。」

「おう……ことみは4年なのに、児童会に

加わっているのかい?」

父親と思われる男性が話しかけた。

「うん。代表委員に選ばれたの。」

この間、はじめて委員会があつたから、そのとき児童会長とお話したんだ」

「琴美ははつきり自分の意見を言うから

委員に選ばれたのかもな。いろいろ体験してみるのはいいいことだな」

「うん。パパ、サービスエリアで

お土産とかいろいろみていい？」

無意識か、意識してか、琴美は

時間を稼ごうとしていた。

「そうだな。いずれどこかでお土産は買おうと

思っていたから、次のサービスエリアでゆっくりしようか」
男性が言うと、母親と思われる女性も続けた。

「そうね。パパもずっと運転して疲れているだろうから少し休んだ方がいいわ。ごめんなさいね。私が

代わってあげられたらいいんだけど、高速道路は怖いわ」
「いいんだよ。ママ。僕は運転がすきだからね。」

ハンドル握っているほうが、ストレス解消になるよ。でも、サービスエリアでは休むから、心配しないで」

琴美は休憩を取ること時間がずれることを潜在的に認知し、少々安堵していた。

サービスエリアでは、お茶を飲みながらデザートを食べたり、お土産を買ったりしながら

30分程の時間を費やした。

それから、皆で車に戻り、高速道路に再び入った。

しばらく行くと、前方の車がハザードを点けている。
どうやら、渋滞しているようだ。

「連休だからかなー。混んじやってるのかな？」

父親が言うと

母がスマホで情報を見ていた。

「パパ、どうやら事故みたいよ。気を付けてね」

「そうか！徐行してるんだな。わかった」

そういうと、スピードを落とし、後方の車に知らせるために
ハザードを点けた。

しばらく進むと事故現場に近づいた。

「うわぁ・・・派手にやったなあ・・・」

事故車両の横をゆっくり通過した。

琴美は後部座席から、事故車両を見ると

見たことのある大きな車がめちやくちやになっていた。

(この車！・・・)

琴美は背筋がぞつとするのを覚えた。

意識を失う前に目の前に向かってきた

あの外車だったのだ。

琴美は無意識にタイムトリップをし、過去にさかのぼっていたの
だった。

事故渋滞を過ぎて、速度を上げていった。

数分走ったころだろうか。

車から変な音がする。なにか異物でも挟まっているのだろうか。
ガンガンガンガンガーン

音が大きくなったかと思うと、バランスを崩し

車は制御不能となり、スピンしていた。

どうやらタイヤがバーストしたらしい。

先程の事故現場に落ちていた、車両の破片を

琴美の乗っていた車が巻き込んでしまったのだ。

車は思い切り、ガードレールにぶつかり

回転して止まった。

琴美の隣に座っていた女性は、琴美をかばうように覆いかぶさっていた。

「こっちゃん、大丈夫？」

「うん・・・ママ・・・」

すると、後ろからもすごい勢いで車が突っ込んできた。

車は大破。運転していた男性と

後部座席に座っていた女性は死亡。

子供は奇跡的に助かった。

咄嗟に母親が娘をかばいながら

運転席の下に押し込み、自分の体で

守っていたのだった。

病院に運ばれた琴美は

数か月、言葉を発することができなかった。

精神的に問題があるとされ

治療を受けながら病院でしばらくリハビリをした後

担当医師の知り合いの家に預けられた。

数学教師をしていたある男性は

妻がいたが、子供がいなかったため

琴美は、この家に養女として引き取られた。

「こんなことがあったのね……」

涙でぐしゃぐしゃになった目をぬぐうと

茉莉沙は、録音の画面を一旦閉じた。

【キャラクターイメージ】

茉莉沙・・・七つの大罪のエリザベスが大人になった感じ

真己人・・・エバシンジ

煤無・・・ハイキューの日向が高身長になった感じ

木菟・・・ヒロアカのいずく君

海藤・・・斉木楠雄

琴美・・・進撃のミカサ

牧田・・・知恵のついたジャイアン

牧田妹・・・プリキュアトワイライト

糸口

憔悴しきった海藤。

「何一つ・・・何一つ伝えていないのに
このまま伝えられないままなんて・・・
どうしたらいいんだ!!!」

海藤はカフエのテーブルを思い切りたたき、頭を打ち付けた。

「にいさん！たのむ！落ち着いてくれ！」

冷静になったらきつとなにか解決の糸口がみつかるかもしれない
だろ?」

木菟は海藤の肩をゆすりながら、落ち着かせようと言葉をかける。
「とりあえず、カモミールティーでも飲んで、落ち着いて。」

俺、ティーバック持つてるんだ。試合でいつも落ち着こうってとき
に

飲むために。お湯注ぐだけでいいから。それ、飲んで、ね?」

木菟が心から心配してくれている気持ちが痛いほどわかった海藤
は

取り乱した自分を戒めた。

そして、木菟の薦めに応じて、カモミールティーを飲んで
落ち着こうと努めた。

一方、病室近くでは、茉莉沙が号泣していると、廊下の向こうで聞
き覚えのある声がした。

どうやら、男性が琴美の病室を尋ねているようだ。

その男性の姿をみた煤無は、一瞬かたずを飲んで、立ちすくんだ。
泣いている茉莉沙の肩を優しく抱きながら、

廊下に立っていた男の存在をそっと教えた。

そう、廊下にいたのは、あの牧田だった。

(！なんで彼がここにいるの！)

茉莉沙は思わず立ち上がった。

煤無が心で話しかけた。

(茉莉沙、落ち着いて。今こそ冷静にならなくちゃ。

やつの心を読み取るんだ)

茉莉沙は、大きく深呼吸しながら、牧田の意識を読み取ろうとした。以前、読み取ったことのある思考は、すぐに飛び込んでくるのだが、牧田のように自己コントロール力が高い男は、リーディングが難しい。

茉莉沙は目を閉じて意識を牧田の方に集中した。

(あの女の病室を突き止めて、どういう状況か

確認する必要がある。場合によっては、取り込む必要のある人間だ)

牧田の思考を読み取った瞬間、茉莉沙の顔色が変わった。

(どうした！茉莉沙？)

煤無の呼びかけに、茉莉沙は無言で、煤無の手を握った。

動揺している茉莉沙を落ち着けようと、煤無は茉莉沙の背中をゆつくりとさすった。

(こいつらになんらかの能力があることはわかっている。

特に照橋という女は生かしておかなければならない。

私の力を使えば、再生させることも可能なのだ。)

牧田の思考がはつきりと流れてきた。

琴美が助かるかもしれない。ただし、この牧田の力が

必要であることは明白だった。

つまりこういうことだ。

牧田の叔父は医師であり、本人も医学部出身だ。

今は実業家をしているが、医学の知識も当然あるため

この男の透視能力で損傷部位を確認し、どのように臓器を再生させたらよいかということ。

牧田の指示通り、海道の念力を使って琴美を再生させることが可能なのだ。

そのことを瞬時に悟った琴美は困惑しながら、牧田がみえないところまで

煤無の腕をひっぱって移動した。

「煤無さん……実は……」

事情が分かった煤無は、海道を説得するより手だてがないと

茉莉沙に告げた。

茉莉沙も同意見だったが、あの海藤が牧田に協力するのだろうか。

また、牧田の真の狙いはなんなのか。

牧田が提示する条件を、海道やほかのメンバーが納得し、同意するのか……

すべては、海道達の意思にかかっていた。

琴美の命とひきかえに提示される条件とは？

— 続く —

究極の選択

ICU（集中治療室）にいる琴美。

様子を確認してから、茉莉沙と煤無は廊下にする。

向こうからゆつくりとガタイの大きい男が近づいてきた。

「大変だったな」

神妙な面持ちで言葉を発したその男は牧田だった。

「どうしてここがわかったんですか？」

煤無は怪訝な顔で牧田に尋ねる。

「妹だよ。事件が起こった時、妹は空港にいたんだ。

照橋君が日本人と思われる女性二人と会話してた近くにいたらしい。

日本語が聞こえたから、振り返ったら見たことのある人で

パーティーで会った、俺の知り合いだとわかったそうさ」

「妹さん・・・ああ、弟の木菟の同級生ですね」

「そうだ。俺を出迎えにきていて、あの場面に遭遇し

妹もかなりパニックだったが、搬送されるのを見て、俺に

連絡をよこしたんだ。救急隊員が、ホノルル総合病院へ！

と言っていたのがきこえたらしく、それでここがわかったんだよ」

「そう・・・ですか（何しにきやがったんだ？）」

煤無が拳を握り締める。

「牧田さん、助けてください！どうか・・・」

その時、茉莉沙が目には涙を浮かべて訴えた。

「ああ、その相談で君たちに話があるんだ。

他のやつらもここにいるんだろ？」

牧田の言葉に、煤無と茉莉沙は顔を見合わせた。

「他の・・・ええ、海道俊君と弟の木菟も

きています。いま、カフェテリアにいますが」

煤無はしぶしぶ答えた。

「では、彼らをここに呼んできてくれないか？」

悪党とはいえ、紳士的に対応している以上

煤無も応じるしかなかった。トイレから戻ってきた

真己人に目配せすると、海道たちを呼ぶように指示した。

「わかりました。すぐに呼んできます」

真己人は、念で話をきいていたため、すぐに状況を理解した。

カフェテリアでは、ぐったりした海藤と

彼をいたわるように寄り添っていた木菟が座っていた。

煤無は近づいて行って、二人をゆっくりと見ながら話をはじめた。

「二人とも、落ち着いて話をきいてくれ。」

琴美さんを助けることができるかもしれない」

その言葉をきいた海藤は、急に立ちあがると

煤無の肩を揺さぶりながら叫んだ。

「なんだって！助かるのか！助かるならなんでもする!!」

海道をなだめるように、煤無は話をつづけた。

「いいか、かいどっち、落ち着くんだ。」

今、ある人が訪れて、もしかしたら、琴美さんを

助けられるかもしれないって言ってるんだ。

ただ、その人物は、俺たちにとって、喜ばしき客人ではない。

だから冷静に聞いてほしい」

血走った眼をゆっくりと閉じ、深呼吸をする海藤。

「わかった・・・すっさん。落ち着くよ。」

琴美のためだ。俺が落ち着かなければ、話にならない」

自分に言い聞かせるように、海道は話をきく準備が

ととのつたとばかり、煤無をまっすぐみた。

「かいどっち、木菟、まず、座れ」

煤無の言葉に、二人はゆっくりと椅子に腰を下ろした。

「尋ねてきた男は、医学部出身で、医療の知識がある。」

また、彼の叔父も医者だそうだ。
そして、そいつはある力がある。その力で、琴美さんの
内臓損傷部位を把握することができる。

そいつの指示通りに、かいどつちが力を使えば
琴美さんの損傷部位を回復させられる可能性があるんだ」

「……………」
すつさん……………そいつって……………」

「そうだ。お前が想像している男だ」

「……………不本意だが、琴美が助かるなら
やつに協力するのもやぶさかじゃねえ」

「ただし、交換条件があるらしい。それに応じれば
すぐにでも琴美さん救済プランを実行する気だそうだ」
海道の顔色が変わる。

「なんだよ、その条件ってのは……………」
歯ぎしりをする海藤。

「だいたい検討はついているが、詳しいことはわからない。
今、ICU前にいるから、話、できるか？」

「……………愛する人の命がかかってんだ。
なんだってしてやるよ。魂を悪魔に売り飛ばしても
琴美を助けない」

「無理はしてほしくないが、かいどつちの決断次第なんだ。
コーヒー飲んで落ち着いてから、行こうか」

煤無と木菟は両脇から支えるように海藤を

サポートし、牧田のところに連れて行った。

ICU前には、メイクが落ちて瞼が晴れ上がった茉莉沙と彼女をいたわるように背中をさすっていた弟の真己人
そして

眼力鋭いガタイの良い男、牧田が3人を待っていた。

「海藤、顔面蒼白だぞ。そんなんでどうするんだ？
婚約者を助けられないぞ」

悪党なのか正義の味方なのか

こいつの真意はどこにあるのか。

しかしながらさすがの思いで、海道は牧田に土下座して懇願した。

「頼む・・・琴美を救ってやってくれ。

そのためならなんでもする。お前の条件とやらを
提示してくれ」

「おい、俺はそういうしみつたれてるのが

嫌いなんだよ。どうせなら喧嘩売ってほしかったな
いいから、立て。土下座は必要ねえ」

木菟と煤無が海藤を起こし、待合椅子に座らせる。

海道の隣に静かに座り、牧田が話し始める。

「もう、察していると思うが、俺はお前たちの能力を
把握している。そして、俺にも力があることを、お前たちも
知っているだろう。」

鈴木君からきいたと思うが、俺が透視をして、損傷部位を把握する。
それをお前に逐次伝えるから、お前はおれの指示通りに念じるん
だ。

臓器のイメージは茉莉沙君と真己人君がキャッチして、その場でスケッチする。おまえはそれを見ながらイメージ化して、力を調節すればいい。

「そうすれば、照橋君の臓器は元に戻る」

「……………成功するんだな」

「お前が冷静になれば、大丈夫だ」

「わかった……………それで条件とは？」

（茉莉沙さん……………そいつの条件に従っちゃだめ！）

お願い……………私は死んでもいいの。シユン君に伝えて。

こいつは私を奪って、あなたたちを従わせようとしているわ

みんなの力を、自分の思い通りに使おうとしているのよ！

悪魔に魂を売り飛ばすぐらいなら、死んだ方がいい！

シユン君のそばにいられないなら、このまま命を絶った方がいい！

こんなやつに添い遂げるぐらいなら、目が覚めても、舌かんで死んでやる！）

茉莉沙は、海道の手首をつかむと、茉莉沙の意思を即座に伝えた。

海藤は号泣しながら、廊下の壁をたたき

頭を打ち付けた。

「どうしたらいいんだ……………俺は琴美を助けない……………」

たとえ、こいつのものになってしまっても、生きていたら

いつか会えるんだから、命を救いたいんだ……………」

でも、それを琴美が望んでいない……………」

茉莉沙たち……………俺は、おれはどうしたらいい？」

究極の選択に迫られた海藤。

そして他のメンバーたちの想いは？

厳しい決断は如何に・・・

シーソージャッジ

(茉莉沙さん・・・私は今、話すことはできないけど意識はあるの。だから、あなたとマツキーにしか私の思考は届かない・・・)

だから、どうかシユンに伝えて。私は時の法則を侵してしまったの。

単にその時代に戻って、観察しているだけならいいのだけれど事実を塗り替えるような行動をしてはいけないの。

でも、空港での事件は受け止めることができなかった・・・時間の法則を破ってしまったペナルティは、私が消されるということなの。

だから、助けしないで・・・

私はそもそも生きていくべきではなかったのよ・・・あの時

子供の時の事故で生き残ってしまったことで、物事が狂い始めた・・・

だからね、今まで生きてこられただけで、感謝しているの。

シユンに出会えて、笑ったり喧嘩したり・・・

その思い出だけがあるだけで生きててよかったって思ってるの)

琴美の思考が流れてくるたび、茉莉沙の瞳から零れ落ちる涙のしずくは

止まることを知らずに、頬を伝って琴美の手の甲を濡らした。

茉莉沙は琴美の手をしっかりと握る。

(茉莉沙さん・・・泣いているのね。あなたの手はとても暖かいわ。こんな私と友達になつてくれてありがとう。

人間不信だった私は、心を開いて話せる友達などいなかったの。

シユンに出会って、はじめて心を許せる異性と巡り合ったと思ったわ。

そして、あなたに出会えて真の女友達ができたと思えて嬉しくて仕方なかったの。

あなた達とずっと友達でいたかった。生きていたかった。でも、罪は償わないと・・・

たとえ牧田が私の命を救ったとして、私が生き返ったとしてもそれは本意ではないわ。幸せとはほど遠く、むしろ地獄に落とされたようなもの。

人生は終わったも同然なの。

私の命はシユンに捧げたい。そして、茉莉沙さん、煤無さん
真己人君、木菟君にも感謝の気持ちを込めて
お願いね。シユンに伝えてね)

茉莉沙は握っていた手を静かに離すと

病室の外にいた海藤を探した。

牧田は担当医とオペについて話していた。

金はいくらでも積むから、最良の技術をもって

この女性を助けてほしいと。

海藤も牧田に協力するつもりで

牧田の近くで待機していた。

茉莉沙が海藤を呼ぶ。

近くにいた煤無も近づいてきた。

「シユン君・・・琴美さんは

延命を望んでいないわ」

「は？何言ってるの？」

せつかく助かるかもしれないのに

死にたいってどういうことだよ!!!」

茉莉沙に食ってかかった海藤をたしなめる煤無。

「かいどっち、落ち着けよ。茉莉沙に八つ当たりするな」

海藤は下唇を噛む。

茉莉沙は泣きながら、海道に琴美の意思を伝える。

琴美の言葉を茉莉沙越しに聞いた海藤は嗚咽しながら号泣した。
煤無も静かに涙を流していた。

「私はどうしたらよいかわからない・・・」

琴美さんの意思を無視してまで、助けてよいのか・・・」

海藤は廊下にある長椅子を思いつきり蹴り上げながら
叫んだ

「だからって・・・だからって、死んじまったら

なにもならねーだろ!!!生きていたら、生きてさえいてくれたら
何かが変わるかもしれないねーだろ!!!!

死んだら終わりなんだよ!会えねーんだよ!!!永遠に!!!

そう叫びながら、牧田の方に走っていった。

煤無は慌てて海藤の後を追う。

「牧田、頼む。琴美を助けてくれ。」

助けてくれるなら、なんでもする。お前の言うことを聞くよ」

海道の迫力に押されながら牧田も真剣な表情で

ドクターに交渉を始めた。

オペはすぐに行われることとなった。

海藤と牧田は病室の一番近い場所で待ちながら手術経過を
見守り必要に応じて力を使えるようにスタンバった。

果たして琴美の命は助かるのか

そして助かったところで不本意な状況を琴美は受け入れられるの

か
・
・
・

すれ違う日々

茉莉沙は瞳から溢れる雫を拭うことも忘れ

小さかった頃の自分と琴美を重ね合わせていた。

目の前にいる大人たちから流れてくる思考

耳をふさぎたくなるようなおぞましい言語の数々

意味はわからずとも、どす黒い濁流が

なだれ込んで来るような

そんな思いをずっと抱えて生きてきた

つらかった

ずっとずっとつらい日々を過ごすことを余儀なくされていた

弟の真己人と意思が通じるようになるまでは

ある日、弟の真己人も同じような能力をもち

同様に苦しんでいることがわかると

その日から世界が変わった

まだその時は、他にも同朋がいることは

想像だにしていなかったが

幼稚園で不思議な力をもつ少年がいたことを思うと

もしかしたら・・・

自分たち兄弟の他にも

類似した能力を持つものがあるのではないかと

漠然とではあったが希望の光がさすのを

感じた気がした

常に弟と苦しみを分かち合ってきた

学生時代

社会に出てもことさら汚れた意識の

流入には辟易していたが

煤無と出会って、これまでの意識が180度変わった

そして人生は決して悪いものではないと

嬉しい日々を迎えることができた

さらに喜ばしかったのは

同性の同胞、親友となりうる女性が現れたことだった
この人だけは大切にしたい

そう思った矢先、こんな事件に巻き込まれてしまった・・・

一喜一憂する茉莉沙

そんな茉莉沙を心から思い慕い

いたわる煤無

そんな煤無の心の声が届くたび

茉莉沙は

生まれ変わっても好き

この人と出会うために生まれてきたんだ

と

確信していた

一方、変わり者で周りから疎まれることもあった

幼馴染の海藤も、最初で最後の出会いに

心を解きほぐしていたのに

このヒトしか自分を理解してくれる人はいない

そんな女性に出会ったのに

目の前で瀕死の重傷を負っている

こんな状況の中で助かる手段があると言われれば

それを選択しない理由はない

それもよく理解できる

きっと自分が海藤でも同じことをしていたらだろうと

茉莉沙は思っていた

誤解しないでほしい

君がいなくなったら

君のことを忘れてしまうのではないか

又新しい人ができて好きになるのだろうなんて

そんなことは思わないでほしい

自分にとってすべて満足させてくれるのは

ここにいるこの人だけ

怒らせるのも笑わせるのも
天才的

ツーカーで以心伝心な

こんなパートナーは

一生に一度だ

他にとって代わる人はいない

海道の想いはゆるがない

きつと、いや必ず

琴美の命を救ってやる

その思いを受け止めながら

茉莉沙も煤無もいつしか

海藤にエールを送るのであった

全快

手術室前で牧田と海藤が意識を集中させている。少し後ろの方で、茉莉沙と煤無、そして真己人と木菟もかたずを飲んで動向を見守っていた。手術は大分長引いているようだ。皆の体力も消耗しはじめている。牧田は透視能力を使って、手術の様子をキャッチしその意識を読み取った真己人が図示し、茉莉沙が言葉と文章をつけフォローを入れるという連携プレーだ。木菟と煤無は食料や飲料、牧田に指示された道具などを買い出しに行ったりしていた。医師のオペと同時に進行で、ダメージを受けた臓器の部位を慎重に再生を試みる海藤。牧田の細かい指示を伝えるのは茉莉沙の役目だ。動機は違えど、目的は皆同じ。琴美の回復を目指している。

「先生、バイタルが正常に戻っています。」
「鉗子」

手術室では、琴美の異常な回復に
なんの疑問も持たず、一心不乱に医師がオペを
施していた。

「奇跡だ・・・すべてが正常に戻っている」

オペを行った担当医は、世界でも屈指の名医師ではあるのだが、あの状態からここまで復活するとは、なにか神がかっているようだ
と

患者の異常な回復力に驚きを隠せないでいた。

縫合を終え、医師は一旦手術室を出る。

「手術は成功」

ロビーで待っていた付添人達に、そう告げると奇跡的回復を遂げた患者の忍耐力をたたえた。

一同は泣いて喜んだ。牧田を除いては。

「泣くのは早いぞ。海藤。」

お前の愛する女は、俺のものになるんだぞ？」

「生きていれば、また会える。それだけで

俺は十分なんだ」

ほとんど睡眠をとらず付き添っていた一同は体力も消耗していたことから、病院隣にあるホテルに一旦戻った。

休息し、十分な栄養をとると、冷静な思考が海藤を襲ってきた。

(生きてさえいてくれれば……)

だがしかし、あの野郎の腕に抱かれるなんて……いくら命を助けてくれたとはいえ)

ダン！と机をたたく海藤。

隣で寝ていた煤無が飛び起きる。

「どした？かいどつちっ？」

海道の表情をみて、なんとなく思いを悟った

煤無は、海道の肩に手を置いた。

「なあ、まだなにも起きていない。

事態は変わるかもしれないから、そう焦るなよ。」

煤無のその言葉に、何を思い立ったのか

海藤は部屋を飛び出す。

「おい、かいどつちー!」

海藤は部屋を飛び出すと、ホテルの最上階にある

展望台へと向かった。

煤無も追いかける。

鬼の形相で、海道が展望台のガラスに手をつき
何かを念じている。

「おい・・・おまえ・・・もしかして」

「ああ、そうだ。すっさんが考えてることを

今、俺はしている」

「!!!」

煤無は真っ青になり、携帯で弟の木菟を呼び出す。

「かいどつち・・・なんてことを・・・」

「我慢できねえよ」

「にいさん!!!!」

駆け付けた木菟が、海道の腕をひっぱる。

「木菟、俺が、かいどつちをしつかり

つかんでおくから、念じてくれ」

「わかった。場所は?」

「ABCマートの下着売り場」

「了解!」

煤無と海藤は、ABCマートの下着売り場にいた。

汗だくになっている海道の腕をつかんだまま

煤無は、店員にブロークスの英語で

この男性にあうトランク스가欲しい、

日本人なので、腰幅は狭いから、サイズの寸法を教えてくださいと
事細かに注文をつけ、自分たちの存在を印象付けようとしていた。

二人が瞬間移動しなければならなかった理由とは・・・

―次回へ―

宝物（番外編）

茉莉沙のブティックでは

その年の日本代表の

レプリカユニフォームが期間限定で

発売されていた。

この店はサッカーリーグのスポンサーだったため
指定取扱店になっていた。

ある日

店の前を行ったり来たり覗いたりしている少年がいた。

茉莉沙はちょうど自分の弟と同じ年ぐらいの

その男子が気になり声をかけた。

「君、もしかしてサッカーやってるの？」

「あ……はい」

少年は一瞬驚きながらも、気づいてもらえたことがうれしかったよ
うだ。

「あの……レプリカって、いつまで売ってますか？」

店員に声をかけてもらったことで

話しかけやすくなったと、その少年は安堵した。

「今度の世界大会が終わるまで売っているわよ」

「そう……ですか……でも、売切れたら

終わりですよね？」

「そうね……取り寄せはないから

期間内に売切れたら終わり。万が一売れ残ったとしても

すぐにメーカーにもどさなければいけないの」

「そっか……取って置いたりとか

できないんですよね？」

「そうね……」

きつと欲しくてたまらないのだろう。

ただ、小遣いが足りないとか、なんらかの理由で

この少年はすぐにレプリカTシャツを購入することができないようだ。

「もしよかったら、特別取り置きしておいてもいいわよ。」

「え!!!いいんですか?」

「そのかわり、内緒ね。特別にとっておいてあげるわ。ここに連絡先を書いておいてくれる?」

「ありがとうございます!・お金できたらすぐに取りに来ます!」

少年は笑顔で店をあとにした。

本来は取り置きはできないのだが

茉莉沙が自腹で買ってとっておいたのだ。

万が一少年が取りにこれなくても弟に譲ればいい、そう思ったからだ。

Tシャツを見つめていた少年の目があまりにきれいだったため願いを叶えてあげたいと思った茉莉沙だった。

国際大会が終わりに近づいたある日、茉莉沙の友達から連絡が入る。

茉莉沙の店が協賛店であることを知った友人がレプリカTシャツを譲ってほしいと言ってきた。

友人のいとこが災害の被害に遭い、両親を失ってしまったのだそうだ。

そのいとこにレプリカTシャツをプレゼントして励ましてあげたいという申し出だった。

通常なら断る依頼も、理由が理由だけに断ることはできなかった。

取り置きを頼んだ少年からも連絡がないまま、一旦電話をかけてみたが通じなかった。

茉莉沙は友人に送るため、Tシャツの発送を業者に依頼しちようど品物を引き渡したその数分後

取り置きを頼んだ少年が息せき切って店を訪れ
ドアに手をかけようとしたその時

少年の腕をつかむ女性がいた。

「30分遅かったわね。君の欲しかった品物は
他に渡ってしまったわ」

「え……」

愕然とする少年。

「私の腕をつかんで。

30分前に戻ってあげる。

後悔しない人生を送りなさい。

自分にとってかけがえのない大切なものは
決して手放してはいけないよ」

一瞬、少年の目の前に光が差した。

振り向くと、先程の女性は消えていた。

はっと我に返り、店に入っていくと

店員が笑顔で、Tシャツを差し出した。

「間に合ってよかったね」

少年は手に入れたTシャツを

大事に持ち帰った。

この宝物は、決して手放さないと

少年は心に誓った。

☆☆☆☆

花見たけなわ、中央公園では老若男女が

桃色一面の絨毯の上で、宴会を開いていた。

トコトコと小さな子供が歩いている。

バランスを崩して転びそうになり、

手に持っていた風船が、子供の手から離れ舞い上がり木の枝にひっかかった。

近くにいた少女が木のとっぺんに登り、枝にくっついていた風船をとり、こどもに差し出した。

「ぼく、いくつ?」

手で3を示す子供。

「そっか。3歳か。手をだしてごらん。」

少女は子供の手から離れないように風船を巻き付けてあげた。

「気を付けていくんだよ」

男の子はこくりとうなづくと、

親のいる方に歩いて行った。

中学の入学式に向かおうとしていた少年がいた。

急いで渡ろうとしたため、横断歩道中央で

生徒手帳を落としてしまう。

気づいたときには、信号は赤に変わってしまい

信号待ちしていた車が発進しようとしていた。

すると、少年の目の前に光が差し

車が止まった。

背後から女性の声が出た。

「これ、君が落としたんでしょ?」

慌てると危ないよ。きをつけてね。」

そういうと、少年に手帳を渡した。

礼を言おうと顔を上げると、先程の女性の姿はなく

信号待ちの車も発進していた。

13歳の少年は、手帳を拾ってくれた女性の声に聞き覚えがあるような気がした。

入社式が終わり、一旦実家に帰ろうとしていた青年はコンビニに立ち寄り、コーヒーを飲もうと思った。

イトインコーナーで、シヨートメッセージの着信を見る。

「あんたももう23歳なんだね。入社式の写真ばあちゃんに送っておきなさい」

母からのメッセージを確認し、コンビニの駐車場に向かうと車のカギがないことに気がつく。

スーツのポケットを探してもない。

青年は焦って記憶をたどろうとしたとき

「これ、落とされましたよ」

背後から女性に声をかけられた。

女性は、青年が落としたカギを持っていた。

礼を言おうとすると、カギを渡した女性は

いなくなっていた。

「今の女性、どこかで会ったことがあるような・・・」

青年は気になったが、実家に戻るため

家路を急いだ。

「おーい、新しい助っ人が

入ったらしいぞ。もうすぐ来るって」

「新しい助っ人ね・・・」

33歳はさんざんな年だ、なんて言われているけど助っ人に期待したいね。」

新人が挨拶しに男の方に近づいていった。

「こちらの担当になりました。よろしく願います。」

男は女性の顔をみた瞬間

どこかで会ったことがある、1度ではなく

何度か・・・

どこで出会ったのか思い出せないが
間違いなく、この人とはこれまで数回会っている
でも、どこでだったのだろう・・・
思い出せずにいた。

戻ってみたい時間がある

どうしても戻りたい時間がある

戻ってもどうにもならない時間もある

時の流れには逆らえない

だから今を生きる

後悔しないように

デフラグ（番外編Ⅱ）

人間には一人一人のヒストリーがある。

◆煤無（すすむの場合）

Q 1．最も心に残ったことは？

―50m走で最速記録を出して、中学で表彰されたこと。

Q 2．今までで一番怒ったことは？

―気になる人が目の前で危機に会った時の犯人の動機。

Q 3．一番感激したことは？

―大会に出たとき、優勝したこと。

Q 4．夢ってなに？

―好きな人と幸せになること。

Q 5．時代はどうなると思う？

―人間って、いつも何かを解決しようとするから

悪いことがあれば、良い方向に行くように考えていくと思う。

形は変わるけど、つねによりよい生活を求めて進んでいくと思う。

◆海藤（かいどうの場合）

Q 1．最も心に残ったことは？

―空に未確認飛行物体がいて、大人数がみたのに、結局未確認だったこと。

Q 2．今までで一番怒ったことは？

―仕事をなめてるやつが、目の前にいたとき。

Q 3．一番感激したことは？

―自分が作ったプログラムが正しく作動したとき。

Q 4．夢ってなに？

―え？・・・言えない。事務所NGなんで。

Q 5．時代はどうなると思う？

―宇宙人にきいてみないとわからない。

◆木菟（ずくの場合）

Q 1. 最も心に残ったことは？
―フルコンプしたとき

Q 2. 今までで一番怒ったことは？

―勝手にリセットされてたとき

Q 3. 一番感激したことは？

―スイッチ買ってもらったとき

Q 4. 夢ってなに？

―大人買いして無制限にお菓子たべたい

Q 5. 時代はどうなると思う？

―ダークリユニオンがフリーメイソンと結託して、暗黒の闇に包まれる

◆真己人（まきとの場合）

Q 1. 最も心に残ったことは？

―太宰治の小説に出会った

Q 2. 今までで一番怒ったことは？

―ねーちゃんに変なことしようとしたやつがいた時

Q 3. 一番感激したことは？

―煤無にーちゃんが、危険を顧みずねーちゃんを助けてくれようとした時

Q 4. 夢ってなに？

―みんな幸せになること

Q 5. 時代はどうなると思う？

―機会化が進み、自動で行われることが増える

◇琴美（ことみの場合）

Q 1. 最も心に残ったことは？

―受験に合格した時、先生が喜んでくれた

Q 2. 今までで一番怒ったことは？

―自分だけ楽しようとして、ずるいことをしている人を見てしまった時

Q 3. 一番感激したことは？

―大きい子供が一生懸命、小さい子を助けようとしていた時

Q 4. 夢ってなに？

―好きな人のそばにずっといられること

Q 5. 時代はどうなると思う？

―IT化が進みながら、アナログも復活して共存する

◇茉莉沙（まりさの場合）

Q 1. 最も心に残ったことは？

―天皇陛下と皇后陛下にお目にかかったこと。最初は小学校の時。凱旋パレード中、

こどもだから、前にどうぞって言われて、最前列に並んでいたら、こちらをみて

微笑みながら手を振ってくださったこと。

2 回目は、弟が小さい時に災害地を訪問された際、またお子さんは前にどうぞ

っていわれて、弟といっしょに前に出たら、また皇后さまがこちらをみて

微笑みながら手を振ってくださったこと。あの笑顔は一生忘れない。

Q 2. 今までで一番怒ったことは？

―弱いものいじめをしている人を見た時

Q 3. 一番感激したことは？

―オリジナルで思った通りの料理が成功したとき

Q 4. 夢ってなに？

―愛する人がずっと幸せな気持ちでいられるように、手伝ってあげられたら嬉しい。

Q 5. 時代はどうなると思う？

―助け合って生きていけるよう、人々が頑張る

新世代

茉莉沙や煤無達が一時利用しているホテルの周辺はなにやらものものしい雰囲気だ

宿泊者達は不安を隠せず、落ち着かない様子だ。

警察や救急隊員が行き来をしているが

タンカーで運ばれてくる患者はいない。

茉莉沙、真己人

煤無、木菟、そして海藤が

警察から質問を受けている。

「あなた方は、●●時頃、どこにいましたか？」

「私と弟のマキトは、ホテル内のマーケットで買い物をしていました。領収書もあります。これです。」

店の防犯カメラには、茉莉沙と真己人が映っているとの連絡が

警察官の携帯に連絡が入る。

「僕はススムですが、弟のズクと、こちらの男性のシユンと3人でABCマートで買い物をしていました。下着を買いに行っていたんです。」

彼、シユンは自分のサイズがわからないから、僕らアスリートで詳しいので、手伝っていたんです。」

警官は店員への聞き込みを行うと、たしかに3人のアジア人男性が店を訪れ、サイズを詳しく訪ねて、採寸を行ったりしていたと。

こちらにも、防犯カメラに3人の姿が映っており、レシートに打刻された

時刻も、供述通りだった。

「すると、ホテルの室内で死体で見つかった男の

知り合いと思われる5人はすべてアリバイが立証された。

もう一人の知り合いは、入院中で意識がない。当然動けるわけがない。

となると、外部のものの仕業か・・・

もしくは、自殺か」

遺体の首には、バスローブの紐が巻き付けられ、部屋の衣服掛けにひっかかっていた。

また、男の部屋内のテーブルには飲みかけのバーボンがあった。

「遺体からはアルコール反応が検出された。

酒を飲んでの自殺の可能性もある」

調査を進めていた警察は、遺体の男が

手術中のアジア人女性に思いを寄せてたという事実を突き止めた。女性には恋人がいて、退院後には結婚するであろうということも確認した。

状況からみて、男が一方的に思いを募らせ

叶わない恋故、思いつめたのではないかという結論に達した。

現場からは、無くなった男のもの以外、指紋、足跡や体液も発見されなかったためである。

清掃後に入室したため、ルーム係も無関係である。

(ねえちゃん、盗聴器などはないと思うけど、念のため

思考で送るよ。

もしかして、牧田さんが亡くなったのって・・・)

真己人は茉莉沙に念を送った。

(ええ・・・おそらく・・・あの3人が関わっているのは間違いないわ・・・)

あの時、ホテルの部屋にいたはずの3人が、忽然と消えたんだもの・・・

ABCマートは歩いてても20分はかかるわ。タクシーを使った形跡もないし

店員と話始めたのは、牧田が亡くなった時刻の直後だから

警察は彼らを疑わなかったけれど、シユン君が念力で

何らかの力を加えた後、木菟君が命じて、煤無さんと3人でテレポーテーションしたのかもしれない・・・)

(そうだよね・・・物的証拠はなくても、シユンにいが

殺害したってことか・・・それって、刑法だとどうなるの？

でも、今、ここでそれについて

彼らに問うのは危険だよね。どこで誰に聞かれるかわからない。

琴美ねえさんの意識が戻って、みんなと一緒に帰国するまでは、

慎重に行動しなければ・・・)

(ええ、そうね。)

その時、茉莉沙の携帯に連絡が入る。

「え???意識が戻ったですって?」

茉莉沙と真己人は、急いでタクシーを拾って病院へと向かった。

若葉の実り（前半）

バルコニーに置かれたロッキングチェアに
ゆったりと横たわりながら、男女二人が話している。

「おまえ、どこに、どんだけ旅してたんだよ」

「そうねえ・・・あっちいたり、こっちいたり。」

でも、まさかあなたがあんな手に出るなんて思わなかったわ」

「俺も必死だったんだよ。」

「おかげで、茉莉沙は5kgも痩せたって言ってたわ」

「ああ、まりさっちには悪いことしたよ」

「煤無さんと幸せになれたから、今となっては

想い出話だけだね。来年は、私たちもおじさん、おばさんになるし
ね?」

「血縁じゃなくても、叔父、叔母なの?」

「あなたにとっては兄弟みたいなもんでしょ。煤無さんも茉莉沙
も。」

「まあ、そうだな。そっかー。姪っ子か甥っ子の顔が

みれるんだな。楽しみだな」

「出産祝いは何がいいか、選ぶのも楽しみね」

「俺、買ったことないんだよ。おまえに100%任せるから」

「あら、任されるのはいいけど、お財布係はあなただから

一緒にいくのよ?」

「まじか・・・」

「嫌なの?」

「や、そういうわけじゃないけど・・・」

「なにか、買おうと思ってたんでしょ?」

「え?・・・いや・・・その・・・」

「なんだか知らないけど、それは後回しにして。」

茉莉沙のお祝が先よ」

「・・・」

「なによ」

「いや……」

「隠し事は嫌よ！」

「隠してないけど……」

ピンポン、インターフォンが鳴る。

「あ、マッキー達よ」

海藤が出て応対する。

「よう！弟たち。入れ入れ」

「今、お祝の相談をしていたのよ。」

あなたたちも混ざる？」

「お、いいね。で、琴美ねえさん。」

「今ね、シユンにいがためらったのってねえ」

「おいこら！人の心を読んで公開するでない！」

焦る海藤

「不和の元は取り去るべきです。えっとね

にいさんが買おうとしているのはねえ」

「琴美ねえさんへのプレゼントだよ」

「プレゼント？」

「あれ、ねえさん、忘れたの？」

「今日は、ねえさんの意識が戻った日だよ」

記憶を遡る。

集中治療室に向かう一同。

ベッドに横たわる琴美のそばに駆け寄る海藤。

「琴……俺がわかるか？」

ゆっくりと瞼を開き、静かにうなづく琴美。

「琴美さん！」「ねえさん！」

茉莉沙や、真己人も琴美の顔を覗き込む。

琴美は笑顔で、何か言おうとする。

「琴美さん、無理しなくていいのよ。」

大丈夫。意識が戻ったから、あとは徐々に回復するから。焦らないでね」

琴美は、茉莉沙の言葉に反応して、頭を動かした。横で、海道が号泣している。

「俺は琴美がいてくれるだけでいいんだ……なにもいらぬ。そばにいてくれるだけで……」

「皆さん、患者さんの体力が消耗しますから」

一旦お戻りください。あとは、また明日いらしてください担当の看護師が、皆を促す。

「あの……大丈夫……なんですよね？」

海藤が心配そうに尋ねる。

「ええ、峠は越しましたので、もう大丈夫ですよ。」

あとは、点滴を終えて食事ができるようになれば退院できますから」

「ほんとですか!!ありがとうございます……」

「シュン君、私たちも明日に備えて、戻りましょう。体力温存よ」

「そうだね。兄さん。今日はゆっくりしようよ」

真己人も海藤の背中をさすりながら、労わった。

茉莉沙、煤無、真己人、木菟、そして海藤はホテルに戻り、休むことにした。

「シュン君は仕事があるから、一旦日本に戻って」

冷静になった茉莉沙が提案する。

「え?やだよ。琴美と一緒に帰るよ」

「かいどつち、こつちは俺らがいるから。」

俺とマツキー、ズッキーで責任もって琴美さんを連れ帰るから。茉莉沙も仕事があるから

ここは一旦戻った方がいい。お前、仕事失ったら琴美さんのこと守ってやれねえだろ」

「……………」

「そうだよ。シユンにい。俺らのこと信用してくれよ」

木菟が海藤に頭突きしながら、じやれる。

「お、おう……そうだな。あとは体力回復待ちだつて

いうから、心配ないようだし。何より、俺が回復したんだから

絶対大丈夫だ……うん。よし」

「そうそう、その調子よ。信じていることが

琴美さんの回復に貢献するんだから」

「だね。じゃ、シユンにいとねえちゃんは

一旦帰国して」

すると、今度は煤無が挙動不審になる。

「あれ……なに、きよどつてんの？煤無にいさん？

……は、はーん。

わかったよ。僕も一緒に帰国するよ。ここは体育部に

任せよう。煤無にいさんとズッキーで琴美ねえさんを

守ってもらおうね？」

察しのよい真己人は、煤無の軽い嫉妬心を瞬時に読み取り

帰国メンバー構成を提案すると、煤無も安堵の表情を浮かべた。

「いやあく。俺もかなりのジェラリオンだけどきー

すつさんも、かなりだな。受ける」

海藤が煤無をからかう。

「はあ？別に俺、なんにも言つてねーし!!」

煤無がムキになる。

「はいはい、3・3で、丸くおさまるでしょ。

こつちには、弟俺ズッキーがいるし、そつちには弟マツキー。

心配ご無用！」

「別に心配なんかしてねーし!!かいどつちもまりさつちも

そんなやつじゃねえし」

「まあ、心穏やかじゃなくなるのは、理解の範疇だから

3人ずつつてことで、一旦帰ろうね。

あとは、帰国許可がでたら、すぐに戻つてきてよ！」

6人は二つに分かれ、一旦解散した。

若葉の実り（後半）

気になっていたのは牧田の件。

牧田の死因は胸部圧迫による事故死とされた。

牧田がホテルに戻り、酒を飲みベッドから落ち

落ちていたウイスキーの瓶に胸を強打したため、

胸部打撲が直接の死因ということになった。

日本人で同ホテルに滞在していた

茉莉沙達に事情聴取が行われたが、全員アリバイが成立し

検死の結果、事故死と断定。

情緒不安定で、薬を服用していた

妹の七香美は、兄の訃報を聞き、ショックで入院。

口がきけない状況に。

茉莉沙達は、退院した琴美を連れ帰国した。

帰国後、茉莉沙と煤無が結婚した。

二人の間にはめでたく子供もできた。

海藤もすぐに琴美と一緒になりたかったが

リハビリを終え、完治してから一緒になりたいという

琴美の要望を受けて、海道は待つことを決意。

弟たちも進路が決まり、皆それぞれの人生を

歩もうとしていた。

そんなさ中、突然、七香美が

茉莉沙達の前に現れ

「あれは事故死ではなく殺人事件だ」

と言い張る。

茉莉沙達の中に、超能力者がいて

そいつの仕業に違いない。

絶対あばいてやる、と騒ぎだした。

茉莉沙と真己人は、七香美の心を読み

何をしようとしているか探りながら、追跡を開始する。

どうやら、知り合いの科学者と法律家に頼んで

真実を暴こうという魂胆だ。

しかし、科学者も、何一つ確証がないため

現在の医学や化学では解明できないということ七香美に告げる。

法律家も同様。医学的に判断を下されたことを

覆すことは至難の業だと。

なにか、確固たる証拠がなければ立証されない。

その時、牧田の所持品で小型ビデオがあったことを

七香美は思い出す。自身の身に何かあった場合のことを想定し

牧田はつねに小型ビデオを持ち歩き撮影していた。

七香美はそのマイクロビデオを、科学者のところに

持っていき、解析を頼む。

すると、牧田が突然もがき苦しみ血を吹き

ベッドから倒れる様子が映し出された。

そして、マイクから録音された音声には

「あいつだ・・・あいつらが、超能力を使って

俺を殺そうとしている」

と、呻きながら悶絶している様子が確認された。

これは、大きな証拠になるのでは？と七香美が食い下がる。

茉莉沙と真己人は二手に分かれ、七香美の近くに潜んでいたため

これら一連の行動は既に把握していた。

すぐさま海藤に連絡をとり、マイクロSDカードの映像を消去する

よう

依頼した。

海藤は茉莉沙達から得た情報を元に、マイクロSDに意識を集中し
消去するイメージングで念を送った。

翌日、科学者が映像を確認しようとする

映像は、牧田が酒に酔ってベッドから落ち、胸をウイスキー瓶に強
打する様子に

置き換わっていた。そして、音声もただのうめき声で、倒れこんだ
だけのものに

なっていた。

七香美から連絡があり、立証について話をすると

科学者は、寝耳に水とばかり、映像の内容を説明する。

七香美は驚き、科学者の元を訪れ、映像をみて啞然とする。

科学者も、この映像は検死の結果の確証となるもので、なんら自然な点はないと

言い切る。

そんなはずは・・・と、半狂乱になり

その場で、鎮静剤を打たれ、再入院。強度の精神混乱をきたしているため

隔離病棟に入れられてしまう。

映像は海藤の仕業だとして、

科学者の意識変化のからくりは

煤無が科学者を催眠術にかけたのだった。

科学者は、大学で講義をしていたとき、木菟が学生を装って

大講堂に忍び込み、講師として教壇にたっていた、科学者を呼び止める。

科学者の研究について、兄がぜひ取材させてくれと言っている。

煤無は取材班を装い、科学者と会話をしながら

催眠術にかけることに成功した。

七香美と科学者が面会したときは、科学者が催眠状態だったため

映像の不自然さに気づくことなく、信じ込まされたことを七香美に説明していた。

七香美の発言は支離滅裂で、常軌を逸していると判断され

しばらくは隔離病棟から出ることではなく、薬物を投与されながらの長期治療という診断が下された。

こうして、波乱万丈な人生を送ってきた茉莉沙や琴美に平和が訪れすばらしいパートナーたちと共に、幸せな生活を送ることができるようになったのだった。

光陰矢の如し

Time goes past

時間って大切ですね。

そして、心のぬくもりは何物にも代えがたい
かけがえのないもの

人と人が見えない何かで

つながっている

縁ってあるんだなって

そんなことを思いながら

茉莉沙たちはゆっくと

新たな人生の歩みを進みはじめた

― 一旦完 ―

未来へと

くある日の茉莉沙の日記よりく

そろり

ゆらり

ふわり

浮かんでは消えて

つかんでは逃げて？

マゴイの夢

☆ミ☆ミ☆ミ

琴美のおかげで幸せになれた。

彼女と過ごした時間は短いはずなのに

ずっと昔から知っていたような

そんな錯覚さえ起こる

人を信じられなかった私

彼と出会って、人の愛を信じる

ことができるようになった

全身で私を受け止めてくれて

全力で敵に立ち向かう

そんな勇気を目の前で見て

聞いて感じて

心を許せることができる人に

出会えた

そんな出会いを助けてくれたのが

琴美とその彼、そして弟

大切な仲間たち

絆ってあるんだなって

愛って人を変えるんだなって

心から思えた日

私は生まれ変わった

ある日の少年からもらった
ひまわりの種

窓辺に植えたら

お日様に向かつて

どんどん伸びてきた

太陽という愛の光をふりそそいだら

天まで届く幸の花

愛はきつとそんなものなのね

根気よく水をあげて

見守っていたら

すすくすく正しい愛の道を歩んでゆく

人生つてずっと勉強だね

神様の元に行くまで

ずっと学び続けてゆくのね

すべて知っていることなどない

なにも得ないことなどない

生きるつて

学びの機会を与えられているんだね

もう、きみは卒業！

つてなつたら、天国から

お迎えがくるのかもしれない

どんなに想いの丈をぶつけても

届かないこともある

こんなにも思っていたらいつかは

届いてね

そんな願いをかなえてくれるために

全力で命懸けで私たちをフォローしてくれた

琴美には

金一封

なにをさしあげようか？

お礼つて気持ち物を表せない

そう、私たちが幸せになることで

琴美への恩返しができる

煤無さんは今日も

一心不乱に働いている

私もいつか自分のお店を持ちたいという

夢を叶えるために

協力してくれようとしている

そんな彼の想いにもこたえていきたい

人を信じられなかった

私と同じように

シユン君も

どうしようもないひねくれ者だったって

自分でも言ってたけど

琴美のおかげで

素直になれたんだって

琴美に

どんだけ拗ねてるの！どんだけわからずやなのよ！

茉莉沙にきいて、私の心の声を

通訳してもらいなさい！

って

怒鳴られたらしいわ

琴美らしいわね。

笑っちゃう

私たちの出会いは

二人の弟たちも

幸せにしてくれて

うれしい限り

木菟君も真己人も

ほんとうにいい子だから

がんばって

夢を叶えてほしい

願っていると

かなうんだって

邪な考え以外は

ピユアでまっすぐな願いは

必ず届くらしいわ

真心宅配便

正しく届いてくれるといいな

琴美の心が揺れて

またタイムトラベルを

しちゃわないように

私たちも協力しなくちゃね

さて

いただいたダックワースでも

つまもうかな。

明日も晴れるかな。